

水鶏度
二色散歩



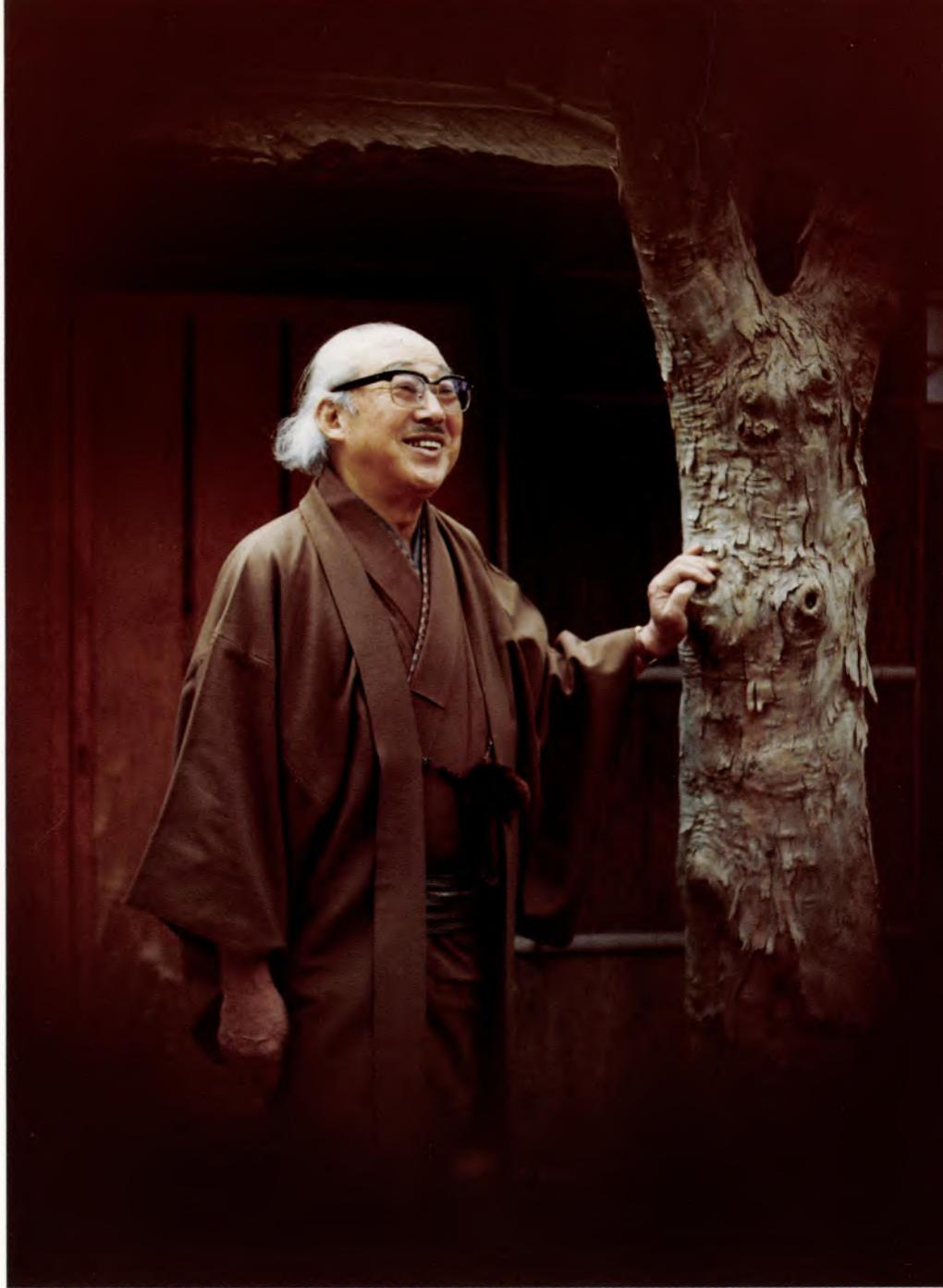
水鶴度

二八五
散步

水鶏度
三三三
散歩



S. Taki



著者近影

目次

序文	東野大八
真田祭	1
龍神温泉スケッチの旅	5
第六回全日本川柳大会参加と十日の旅	10
縁起	44
酒禅一味	46
母の日	49
過去	52
血液型	54
清楚なお別れ	56
謝々	58
紫煙の行方	60

やるまいぞやるまいぞ……………63

白 櫻 忌……………64

川 柳 塔……………67

脳 と 心……………69

句碑建立転々記……………71

銀行屋とビール屋……………78

柚子の里……………80

マ ナ ー……………85

或る難解句……………87

八月の空……………90

風 蘭……………93

みずすまし……………95

海潮温泉……………97

帽 子……………104

弔 辞	106
祖谷溪行	109
武雄温泉の一夜	118
旅の郵便貯金	120
陣中だより	127
ある日記	129
年 賀 状	131
日本のルーツ 幻の邪馬台国を求めて	137
第十四回 大陸川柳同窓会に出席して	150
白寿と母	156
祝 辞	159
一家三教	161
鮎美さんのこと	163
幹部候補生	166

海鼠と海月	168
虫明の宿	170
一笑一幼	186
噫 願生院文空葵水禪定門	188
初恋談義	190
柳々会小浜紀行	192
山陰紀行	200
喋らん漫才師	207
眼鏡談義	208
跋	213
橘高薫風	213
あとがき	217

序 文

葉さん……とこの一文を書くに当たって、そう呼びかけると、わたしはつい相好をくずして思わずニッコリしてしまった。

あたりの人は、みんな畏敬をこめて「葉先生」と呼んでいるけれど、わたしにとってはこの呼び方の方が、円満福徳を絵に描いたような、その笑顔とびったりなんだと思う。

だからこの人と会うたびに、心の中でそう呼んでいる。その葉さんが、その御人徳、お人柄のままに、心ゆくばかり暢やかに、楽しく描かれたコラムを集めたのがこの本である。どうぞ最後まで、気楽にお読み頂きたい。

一言つけ加えると、ここに収めたコラムの一つ一つは、麻生路郎主宰の『川柳雑誌』を、昭和四十年十月から改題した『川柳塔』誌の巻頭を飾り続けた達意の文章である。いつもこの本を開くなり、楽しく拝見したもので、そのいいところが一冊になったのだからこんなうれしいことはない。

葉さんは、昭和四十五年七月に発刊された『水鶏笛』という立派な句集がある。随ってこの本は、この人の第二番目の著作である。

『水鶏笛』には麻生路郎夫人葎乃さんが、実意をこめてあたたかく、その著作者の人柄を見事に描きぬかれたつぎのような序文がある。

「葉さんは常に柔和で、人づきあいもよくついぞ不機嫌な顔を見せたことのない人である。阪大の職を辞されてから間もなく召集をうけ、満州の野に三冬を越されて、運よく終戦を内地で迎えられ、昭和二十二年に八尾に製粉工場を創設して三転、遂に菓子製造メーカーとして、大阪商人の腕を発揮されるようになったのも、彼の性格が運んでいった当然のなりゆきであると思う。

或日、路郎と私が、彼の家を訪ねる用事が出来た。初めて会った奥さんがまことに気のおけない、にこやかな、肩の凝らない人であることがわかった。夫婦というものは、片方がお喋りだったら、片方が無口であるとか、たがいに逆の性質や性癖によって結ばれたコンビであると聞いているが、お二人は似たもの夫婦とお見受けした。こうした融和の仲で育まれた葉さんの句に暗さのあろう筈がない。常に健康で、明朗そのものである。事業が軌道に乗るまでは、幾

多の苦勞もあつた事と思うが、葉さんの句には、そうした深刻な面が見られない。彼の目はいつも明るい日向に注がれていて、特に女性の心理をキャッチした句が多く、怒りも悲しみも、彼には全く縁遠い感情であるかのようである。

幸福はその人の心にありとハッキリ言い切りたい心境を彼は持っている。そのかげにはいつもにこやかに融和してこられた奥様のあることを忘れてはならない。似合いの鴛鴦夫婦に未来永劫に幸福よ、続けかしとひたすら祈つて筆を擱く。

麻生 葭乃

右の一文はまるで葭乃さんが、わたしにかわつて書いて頂いたような名文なので、つい引用して失礼しましたが、ともあれ、にこやかな葉夫人美与子さんがこの二冊目の本へのおよろこびはさぞかしのことと思う。御亭主に劣らぬ、あのおふくろのような笑顔が、いまでもこれを書きながらあたたかく浮かび上がり気もそぞろになる。

最後に、水鶏庵葉の名による

一歩出ずれば我れ旅人となる心

という立派な句碑が昭和五十年、勝軍寺に建立されているが、この句にふれるたびに、わたしは弘法大師の“一足三礼”を想い、“歩歩清風興”の禅語に思い及ぶ。人間というものは、い

つの場合にでも、家を出るとき、旅に出るとき、仕事に出るときなどの第一歩は万事の始まりである。この人間生成の真髓を捉えた名句は、栞という人物の端倪すべからざるところと常に考えるわたしである。

この本はそうした、第一歩から第二歩へのこの人の人柄からする楽しい愉躍の心証によって描かれたものと信じて疑わない。どうぞ以上のような理屈は抜き、楽しく味読願いたいと思う。終わりに、栞さん御夫婦の寿齢ますますお健やかなる旺んなる未来を念じて、不束ながら出刊のお祝のことばと致します。

平成四年十二月吉日

東野 大八

真田祭

五月五日のこどもの日の朝から、僕は妻とこんな会話をして九度山町へ出かけた。

「これから九度山町へ行ってくる！」

「九度山町ってどこでっか」

地理音痴の妻の返事である。

「高野山の麓にある町で、真田左衛門尉幸村の閑居したところだ」

「知り合いでもおますんのかいな。それとも、兵隊友達でも」

「いやいや、そんなものはないが、僕が十二、三歳の頃からの友達がいるんだ」

「ヘー。初耳だな」

「そうだ。思い出せば僕が小学四、五年頃からの友達がいるんだ。猿飛左助君、霧隠才蔵君、由利鎌之助君、三好清海入道君というなつかしい友達がいるんだ。僕の近眼は、その友達のことを書いた立川文庫を雨縁で、日の暮れるまで、夕御飯にせかされ、親に叱られ叱られ読んだ幼な友達なんだ」

「ナント物好きだな！」

「もの好きは初めからわかっている。オマエと連れ添うたのからして物好きだ」

「一人で行かはって大丈夫だったか」

「大丈夫だけど、心配なら従いてこいや」

「今日は予定があつて従いてゆけまへん」

「じゃ、行つてくるぞ」

とカメラ一つもつて家をあとにした。JR大和路線を新今宮で乗り換えて、九度山駅へ着いたのが十一時四十分だった。

駅のホームは、六文銭（正しくは六連銭）の家紋の入った旗ざしものが林立して、真田祭と書いた提灯がぶら下り、今日の祭を盛り上げていた。

駅から七〇〇米ときいた真田庵は、紀の川の上流とおぼしき深い溪谷の川を二つ渡つてやや登り坂を上つて行くと、とうもろこしの焼ける匂い、蛸焼の店、鯛焼の店、氷菓子の店が軒をつらねていた。庵の中では、数十人の僧が白装束で般若心経を大声であげていた。僕は人につき当りながら史料館へ入った。いずこも同じ鎧、兜、刀、槍等を一巡して境内に出た。九度山町には喫茶店はあるのだろうが、今日は祭で店は閉められている様子で、喫茶もままならぬ町になっていた。丁度、昼になったから、町の商工会の婦人会が出している店に入って柿の葉寿

司でお昼をすませ、真田紐のバンドと六文銭の入った土鈴を買った。

「お客さんはどちらから来られました」

「信州は戸隠山からきました。私のルーツは戸沢白雲齋でござしてな。常々、幸村閑居の地を一度訪ねたいと思うておりましたが、今日はその思いを果しました」と頤の白髯をすごいた。「まあまあ、それはそれは、お遠い所を」と婦人会は仰山に驚いてくれたが、白髯の僕を、かの有名な白雲齋の子孫と思うてくれただろうか。果して白雲齋という名前を知っていたのだろうか。

久しぶりに少年に返った思いでいると、急にあたりが騒がしくなった。真田祭のイベント、少年武者行列が小学校から出発して町を練って真田庵へ到着したざわめきだった。それで僕も人垣の中に入った。第一陣は六文銭の旗さしもの隊、つづいて鉄砲隊、次は薙刀隊で薄化粧した少女が薙刀を小脇にかいこんで、仲々勇ましい格好で二十名程列を組んできた。

続いてひとときわ高く大きな幟が現れて、そこには真田幸村と書いてあった。高学年の中学生らしいのが、キンキラキンの陣羽織を着てシズシズと歩いてきた。また、槍隊、薙刀隊とつづいて、忍者姿の軽快ないでたちの猿飛左助と霧隠才蔵が前後してつづいた。次は坊主頭の鬘をきた三好清海入道と伊三入道がやってきた。穴山小助が陣羽織姿で現れるかと思うと、鎖鎌をもった由利鎌之助が来る。笈十蔵がやってくる。十勇士の前には一段と大きな幟が、それぞれ

の名前が書いてあった。久しぶりに返った少年の気分では僕は今一度、十勇士の名前を繰ってみた。がどうしても、九勇士しかない。猿飛左助、霧隠才蔵、由利鎌之助、穴山小助、三好清海入道、三好伊三入道、笈十蔵、根津甚八、海野六郎。

どうしてだろう。少年時代、とくとくと十勇士の名を考えずに言えたのに、今一人がどうしても思い出せない。真田大助だったろうか。いや、大助は幸村の息子だからそれは入らない。帰りに本屋へ寄って、真田十勇士という文庫本を五冊買って調べたが、右の九勇士しか載っていない。たしか望月某という名をかすかに憶えているが、それが果して残りの一勇士であるかどうか疑問である。ご存知の方は是非教えていただきたい。

陽はまだ高かったが、七〇〇米ある道を駆へと急いだ。道端に真田の抜け穴という木札があって、鉄の扉が固くしまっていた。手には柏餅の土産をぶらさげていた。帰って寢床の中で指を何回も繰ったり、文庫本をくっていた。

龍神温泉スケッチの旅

ちよつと変ったツアーに参加した。

昭和五十九年八月三十日午前九時大阪駅西口に停ったバスは、朝日新聞のマークをつけていた。このバスのタイトルは、奥高野と龍神温泉へという名のバスで、肩書には楽しいスケッチの旅と涼しい竜神スカイラインというキャンペーンがついていた。

ゾロゾロと乗り込んだ人々は、画板を抱えた者、画板を肩からかけた者で、ちよつとした芸術家スタイルの人々であった。こころみに添乗員のNさんに参加者の人数をきいてみると、男十一人女二十四人、内カップルが四組で、指導者の河本和子先生（光風会会員）を入れて三十六人という総勢だった。

渋滞の都塵をぬけて河内平野に出て、高野山頂、清浄心院へ着いたのが十二時であった。精進料理の中食を了えて庭に出ると、沙羅双樹の樹があつて、既に双樹をスケッチをする人があつた。

十三時にバスは発車して、芒の穂のなびくスカイラインを快適に走って、護摩壇山を十三時

四十分に通過して竜神温泉へ着いたのが十五時丁度であった。休憩後部屋割があつて私の部屋は三階の「あやめ」の間で八畳に四人であつた。明治四十二年生れが二人、明治四十五年生れが一人、大正六年生れが一人であつた。そして、必要道具をもつて三々五々宿をあとにした。日高川の溪流に下りてゆく人、橋に佇む人、ガードレールに腰かけて山々を遠望する人、と思ひ思ひの足場を作つてスケッチブックを拡げて絵の具をとっていた。

六時半が夕食だから、それまでに描き上げるよう申し渡されていた。私は常々スケッチが好きだが、どこから手をつけてよいか、構図のとり方、省略の仕方、などは非先生の絵筆を確かめたいものと狙っていたが、男物の古いベラベラのパナマをチョコナンと冠つた先生は、谿に下り、丘に上つて、スケッチをする人々を見て廻つて何かとアドバイスをしていた。私も描かないとアドバイスしてもらえないから、道端の石に腰をかけて、川向いの露天風呂を描いていると、先生が廻つて来て親切丁寧にアドバイスしてくれた。そして、先生の曰く「宿の女将さんは指導者の先生はアナタと思つていましたよ」と挨拶されたのには驚いた。例のカラシ色の帽子の下に白髪のウェーブがのぞいているスタイルは貧乏画家に見えたのであろう。

スケッチの見上げる空は既に秋

私は一時間余り描くと嫌になつたので、止めて露天風呂に入った。入湯料は二百円だった。風呂は河原の石を組み合せて些かぬるい細長い風呂だった。二〇〇円の値打は全然なかつた。

かてて加えて、虻が翔んで来て、肩先と左の腕を刺した。早々にして宿に帰って冷蔵庫のビールを出した。ビールは黒ビールで値段書に五〇〇円と書いていたのにはいたく感激した。十日程前に泊った羽合温泉のビールは七五〇円だったからである。そこへ芦屋のMさん、仁川のMさん、貝塚のIさんが帰って来た。そして次々にビールをぬいて罐詰を開けた。何のことはない、山賊の酒盛りという状況となった。

二階の夕食場へ下りてゆくと、私達は一番あとで、先生の横に四人の座が残っていた。ビールにジュース、日本酒が適当に出ていて鮎の塩焼、鯉の洗い、卵焼、山菜、高野豆腐、とりわけ珍しかったのは虎杖の和えもので、ナンとも素朴な味であった。

食後、部屋の片隅に添乗員のNさんと先生が陣どって、寸評をする段取になっていた。先ずNさんが、今日のスケッチを会員の方にむかって紙芝居のようにして差しあげると、耶馬台国の卑弥呼のような真赤なドレスを着た河本先生は「ここんところを省略してしましましょう」「空の色が秋の色ではありませんね」「川の流れがよく出来ています」と一枚一枚、Nさんがかかげる絵について批評されると、あやめの間の四十二年生れの二人は口数が多くて、先生の寸評に寸評を加える。笑いで何時の間にか、あやめ組というネームをもらった。

スケッチをされるような人達は、流石優雅で八時半には解散した。

ここの温泉は宿の内風呂が総檜造りの湯殿と、町の共同風呂と露天風呂の三つから成ってい

た。

寝る前の一浴びにと、檜造り内風呂へ下りて行った。丁度十畳位の湯槽と六畳位の洗い場で、浴槽は底も榎の木造りで清潔に掃除されていた。湯は「役の行者発見から、弘法大師云々」の効能書のある蛇口から、こんこんと落ちて榎から温泉は溢れ出ていた。自分は先刻入った露天風呂の仇討をここでもったような気がした。あやめの間へ帰ると、三人は布団にごろ寝して雑談をしていた。私は檜の風呂の優雅さと素朴さを激賞した。

クーラーをとめて窓を開けると、さしもの残暑もここだけは別天地だった。日高川のせせらぎの音が耳について眠れなかったが、何時しか夢路に入った。

六時に眼が覚めた。夕べの風呂が忘れられず早速楊枝を咬えて下りて行った。先客が一人あった。今度のツアー参加の一人の八十歳のお爺さんであった。昨日画板を抱えて橋で会った時は杖をついておられた。

あやかるように、背中を流しましょう、という夕べあやめ組の方に流してもらったから結構だと言った。そう言えばMさんは、そんなことを言っていた。健康法を訊ねたが、若い時に自彊術をやったが、今は別に之ということをしていねえや、自己流の体操位だろうかねと江戸っ子がとびだしたのは驚いた。

湯から上って川風に吹かれていると、床板の上にカナブンが仰向けになって死んでいた。

それから、今日のスケッチの下見に出かけた。吊橋の方へも行ってみた。温泉寺の方へも上ってみた。どこも余り景色が佳すぎて、絵ハガキのようなとり合わせであった。宿へ帰る道すがら、露草がブルーの色鮮やかに朝露を含んでいた。水引草の紅が目には沁みだした。自分は思わず水引草の一本を手折って宿の洗面所のコップにさした。朝ご飯に下りる時、仁川のMさんは「西尾さんがさしたの、風流ですね」とほめてくれた。

八時の朝食後、十一時半迄スケッチというスケジュールであった。自分は先ず郵便局へ行つて、例の記念貯金をした。そして温泉寺の樹影の坂の上に陣取った。

温泉の町の坂の下りの下駄の音

そこに境内の一隅につくばい（蹲）があつて、笕から清水が落ちていた。例の大菩薩峠の机竜之助が失明寸前、この奥の曼陀羅の滝で洗眼治療したところより引いてある清水だと、立札は物語っていた。

十一時半にバスは出発した。そして一時に高野の奥の院へ着いて各自食事をした。名刺交換から、私が川柳をやるということがわかつて

「先生！井上信子さんという人知っていますか」

井上剣花坊の奥さんのことかと思うと、京かがみの自転車の井上さんのことだった。

「私の元の姓は西尾ですもん、嫁いでMになってますけど、先生、なんとなく、なつかしい

もんですな」

自分の何時もよく言う、同じ故郷で男女同権（県）やな、なつかしいなアのお株をとられたような気がした。

帰りはもと来た道をスイスイと走った。そして河内長野をすぎて高速に入ると、今日の午前中のスケッチの寸評を昨夜のようにされた。あやめ組は疲れたのか、軽い寝息をたてて、寸評に半畳を入れてこなかった。

この閑静な山の出湯で、川柳和歌山と川柳新宮と大阪の各句会と合同で川柳大会をしたいものだと思った。旅館の名は下御殿だったが、五十名が目一杯限度であるのが残念に思う。やれば分宿でもせねばなるまい。

第六回 全日本川柳大会参加と十日の旅

(一)

昭和五十七年六月十三日(日)は日本川柳協会の第六回青森大会の日であった。五月の西日本常任理事会で、已むを得ない事情のない限り全員出席を申し合せた。飛行機で行く話も出たが、前日の東西合同常任理事会やエキスカージョンもあるので、近畿や北陸の理事の人達は、北陸

線回りの日本海一号か三号の寝台車を使うことにした。

僕は東北が未知の土地であり、そして名にしおう運賃の高い国鉄を使うのだから、ワイド周遊券にして、この際東北の中央縦貫旅行を思い立った。スケジュールをあれこれとたてて、交通公社へ相談に行くと、結局六月十一日十七時十五分発日本海一号を振り出しに、六月二十日十八時二十二分鶴岡発「きたくに」の寝台で、六月二十一日大阪着八時二十七分という十一日間の大旅行となった。

帰って来て、家内にスケジュールの話をする、僕が四国遍路で痛めた脚がまだ全治してない心配もあって、是非従って行くという。

「ホラ！ フルムーンとかいうて、上原謙と高峰三枝子のポスターが出てるじゃない！ あれで行きましょうよ」と勝手なことを言うて、西武百貨店で、およそ高峰三枝子と程遠い帽子を買ってくるやら、マミーカーを買ってくるやらして、旅の準備を始めた。

僕は一人旅の暢気さが大好きで、一寸迷惑だったが、国内とはいえ、十日も旅行するのに、ステッキ（杖）をついている現在では、家内の申し入れを快く受けるのが適切と思うた。看護兵兼輜重兵（マミーカー曳き）として同行を許した。

見送りもなく青森行は発車する

誰方かの句のように、青森行ブルートレインは七番線の淋しいホームから発車した。

発車二十分前に長女が色んなものを持って駆けつけてくれた。こんな時女は弱い。妻はもう涙声になっていた。

最近の寝台車は二段ベッドで昔の三段ベッドの不便さを笑って話した。娘の差し入れてくれた寿し萬の寿司を缶ビールでゆっくり食べても、まだ七時を過ぎなかった。夕刊を読み、週刊誌を読んでいるうちに何時しか眠ったらしい。五時半、秋田を過ぎる頃目が覚めた。外はもう白んで、初めて見る東北の山野は緑一色であった。

年金の旅の夫婦の寝台車

八時四十一分無事青森駅に着いた。マミーカーは平地に行くのに、妻が曳行してくれれば輻重兵という感じでよいが、駅のブリッジの上り下りには全く閉口した。両端を二人して持ち上げて、前後か左右に並列して、上下せねばならないので、常に一番後につかなければならなかった。なるほど夫婦とは車の両輪の如きもので、唇歯輔車の関係をつくづく味わって陸橋を上した。

駅頭には、なつかしい工藤甲吉さんのにこやかな顔がまばゆいまでに輝いて見えた。早速、青森グランドホテルへ案内して下さって、主催者中林瞭象氏その他の方々と固い握手を交わした。

一時のエキスカーションまでの時間を、本州最果ての青森の街をぶらつくことにした。そし

て、僕の旅行につきものの郵便貯金を先ずすることにして、駅前郵便局に入った。

ここで又又ハプニングがおきた。通帳と入金票を渡すと、西郷隆盛の孫のような眉毛の濃ゆい、目の大きい、ズングリムックリの局員が入金は致しますが郵便局の判は押せませんよと言う。そんな馬鹿なことがあるかと詰問すると、次官通達とかで、あそこの欄は判を押すところではないので今後は押してはならない、今までの間は間違いだっただから改めるのだと言う。郵便局の前に貯蓄奨励のポスターが貼っているのではないかと言っても、そう言う通達が来ているから私にはどうしようも出来ませんと、西郷さんが腹切る寸前のような顔をして陳弁之勉めるので、相手にせず立ち去った。そして、融通のきかぬ青森がいつべんに嫌になった。

青森駅頭は両側に高いアーケードを構えた良い商店街だった。津軽風、帆立貝料理の店が並んだ人口二十二万の青森の顔だった。

梅雨入り宣言した今日この頃ながら、ちょうど良い時候でホテルに荷物を預けた気安さに街を物珍しく歩いた。長武田という百貨店で昼食をして十二時半頃、集合場所へ戻るとバスが二台待っていた。

一番初めは棟方志功の記念館見学。独特の作品に魅了されて、次はねぶたの里へと車が走る。車を降りて森の中へ三〇〇米登ると、昨夏のねぶた祭で、市長賞、田村磨賞を獲った作品がずらりと大きな山の中腹のドームの中に飾られて祭ばやしに山にこだまして祭気分をおおって

た。見学を終えて再び車の人となると、今度は八甲田山の新緑へとつつ走った。アカシヤの白い花が真盛りで、何だか異国情緒充分という感じであった。カセットのガイドは八甲田山の雪中行軍を縷々と説明して山麓の茶店についた。ここから後藤伍長の銅像まで約二〇〇米の勾配であった。茶店では雪中行軍の悲劇の写真が掲げてあって、凍傷の凄さをまざまざと知った。四時半ホテルへ帰って、東西合同常任理事会が約二時間、決算と予算その他の件もスムーズに進捗して、六時の前夜祭に出席した時は満場既に二〇〇名近い人で一杯であった。

(二)

六月十三日午前八時に目が覚め、ホテルのバスを浴びると、旅心地がよみがえった。朝食は街の喫茶店でかるく摂ることにして、ホテルを出た。賑やかな通りを歩いたが仲々軽食喫茶が見つからない。ものの二〇〇米も歩くと狭い間口の二階の喫茶店が見つかった。ウインドにモーニングサービスと書いて、例のトーストとコーヒー茶碗が並べてあった。狭い階段を二階に上ると、客は誰も居ない。適当なところへ腰を下ろしてモーニングサービスを注文すると、今日は日曜日でモーニングサービスはしていないと言う。じゃ、致し方ないから、バタートース

簾をくぐった。ここでビール二本とホヤと帆立貝の寿司をつまんで昼食にした。青森はホヤと帆立貝がどうやら名物らしい。

会場へ戻ると十三時三十分の開会に間に合った。司会は、大手門歯科院長の波多野祥二氏（五楽庵）であった。胸のL字のバッジでライオンマン（332地区、元ガバナー名誉顧問）と知って固い握手を交わした。開会の辞は大会委員長中林瞭象氏であった。大会を前に去る五月八日、柳人後藤蝶五郎氏の子息柳允さんが、今日の日を待ちに待って、準備に懸命であったが突如として急逝された哀しい報告をされて一同肅然として黙祷を捧げた。次に日川協理事長藤島茶六氏の挨拶、教育長、市長の祝辞、祝電と型の如くセレモニーがつづいて、清興の津軽三味線に津軽民謡、紅い着物の少女の踊り曲弾きと遠来の客をもてなすのに主催者の御苦心の程が察せられる出来栄えて拍手、拍手のどよめきであった。

間もなく、本日の参加者は三〇一名であるが一つの欠番があったので、丁度三〇〇名であることを司会者から告げられて、愈々集句一題一四〇〇句入選八〇句という第一部入選句発表の幕がきつて落とされた。トップの選者は「北」の題で展望の時実新子、耶馬台国の卑弥呼のようなスタイルで登壇、日川協大会初めての女性選者の和やかな笑顔に万雷の拍手がつづいた。はじめ新子さんの姿が見えなかったもので、主催者はあわてていたが、プロペラ機でやっと到着したので一同愁眉を開いた。女性のあとの男性選者は影がうすい。しかも文部大臣奨励賞が新

子選の

花吹雪かえらぬ島が北にある

に決定して、新子のよろこぶことよろこぶこと。

「時事雑詠」「手紙」「母」「こけし」「笑う」と入選発表が続けられてゆくうちに、呼名は青森の〇〇、岩手の〇〇〇、函館の〇〇と、地名と柳名を並称される賑やかさであった。圧倒的に青森の〇〇が多かった。それは参加者に地元の柳人が多く、優秀作家揃いでもあり、熱の入れようも違っていた成果に外ならないものである。口の悪いのが「国体みたい」と言うたのはひがみであろう。西塚春魚氏の閉会の辞は、こんな最果ての地で、こんなに沢山の参加者を得たことは終生忘れることが出来ないと喜ばれ、来年の六月は伊豆の下田で逢いましょうと結ばれた。

最後は蛍の光の大合唱で感激の坩堝と化して会場を去りやらぬ思いであった。瞭象氏にお疲れを謝して手を握り返すと、瞼の奥にキラリと光るものがあった。

(三)

三〇〇人を六階から降ろす二台のエレベーターは仲々捗らなかつた。が外へ出ると、今晚も一泊する人、そのまま帰る人、飲む人等のグループが何時の間にか出来ていた。

蓮夫、甲吉、日満の諸氏と私の四人の歩幅がうまく合つて、駅前通りをポロンポロンと歩いてゐた。青森市も大都会と同じく、しゃれた料理屋は日曜日には休みで、甲吉さんのお気に入りの店も生憎休みであつた。迷うた挙句、小さな店の二階の階段を四人は上つた。

ここも日曜がたつて、親父が留守でお女将さんの包丁さばきとなつた。ここは昨夜、蓮夫さんが顔を出したところで、マダムと楽しいやりとりをしてゐた。ここでも、ホヤと帆立貝の刺身が出た。ホヤのあの独特の臭いには好き嫌があるだろう。三太郎さんは大変好きだつたと甲吉さんは言い足した。

左様、六時頃より十時半頃まで写真の通り二合瓶の林立は日満氏と葉。ビールは甲吉さんで水割は蓮夫さんという各々の好みで青森の最後の夜を楽しんだ。蓮夫さんを残して三人はとんちんかんの靴音をたてて階段を下りた。幸い、飲んだところはホテルの前だったので、ホテル

の割烹へ甲吉さんと二人入って最後の締めくくりをした。

「甲吉さん、青森は工藤姓が沢山あるね。パン屋もクリーニング屋も外科のお医者さんも、工藤だったぜ。川柳家にも甲吉さんに路子さんと、工藤祐経と何か因縁あるのかね」

「そりゃ、知らにやだが——とに角多いんだば、井上剣花坊が大正七年に北海道へ渡る途次、青森所見という前書で、

青森や工藤の苗字ここかしこ

という一句を残して行ったぞや」と工藤姓を肴にして話してるうちは心も確か、足も確かだったが、ビール二本に酒三本あけるころはそろそろあやしくなって、もう帰ろうと固い握手で別れた。それでも僕は三〇三号室の僕の部屋の前に佇っていたのには不思議であった。ドアのノックは回らない。ステッキの頭でトントンとノックを軽くした。軽くしたと思うているのは本人だけで、酒の勢いで相当な音であつたらしい。向いも隣も勘違いして、酔眼朦朧の中に変な顔が三つも四つもドアからのぞいたのにはびっくりした。

女房は丁度入浴中で、腰タオルの佩でおそるおそるドアを開けた。

「友、遠方より来たる、又楽しからずや」

先んずれば人を制す、先ず二度と来ない青森だ、久しぶりの遠来の友だ、という言い訳のかわりに「友、遠方より……」を繰り返すと「それは工藤さんが仰言る言葉なの、アンタが酔う

た言い訳に使う言葉じゃないの」

「なに！ 工藤さんが言おうと、俺が言おうと同じやないか。馬鹿にするなッ」というてシャワーへとびこんだ。

大阪駅を発つ時、娘が呉々も言うた。

「喧嘩しなはんなや。旅に出て喧嘩したらみつとむなあつせ。仲ようしなはれや。折角の旅行だつせ。ええ歳して喧嘩せんときなはれや」というて手をふつてくれた顔が目には浮かぶ。

シャワーから出ると機嫌は最高、ベッドへゴロリとなった。

それからがハプニングだった。状袋になった上の毛布を力まかせにめくって、力余って転んだのか、寝返りうってベッドから落ちたのか、判然としないが、とに角ベッドと椅子の間に大の男がはまりこんで思いきり、ものも言えんほど脾腹をうった。もうこうなると喧嘩どころの騒ぎじゃない。どうして起きたのか、起こされたのか、とに角、朝目が覚めるとベッドに寝ていたのはよかったが、肋骨の一番下の辺りに鈍痛があるし、背中に鋭痛感がある。空元氣を出して、九時の恐山行におくれじとロビーに下りた。良い具合に日満、吉三両氏と前後して落ち合った。

十和田観光タクシーの中型車が時間通り九時に来て、助手席に栞、あとの三人は後部席にしてホテルを發った。今日も良い天気であった。車は陸奥湾の南海岸沿いに一路東へ東へと走っ

た。そして野辺地という一寸した町に出て、ここから陸奥湾の東海岸、はまなすラインをむつ市へ走るのであるが、ここで先刻から、日満さんが話してくれていた、郵便貯金の道楽が頭を擡げた。一昨日青森で断られた許りだったので意欲喪失していた矢先であったが、野辺地という名の郵便局は二七九号線沿いであつて、何だか組し易しと思えたので、運転手にストップをかけて、局へとび込んだ。この係は女事務員で、青森の西郷ドンの孫のような言葉を吐かず、ニコニコとして受付けてくれた。私は青森の話をしようかと思つたが、却つて蝮蛇になつても思つたのでやめた。車へ戻ると首尾を心配していた労組の連中の如く、異口同音に結果をきいてくれた。そして上首尾をよろこんで、次々と通帳を回覧してくれた。

当然の郵貯よろこぶ変なこと

(四)

車はヒバの天然林を走りつづけた。

途中、長寿の泉があつて、親切な運転手は車を止めて説明してくれた。みんないい年をしていながら、長寿の水を柄杓で何杯も飲んだ。若い運転手は一杯しか飲まなかつた。

間もなく恐山に着いた。

雨がポトリと落ちて来たが、それ以来落ちてこなかった。

日満氏はフィルムを入れ替えた売店から出て来て、大いにボヤいていた。どうしたのかときくと、鳥取のカメラ屋でフィルムを入れてもらった時、電池の十と一と間違えたためフィルムが途中で回らなくなったのだ。カメラ屋ともあろうものが十と一とを間違えるとは何事だというボヤキであった。

三途の川を渡って恐山へ入ると、昨日大会で会った山本宍道郎氏と山崎凉史氏と、もう一人の柳人とバッタリ出会った。三氏は昨夜のうちに野辺地まで来て一泊して、今朝の一番のバスで恐山へ来たということであった。恐山は流石、死の世界を思わず、空々漠々たる白い石灰の山で、所々に硫黄が吹き出してきつい臭いと鴉の鳴き声に屢々足がすくんだ。

恐山鴉は白い声で鳴き

ところどころに立っている地藏さんは、赤い頭巾を冠り、白い着物を着て異様そのものであった。血の池地獄の横に、賽銭箱が放り出されていて、一円アルミ貨が沢山の中に五円、十円の硬貨が混じっていた。賽銭泥棒が一円許りのアルミ貨に愛想をつかせて、捨てていったのだろうと五人は口々に推理した。上れば下る、下れば上る、一木も一草もない白一色の恐山の風景は、マコトに寂漠としていて迎も一人では行けそうもない行く手であった。間もなく直径二キ

口という、カルデラ湖宇曾利湖が目の前に展開した。ここの北岸は硫黄の煙が立ちこめていたが、南岸の碧い水は生氣をとり戻させてくれた。

ここ、恐山はかの有名なイタコの口よせ（霊媒）の行われるところで、家内は是非、死んだ次女玲子と話したいと期待していたが残念なことに一人のイタコも出ていなかった。運転手に訊ねると、ここはむつ市で目下、むつ市の観光課とイタコの組合と係争中で、七月の大祭以外はイタコは出ないそうである。つまりイタコが市へ納める金額のことで、もめているらしいのであった。地獄の沙汰も金次第を地であった話に、全く恐れ入り山であった。

昼食は約一時間程遅くなったが、帰り道の薬研温泉の観光ホテルで摂ることにした。薬研温泉は薬研溪流に臨み素晴らしく、紅葉の頃の景観はどんなに佳いだろうと思わず所であった。温泉入浴を割愛して、元来た道を新緑を縫いながら走った。車中は殆ど吉三さんが一人で喋っていた。大変な博学の士であることに一同は感心した。吉三さんは東北本線に乗って宮古に出て、三陸海岸を廻る予定だと言って、国鉄野辺地駅で袂を分かった。

小学六年生の読本に「海が見えた、浅虫の海だ」というところがあった。当時から、憧憬れていた私は、だから今夜はその浅虫の温泉で泊ることにしてあった。車を東奥館の玄関につけてもらって日満さんとここで別れた。日満氏は明日は津軽半島の竜飛岬を回って帰宅する予定だと言った。

東奥館は曾て天皇、皇后両陛下の宿泊されたという宿で昔ながらの宿であった。部屋へ通ると楠公父子の桜井の別れの屏風があった。十二畳と六畳の間で隅に炬が切られてある落ち着いた私好みの部屋であった。三ッ指ついて挨拶に来た五十がらみの女中さんは和服を上手に着こなしていた。ここの女将さんかと思つたが、女将さんは洋服を無雑作に着てフロントに佇っていた。

ここの温泉は窓一つないドーム型の廊下のような湯舟であった。さっきの女中さんが挨拶の時に言つた自慢のローマ風呂で、ところどころに石の彫刻のキリスト像が立って手を上げていた。昨日の傷口を温泉で温めると、大変良い気持ちになつた。手拭をぶら下げて、部屋に戻つて、卓袱台に座ると、見たような顔が前に座っていた。よくよく見ると家内だつた。

或る人は言う。夫婦で旅行すると、家庭の延長みたいで少しも感激がないと。正に然り家庭の延長だ。或る人とは僕だったかも知れない。今夜もホヤと帆立貝の刺身であつた。

青森の旅ホヤの匂いがつきまとい

(五)

十和田湖行のバスは浅虫駅の広場から出た。五、六人の乗客の中には鞆とシヨッピングバッグを両手に持った私等より十歳位若い夫婦が乗っていた。多分、私等同様年金夫婦であろう。バスは浅虫海岸に沿うて走ると、青森市内へ入った。相変らず、工藤のパン屋の看板が目に入った。市内をぬけると、八甲田山を目指してバスは走った。途中山腹に白いものが鈍く光っていた。車の人に聞くと残雪であった。このバスは浅虫から十和田湖行の定期バスであったが、一寸した観光的な配慮と説明もしてくれた。間もなく酸⁺ケ湯へ着いた。この温泉で十分許り休憩した。酸ケ湯温泉はこの地方の湯治場として有名な鄙びた温泉である。酸ケ湯温泉旅館というのが一軒あるだけで、この温泉は男女混浴の木製の千人風呂で有名だ。

混浴風呂と言えば、決して見通がささない僕だが、バスの都合で遂に入湯を割愛した。

混浴と聞いて眼鏡のまま入り

史好

という句は近眼の僕も同感だ。

バスは間もなく発車して七曲りを下ると、蔦温泉に着いた。ここも宿の数なら一軒で、バス

停の広場に小さな池があつて、大町桂月の歌碑があつた。このあたりの開発には桂月先生の力が大いにあつたそうで近くに桂月の墓もある。ここでも約十分休憩してバスは奥入瀬の入口十和田湖温泉郷へ入った。ここまで来ると人間の数も増えて、奥入瀬の遊歩道を歩く人の列の続くのが車窓から見えた。

今度の旅行は殆ど日本交通公社委せだったから、この奥入瀬の遊歩道をどの時点で歩くのか全然わからず、バスに乗ったきりで遂に十和田湖畔の子の口に着いてしまった。然しバスは時々停車して、窓から奥入瀬の溪谷美を説明してくれた。即ち白絹滝、白銀の流れ、玉簾滝、不老滝、九段の流れ、銚子大滝、千両岩、等々と旅の目をよろこばせてくれた。

子の口に着いたバスと、十和田湖遊覧船とはうまく連絡して、すぐ船の人となった。バスで一緒だった御夫妻も矢つ張り船でも一緒だった。同船の団体の女の人達は甲板に出て十和田湖の湖の色が変わるかと思うほど喧しかった。私はこの喧騒を避けて罐ビールとおつまみで一人、今日の新聞を船室で読んでいた。そして、路郎先生の

十和田湖よみな酒になれ旅人へ

という句を思い出していた。

六月十五日という梅雨の最中であるのに、今日もまた素晴らしい天気であった。半時間余で遊覧船はキラキラと水尾を長くひいて休屋へ着いた。ここで今晚の旅館パークホテルというマ

イクロバスに乗ってホテルに入った。ここは団体専門のホテルらしく、既に北海道からきた高校生の群が廊下をのし歩いていた。

修学旅行ズーゾー弁で横行し

靴と手曳き車をホテルに預けて早速湖畔の散策に出た。良い具合に郵便局の前に出たので、早速ドアを押して入って貯金の手続きをとった。さて局名の判をどうしてくれるかと思っていると、若い局員は、青森県十和田湖郵便局というゴム印を私に渡して、どうぞお客さん勝手に捺して下さい。『私は止められているから、捺せませんが、お客さんが勝手に捺したと言えはそれでよろしいから』と言うたので私は、そのゴム印を捺した。余りにも余りにも役人さんの拘子定規なのに恐れ入った次第である。ともあれ目的を達したのだから文句をいうことはない。局を出て振り返ると入口の右手に、このことの顛末を長々と貼り出されていたのは二度恐れ入った。

土産物店の間を行くと、秋田名物きりたんぼという旗がヒラヒラしていたので、早速買うことにした。十和田湖は青森県と秋田県と入り込んでるので、青森県内で秋田県の名物売ってはおかしいと思うたので、ここは何処ですかと、きりたんぼの箸をもったまま、訊ねると、売り子は秋田県だと即座に答えた。「成程、それであなたは秋田美人だね」というと「いえ、それでも」という返事が返って来たのには恐れ入った。今日はよく恐れ入る日だと思っ

た。

湖畔を奥へ進むと、有名な乙女の像が夕闇の中に立っていた。乙女の像をバックに撮ろうとしたが、敷石内へ入らないで下さいという立札が立っていた。逡巡していると、老若の団体がやって来て、立札などしっちゃいまいという振舞で撮って行った。赤信号みんなで渡れば何とやらで、私等も敷石の中へ入って三、四枚も撮った。

湖の神秘乙女の神秘夕陽が沈む

(六)

昨夜の東奥館の泊りが表なら今夜のパークホテルは裏であった。それでも一階の十和田湖に面した部屋で眺めは上々であったが、下宿屋と言えば言える部屋だった。文句言いの僕には肚にすえかねて、大変な部屋だね、とこぼすと、十日間の旅のうちには、いろんな旅館もありますよと諦めの良い家内は、文句言うのと罰があたりますと言わん許りに言うて早く風呂へ入ってらっしゃいと言うたけれど、先刻の高等学校の生徒を思い浮べると、温泉でもない大衆浴場へ入る気がしなかったので、そのまま床をとらして、シャツの上から浴衣を着て寝てしまった。

生憎、夕暮から季節風が強く、眺めのよい筈の部屋の窓は、風の音で眠れなかった。禍福あざなえる縄の如しとはよく言ったもので、昨夜のたたりが今宵の宿に出るとは、いやはやと眠れぬ眼を閉じて、一から百までの数を反対に百から九十九、九十八、九十七とよんでいるうちにいつしか眠ってしまった。

翌十六日は、予定表では弘前へ行く日だった。弘前の弘前城は桜の頃のがれの土地で、太宰治が青森県の県庁の所在地をお城下の弘前市にせず、成り上りの青森市にしたことを大いに憤慨したところであり、八尾市に在住した今東光の故郷であり、曾ての明和病院時代の弟子三上芙路さんの故郷でもあったので一度は訪ねてみたいと思ったので、あと戻りのコースではあるが組んでしまったのである。そして、青森は「ねぶた」で、弘前は「ねぶた」である。その気骨も嬉しかった。

親切なパークホテルのボーイさんは私等のためにマイクロバスを弘前行きのバス停まで走らせてくれた。バスはたった二人を乗せて十和田湖の回りを $\frac{2}{3}$ 周して、大鰐温泉を通り黒石温泉郷を通って、正面に岩木山が厳然と聳ゆる街道に出た。昨日は十和田湖を船で渡ったが、今日は十和田湖の周囲を心ゆくまで半周いや三分の二周して新緑を満喫したことは今度の旅の一大収穫であった。

十一時五十分、約十分早く弘前に着いた。ここでもう一度、工藤さんと会う約束であったの

で、バスを降りて、あのにこやかな工藤さんのお顔を探したが見つからなかったのでターミナルのトイレへ行って戻ると、工藤さん、福沢さんと誌友の田中叶さんの晴やかなお顔にバッタリと出会ってホッとした。

弘前は青森第二の都市で流石に賑やかだった。四ツ辻に大きなビルが工事中だった。このビルは本屋の紀伊国屋のビルで他の書店から随分とクレームがついたが、この通り出来上りかけていた。文化都市弘前の面目が躍如としていた。

昼食を老舗のような昔ながらの二階でいただいた。食後、郵便局の話が出た。福沢さんはそれではと車を弘前本局へ着けてくれた。何の文句もなく記念貯金の出来たのは流石お顔だと感心した。

それから待望の弘前城へと車が走って、よく晴れた空に天守閣を望んだ時は、嬉しさがこみ上げてきた。この朱塗の欄干の橋から満開の桜を通して撮された天守閣は曾てのイメージからは程遠く少し期待はずれであった。

それでも公園になった弘前城趾の悠揚迫らざるたたずまいは旅の心に嬉しい印象となった。十六時まで林檎園等を見物して、十六時二十九分弘前駅発の急行津軽二号に乗って大館で「よねしろ四号」の花輪線に乗換えて、今夜の宿泊地湯瀬に着いたのは十八時二十分であった。

大体、鉄道の線の名は、起点の地名と終点の地名をとって名づけてあるのだが、この花輪

線の名は、大館と盛岡の間にある陸中花輪市という名前をとってあるので少々戸惑った。

湯瀬の駅には今夜泊る滝の湯温泉ホテルのマイクロバスが待っていてくれたので幸いだった。

宿の名のマイクロバスは有難し

この温泉も交通公社委せの宿で、余り有名でない温泉だけに、何だか物淋しい旅館であった。

入口に熊の檻ある旅館かな

それでも廊下を上り下りしてゆくうちに、溪谷に面したベランダ付の二階の閑かな部屋へ通された時はホッとした。

早速地下室の円形の浴湯に一人身を沈めると、旅の疲れが溶けてゆくようだった。間もなく若い毛深い男の人が入って来た。前後して湯から上り、部屋に戻って一息いれていると、家内も上って来て「新婚さんという女の人と一緒だった。マイカーで新婚旅行に廻っている青森の人だという」話をした。では先刻の男湯であった毛深い男が、お婿さんだったのだと察した。女共はすぐに喋って心易くなり、何処から来て何処へ行くのだと余計なことを話し合うものだと思った。

温泉で旅の女はすぐ馴染む

二階のベランダから米代川を見ていると、釣人が二、三人岩の上に立って竿をふっていた。

食膳に毛蟹が出た。大変おいしかったことを今でもおぼえている。もうここでは、ホヤの刺

身は出なかつた。青森をはなれたなアと思つた。女中さんに、ここは秋田県だねと念を押すと、言下に「そうです」と答えて、私は秋田美人ですと言わぬ許りに秋田の言葉強調した。

朝、廊下の窓から下を見ると、親仔の熊が檻の中を歩きつ戻りつしていた。

何にもない淋しい山の温泉町だった。

温泉の出る郷であり熊も出る



この度の旅行で工藤さん、福沢さん、田中さんに大変お世話になりました。茲に篤く御礼申し上げます。

(七)

滝の湯旅館のマイクロバスで湯瀬駅まで出る。この駅から八幡平行のバスが発車するのである。湯瀬駅の売店で朝日、読売の新聞を買う。旅に出ると案外新聞はゆっくり読めぬものである。せいせいロビーのソファで拾い読みする程度で、今日は久しぶりで、ゆっくりバスの中で読む楽しみに心が躍った。田舎のバスにしては案外正確に八幡平行のバスが発車した。八幡

平と書いてあるから、平と読むのかと思うていたら、平をダイと読むそうだ。バスは田園を走り藤七温泉をぬけ、山に入り谿を渡って十一時半頃八幡平に着いた。バスの終着駅から頂上の休憩小屋まで、バスの運転手さんは親切にも、荷物を石段を上って運んでくれたのには感謝した。東北の人の親切はかねがね聞いていたが、実際に会って感激であった。

小屋の辺りは随分と雪が残っていて、雪の屏風が立っていた。観光バスが三台止まっていて、ツアーの婦人の人達は雪を食べる人、雪をバックに撮す人、で大変賑やかであった。

ここは十和田・八幡平国立公園で、自然の姿がそのまま残った優秀な景観であった。地下室のうどんやで生ぬるいうどんを食べて中食にした。

十二時三十分盛岡行のバスの人となる。牧場や、ところどころに水たまりのような池や沼や湖を右に左に見て二時過ぎ北上川の橋を渡って盛岡駅に着いた。北上川という名は、啄木の歌やわらかに柳青める北上の

崖辺目に見ゆ泣けと如くに

を思い出して、緋の着物時代をなつかしんだ。盛岡駅は、もう十日程で新幹線がオープンするといふので新幹線らしい駅の装いで、セメントの匂いでプンプンとしていた。

ここで駅前郵便局を探して国道を横切った。この郵便局でも十和田湖の郵便局同様、盛岡駅前郵便局の判を自分で捺した。何だか官僚日本の国が嬉しくなってきた。

急行八甲田は定時に盛岡を發して、三時二十分に花巻に着いた。有名な花巻温泉は、ここからバスかタクシーで二、三十分離れたところである。ウロウロしているうちに、バスもタクシーも出てしまった。ままよと駅前広場につくねんと佇っていると、花巻温泉とだけ書いたバスが来たので、それに乗ろうとすると、このバスは花巻温泉に行くことは行くが直行しませんよという。へんな顔していると、「まあ乗るべエ」というので、わからぬままに乗った。先に乗っていた女の人が二人間もなく降りると、よく似た女の人が三人程乗って、駅前の商店街をぐるぐる回って段々と女の人を沢山乗せていった。察するにこのバスは花巻温泉の旅館やホテルの専用バスで、各ホテルや旅館の従業員を送り迎えをするバスであることがわかった。花巻温泉の大きなホテルの殆どは、かの有名な小佐野氏の経営になるもので、こんなバスが何台も従業員の退勤に動いているのであった。花巻温泉の町の中程で郵便局を見つけたので、僕だけ降りて用をすませた。局名の印は局員が捺してくれた。

今度の旅行の旅館のハイライトは今夜泊まる佳松園だった。渡り廊下を幾つか渡って、奥まった赤松の庭に囲まれた文字通りの佳松園の部屋に入った。

「ここなら、お気に入りですね」と家内は皮肉にも言って、自分も嬉しそうに笑った。

数奇屋風の部屋は綺麗に掃除されて、三つ指ついた女中さんは、何かと部屋の案内をして出て行った。

大理石の大きな丸い湯船からは赤松の枝ぶりが面白く眺められた。大臣か大富豪になったような気持で、今日の倅せを嘔みしめた。夕食の料理は部屋にふさわしい洒落た料理でお銚子のお代りを二回した。

然し食後の街の散歩は実に味気なく、見るところもなく、遊ぶところもなく、早々にひきあげて部屋に帰って、旅信を書くことにした。ここに来て初めて旅便りを知人や友人に書く余裕が出来たのであった。

一泊で惜しい宿を九時に出て、花巻九時四十八分くりこま2号に乗ると、十時二十七分に平泉に着いた。

今度の旅行の目玉は十和田湖と中尊寺であった。列車、旅館、バスのすべてを周遊券に組んであるので、駅前の中尊寺行のバス乗場に、今日もまた晴れ上った空をほめて佇って待った。然し時刻表の時間がきても、待てどくらせど、バスがやってこなかった。不思議に思つてタクシー乗り場へ行くと、運転手は「今日からバスのストライキに入ったところだ。先刻から見えていたので、教えてあげようかと思つたが勧誘するようで、いやだったから見ていたのだ」というてくれた。それでその縁でこの黄色いタクシーに今日のコースを頼んだ。

(八)

人間万事塞翁が馬という故事がある。バスのストライキに遭うて、タクシーに已むを得ず乗ったのが今日の観光の最高の福の方であった。

タクシーは先ず高館の前に止まって、グラダラ坂を義経堂へ登った。ここは観光バスから除外されているところで、特別に車が回ってくれたのである。高館は、たかだて、はながんだて、又ほうがんだてとも呼ばれ、九郎判官義経の居城の跡であり、義経最期の地と伝えられている。義経堂には義経の木像が安置されていた。この台地より北上川の長流を眼下にして衣川を合せて南に流れていた。遥かに衣川の古戦場が一望に出来る高館であった。高館案内のしおりの中に、ああ平泉という題で

花の都のおもかげ慕い

こころみちのく平泉

九郎義経安宅の関に

しのぶ静の舞扇

という一節があつて五番まで載つていた。義経堂の裏へ回つて、懐古に耽つてみると、松林の中で、はや松蟬が淋しい声で鳴いていた。

そこを出発して平泉の中尊寺へと走る。曾て家内は、或るツアーで中尊寺へ来たことがあり、駐車場から金色堂までの往復のきついことを車の中で、しきりに話をしたが、車は心得たもので、横道の裏山をグングンと上つて金色堂の横へ着けてくれた。ここらが、タクシーに乗つたラッキーなところであつた。

五月雨の降り残してや光堂

有名な芭蕉の句のイメージで暗い金色堂を想像していたが、梅雨とは申せ、よく晴れた今日の覆堂の中の金色堂は流石、国宝の貫禄を示して極楽浄土の善美を表わしていた。

もつとも、芭蕉の時代は金色堂は覆堂もなく雨ざらしの光堂だったのかも知れない。

平泉の中尊寺は東北一の観光地であるだけに、参詣者は踵を接して旧覆堂、讚衡藏、中尊寺本堂と、上ってくる人、下つて行く人、団体さんと流石賑やかなものであつた。

良い具合に左右の土産物を眺め、ダラダラ坂を下つて、最後の石段を下りると、先刻のタクシーがチャンと待っていてくれた。

それより毛越寺へと車が走る。この寺の呼名を、自分は最初、けごし寺と読み、次に、もうえつ寺と読んで、運転手に、もうつつう寺と訂正された時は、地名、人名の読み方の如何にむず

かしいかを悟った。

この寺は、かの有名な人口に膾炙されている、芭蕉の

夏草やつわものどもが夢の跡

の句碑のある寺で、本碑と副碑が二つ並んで建っていて、左の低い碑が芭蕉の真筆を刻んだものであるが既に風化も甚しく判読に困り、それで、右の方へ、読み易く彫刻されて、文化三年に建てられたものである。毛越寺も仲々立派なお寺で、舞鶴ヶ池に今を盛りの、あやめが咲き揃う庭園もあった。

毛越寺を發つて、巖美溪に着いた。沢山な団体が来ていて、溪谷の岩に老若男女が散らばっていた。メガホンを持った老人が、岩の上にある小屋の中から大きな声で人々に注意を与えていた。年々何十人かの人々が、岩に足を滑らせて下の谿へ落ちて命を落とすとのことで、この爺さんが見張番に立っているという。ここで大変喜ばせてくれたのは、この峨峨たる谿をはさんで向うの茶店と一筋の綱で商売をしていることであつた。

即ち茶店と小屋との間に綱が一本渡されてその先に籠をつけて、その籠の中へ三〇〇円を入れて合図をすると、その籠はするすると向う岸の茶店へ届いて、間もなく籠の中へ餡や黄な粉の五本の串団子が紙函の中に入れて、かえってくる仕掛になっていた。それが珍しくて、面白くて、自分も皆にならつて、三〇〇円を籠の中に入れた。

串団子谿を渡つた味となり

駐車場に帰つて車に乗ろうとすると、良い按配に郵便局が見つかった。之は天の助けと早速とびこんだが、ここは宮城県の話か、局員氏はニコニコとして判を押してくれた。先程の巖美溪という名が、貌鼻溪という名と間違え易く、はっきり憶えていなかったもので、件の郵便局で押しもらった貯金帳を出してたしかめると、巖美郵便局という判があったので、巖美溪ということを確かめた。

タクシーと北仙台で別れて仙山線に乗り、今夜の宿泊地天童に出た。天童市は天童温泉のある所で、期待して下りたが、そんな気配のしない八階建の滝の湯ホテルという名の六階におさまった。宿は団体客で遅くまで喧しく、全く旅情も何もない阿呆みたいな泊りであった。

団体と泊り合せた老夫婦

ここに泊ることにしたのは、この天童市に曾ての取引先の米屋さんがあって、一度会つて久闊を温めたかつたからである。

宿から電話をすると、早速やつて来て、何かと昔話に花を咲かせた。

ここは有名な将棋の駒の産地であったが、昼の市内見物をしなかつたので、そんな店を見ることが出来なかつたのは誠に残念であった。それで出発間際になって、宿の売店で、記念に黄楊の彫り駒を一箱買って鞆の中に入れた。

売店で買うおみやげは時間ぎれ

(九)

天童温泉の宿から、五十歩の所にバス停があつて、そこから山寺行のバスが出ていた。待つことしばし、約四十分程で山寺の入口に着いた。停留所の前の茶店「いずみや」へ荷物を預けて、愈々あこがれの芭蕉の「閑かさや岩にしみ入る蝉の声」の句碑のある山寺へと杖をひく。

石段は千十五段あるそうだが、行きさるかどうか心配しながら、一、二度息継ぎ休止してやつと蟬塚まで辿りついた。ここに有名な閑かさやの句碑がある。芭蕉もここで息切れしたらしい。立石寺りっしやくじ（山寺は俗称）まで丁度半分の道のりである。ここに小さな茶店があつて婆さんが二人、蟬ならぬ声で山形弁で話していた。チットも解らない。ここで元氣づけのオロナミンドリンクと菟藟の串さしをほおぼる。時候が早いので、蟬は鳴かない。蟬は鳴かなかつたが手拭やのれんになつて茶店にぶらさがつていた。

閑かさやのれんの蟬はつんぼ蟬

有名な句碑は既に風化甚しく、別に「蟬塚」の一石柱を建てて、蟬の声を偲ぶよすがとして

いた。上を見上げると、赤土の山道が岩を嚙んでそそり立っていた。

「どうする？」

「どうしやりますか？」と

もう、この辺でユーターンしたいそうな、お互いの言葉に上を見るより下を見ようと下山することにした。だから立石寺の本堂までよう行かず、蟬塚までの山道を、中村汀女吟の

石段の一つ一つの青葉かな

を上り下りして、河東碧梧桐吟の

水菊の花や慈覚の露の降る

の句に合掌し、水原秋桜子吟の

四山晴れ山寺のみぞ梅雨の雲

の景色を満喫して、元の茶店へ戻って、そこで竹の子めしと天ぷらでビールをのみ、婆さんは、とろろそばを食べて、山寺駅発三時五十七分の列車で千歳、あまらめ余目、と二回乗り換えて十七時十分三分に鶴岡駅へ着いた。

今日の宿は湯の浜温泉の亀屋ホテルになっている。タクシーを待っていると、年配の婦人から湯の浜行の相乗りを申込みました。同行をすると婦人は今日湯の浜温泉のS旅館で同窓会があるのだが遅刻したので大変助かったと大いに喜んでくれた。湯の浜温泉は今度の旅行の最終の

宿で、交通公社委せの旅館だったが素晴らしい良い旅館だった。「ここならお気に入りでしよう」という家内の皮肉な言葉に、十二畳の部屋の本床を背の座椅子にアグラをかいた。窓の外は日本海が展けて碧い波が見えるが耳ざわりな波の音はなく、閑かな明るい部屋は最終旅館としてゆっくりとくつろぐことが出来た。

旅十日やっぱり妻にある帰心

今日で愈々最終コース、湯の浜温泉の朝湯にゆっくり浸って、九時過ぎ宿を出る。羽黒山行のバスはこの町の郵便局の前から出る。郵便局は目の前にあるのだが、今日は生憎日曜日で貯金通帳が残念がっている。

もう既に乗客は列を作っていたが、バスは定時に出発した。鶴岡の駅で乗客の入れ替えがあった、十一時過ぎ期待の羽黒山へ到着。羽黒山は有名な割に低い山で海拔四一九メートルで、神社の近くまで着くのに驚いた。荷物を例によって茶店に預けて、杉の樹立の中をぬけて、お詣りした。

権現堂の石段を上ったところで可愛い赤チャンを抱いた若い人に会う。自分は思わず手を出すと、両手を出して抱かれて来た。細君は「アラ！ 男の人には絶対にゆきませぬのに」と絶対力をこめていう。僕の乳児宣撫術の特技を知らぬらしい。

「御主人は眼鏡かけている？」と問う。

「いいえ」

「髭生やしてなさんの？」と家内もきく。

「いいえ」という返事。

九カ月の赤チャンはニコニコして僕に抱かれている。早速カメラに撮る。

赤チャンの名は「あゆみ」ちゃんである。

茶店へ帰って、遅い中食のカレーライスを食べて、月山へは来月でないとバスが運行しないというので、タクシーを頼んで月山へと走る。なるほど、月山（海拔一、九八〇メートル）は三山の一つながら山は深く、ところどころに残雪がある。

月山は頂上まで行けず、途中の小屋よりユーターンして十八時二十二分の列車まで町をぶらぶらする。列車に乗ると「弁当、弁当」と売りに来て、ささにしきの弁当はここだけしか売ってませんよというのだが、そう言われて見ると、夕食の時間ながら癪にさわって買うのを躊躇していると思うってしまった。新潟へ二〇時五十四分に着くと、今度は「こしひかり弁当、こしひかり弁当」という売り声でやってきた。これをのがすと今夜はひほしになるので、こしひかり弁当を買った。寝台車は、ここより連結して北国となり翌朝八時二十七分、ふり出しの大阪駅と無事に着いた。梅雨の六月というのに十日間は全くの快晴で、恐山で一滴顔にうけたのが雨らしい雨粒であった。

さて、長らく誌面を汚しまして申し訳ございませんでした。御愛読有難く厚く感謝申し上げます。後日談であるが、十二月に「あゆみちゃん」にささやかなクリスマスプレゼントを送ると、私等で作りましたという「ささにしき」の新米を送ってきてくれた。一期一会の出会いに格別に心に残るものである。

周遊券ストのバス券だけ残り

周遊券徹頭徹尾上天気

「あゆみがこんなに大きくなりました」と歩いている写真の来るのを楽しみに待っている今日この頃である。

縁 起

私の家の小さい庭に、八重桜が二本今を盛りと咲いている。

見上げていると、折からの風に花びらが、ハラハラと散っている。

大変美しい。

その美しい花を支えているのは枝である。

枝を支えているのは幹である。

幹を支えているのは根である。

根は見えないが土の中で活躍している。

私達は綺麗な花を見るが、それを支えている枝、幹、根をすっかり忘れている。

日常の生活に於ても、綺麗な花にのみとらわれて、土にもぐった根っ子を忘れがちである。

この世の中のものは

すべて色々の関係の中で出来上っている。単独に存在するものは一つもないということである。

例えば

人間の身体について考えてみると

目だけ、鼻だけ、指一本だけで

単独で存在することは出来ない

全体の関係の中で、お互いに関連しあって生かし生かされているわけである。

それが縁起である。

即ち、仏典の

一切衆生悉有佛性 である。

八十歳を過ぎると、佛に近い言葉が好きになる。

去る四月二十四日、我々の大先輩、尼緑之助氏が八十三歳で逝去された。

氏が出雲、いや、日本に残された川柳の根っ子は益々逞しく深く張りめぐらされている。そして五十八年に発刊された句文集の題は『生かされて』であった。氏は正に社会に、人間関係に、単独では存在し得ないことをチャンと知っておられて、『生かされて』という題名をつけられた。

謹んでご冥福をお祈りすると共に敬服するものである。

合掌

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

酒 禅 一 味

二年程前に「いい日本酒を味わう会」という名の会が出来た。日本酒の好きな僕は早速入会した。二カ月に一回の例会と、月見の会、花見の会、酒倉見学等の臨時の会も開催された。例会では、北は青森から南は鹿児島までの銘酒（地酒）を十種類ばかり揃えて、冷酒で賞味する。あては東北の銘柄だと東北の特産品を、四国産の司牡丹、土佐鶴などという、ドロメ、鰹の

たたき等が出されるので、洵に優雅にして風味絶佳の言葉があてはまる。この会の酒の賞味は冷やである。冷やは身体に悪いというのは根拠のない俗説で、昔は桃の節句（三月）から重陽の節句（九月）までは冷やで飲み、十月から二月までは、あたたためて飲んだ。だから「お爛」という言葉が生れたのである。

愈々酒なくて何の己が桜かなの春三月となった。唐代の詩人岑参の詩に

花は玉香を撲ちて

春酒香し

というのがあつた。春酒は日本酒だと新酒、或いは新年の酒と解してもよいのではなからうか。酒の銘柄は色々あつて、現在全国で三、一五六社の酒造家がある。一社でいくつかの銘柄を出しているので、数千の銘柄があると思われる。酒の銘柄にはおろかな名前がなく、日本民族にふさわしく、いかにも目出度い名前が見られる。大別すると

一、菊、梅、桜、牡丹等、花の名をつけたもの

一、鶴、亀、竜等、動物にちなむもの

一、雪、露、泉等、自然現象のもの

一、土地の山河の名をかりたもの

一、中国の故事にならったもの

等の傾向がある。

花や自然現象や地名などは、四季の移り変りを愛し、その風土を大切にした日本人の自然感の現れであり、鶴亀などは、その長寿に造る人も飲む人も共にあやかりたいという願ひであるうし、土地の山河の名をかりたものは、その郷土愛の現れであろう。つまり日本酒の銘柄には、日本人の価値観や美意識が反映されており、創始者の名などつけることの多い諸外国の酒銘とは全く異なる趣がある。

「旅に出たら、その土地のお酒を」というのは、いまや愛酒家の常識となっている。

旅の楽しみの半分はそれであつて、「未知なるものとの出会い」が、その土地の風物を眺めながら、人情にひたりながら、お国訛りをまねながら、その郷土料理を肴にその土地のお酒を飲めば、旅情といい、情緒といい、歌に句に遊ぶものの最高のものであろう。

曾て万葉人は「道」という言葉に「美知」「未知」という字をあてた。見知らぬ道を辿って、思いがけぬ「美酒」にめぐり逢う喜びこそ、まさに酒を嗜む旅人の最上の生涯の喜びであろう。僕には来る二月十四日に、扉温泉の岩魚の骨酒が待っている。

酒飲みの贅言酔うて件の如し。

旅やよし地酒につづく囲炉裏酒

あかあかと燃ゆる炉の色旅の色

エリート^①の末路はたと知っている

義理を欠くのが風邪の予防とか

李白一斗杜甫一斗の酒の詩

母の日

五月の第二日曜日は母の日である。この行事は御存知の通り、米国のメソジスト教会の一女性から始まったのであるが日本では、最初三月六日の地久節、皇后誕生日を母の日と決めた。それが何時の間にか消えてしまって、五月の第二日曜日に定着した。

母という言葉は幾歳になっても、やさしいなつかしい言葉である。母の憶い出を語るとき、ついつい涙ぐんだり、声がつまったりするものである。この齢になっても、もっと親孝行をしておけばよかったと、夜半の寝覚めに思うことがある。

この間、『母の詩』という本を買って倦かず読んでいる。

母 国

太陽のように

お母さん

どうして父国といわないで

母国というの

どうして父国語と言わないで

母国語っていうの

どうして父校と言わないで

母校というの

どうして父船と言わないで

母船っていうの

お母さんばかりみたい

母という字は

上から下から

左から右から

表から裏からみても

同じかっこうをしている

母は太陽のように

かげひなたないもんな

岸本水府に母百句という句集がある。無断転載をゆるしてもらう。その序に
苦勞と戦いつつ私を劬りぬいた母遂に逝く。天寿八十三、連夜せめてもの作句に、遠い昔か
ら今に至る母の追憶に耽る。あまりにも痛ましく、胸せまり涙おのづから下る

(昭和十四年二月)

辿りつくように二階へ母がくる

水府

もう叱らなくなった母淋しすぎ

〃

立ってゆく母に懐炉が沁り落ち

〃

私の母の口癖は「阿呆になつときや」と、「言いたいことがあつたら明日言いなはれや」と
いうのであった。

阿呆になつときなはれという母があり

張り替えた障子の中に母が居る

手提袋持たす寢棺に又哭きぬ

過 去

正本水客さんは、温泉の字引みたいな人である。曾て、水客さんからきいていた扉温泉へ過日行ってきた。

扉とは大変変った名前である。信州美ヶ原の麓、薄川すずきのほとりに、宿屋ならたつた二軒しかない秘境の温泉である。

日向の高千穂の天の岩戸の扉を、天手力男命が戸隠山の天の岩戸へ運搬してきた時に余り扉が重いので、この美ヶ原の峠で取り落した。そこでその落したところを扉峠と名づけた。それから幾百年か経って、その麓に温泉が湧いた。それが扉温泉の始まりである。

神話と伝説のこの秘境は矢張り雪が深かった。松本駅からタクシーで四十分のうねうね道を谿へ下って行った。旅館は明神館というのに泊った。一行はフルムーンの四組の夫婦で一室ずつに別れた。室の名は桜、櫻、榎、榎がな さわら、の四室だった。

あたりの山は榎の林で、すっかり素枯れていたが、春ともなれば美しい新芽がもえ出て、どんなにか綺麗だろうと想像した。

少し熱い目の温泉につかって、氷柱のさがる軒を見ながら白一色の雪景色を満喫した。夕食のお膳は素晴らしかった。ワインカップに松茸の一切れをひたしたお酒を食前酒と宿の人は言って、それで乾杯した。良い茸の香りが鼻をついた。それに松茸の土瓶蒸しも出た。川鱒の奉書焼、珍しい山菜、特に期待して行った岩魚の骨酒の香ばしさに杯の数を重ねたことは言うまでもない。昨夜泊った浅間温泉の宿は三分のお客であったが、ここは満員だった。

不景気だ、不況だと言うても、それなりの勉強、努力をすれば満員の盛況にもってゆかれるものと思った。第三夜は信濃大町温泉の甲子屋で泊ったが、我等八人の外に泊り客がなかったことは、それを如実に物語っていた。

まわしのも岩魚骨酒喜寿四人

矢張り、信州のある温泉で永六輔氏が、岡本太郎氏に遇った時の話、永氏は「ごぶさたしました」と挨拶すると、太郎さんは返事した。

「俺には過去がない」。

血液型

九月三十日の朝、立ちくらみがきて、掛りつけのO医師に電話すると、すぐに成人病センターの診察を受けるよう指示されたので、早々に病院へ行くと入院しなさいということで、翌十月一日に部屋の空くのを待って入院した。CTの検査、アイソトープの検査の結果、脳の微細な血管に血栓があるという診断で、丸一カ月の入院で十月三十日に退院した。その間お見舞や、お見舞状を戴いて恐縮している。有難うございました。

昨日お祝いしたのに、今日は入院とはチョカチョカした奴やと、お叱りを受けるのを覚悟で点滴の人となった。

入院や自問自答の午前二時

徒然なるままに、長女がもってきた血液型の本を読んだ。

今年六月に、川柳展望の十周年記念大会が岡山であった時の受付用紙に、血液型を書く欄があった。さて変わった趣向だと思って、私は自分の血液型のAB型を書いたが、その後の結果が気になっていたところ、このたび発表されたのをみると左の通りであった。

性別	
男性	一一九人
女性	一三三人

血液型	
A	八三人 三八%
B	四七人 二二%
AB	二六人 一二%
O	六二人 二八%

ある本に、漱石の「草枕」の一節をパロディ化した文が載っていた。

「Oに働けば角が立つ、Bに棹させば流される、Aを通せば窮屈だ、とかくに人の世は住みにくい、住みにくさが高じると、AB型ばかりのところへ引越したくなる。だがAB型だけでは世間が保たぬ。あとは血液型のない国へ行く許りだが、血液型のない国は、人の世よりはお住みにくからう」とあった。

Oに働けば角がたつゆえんは、O型の自己主張の強さにあり、Bに棹させば流されるというのは、B型は表現や行動に一定基準をもたないところであり、Aを通せば窮屈だということはA型の性格のひとつとして筋を通す姿勢の強いところであり、AB型は感覚が鋭い合理精神で情緒安定の面を言うたのであろう。

日本人の血液型では、A型が一番多く、統計によるとA型三八・一%、次のO型は三〇・七%、B型は二一・八%、AB型は九・四%と発表されている。川柳展望の発表と奇しくも一致しているのが面白い。血液型で、その人を律するのは洵に不穩当ではあるが、何かの時に便利

なことがあると思う。ああ、あの人はB型だからなどと、良きにつけ悪きにつけ了解するこ
とが出来ることがある。

ゆっくりと日本シリーズ見るベッド

秋晴をたたえて哀れ病み上り

清楚なお別れ

川柳塔社の大幹部、副理事長若本多久志（真彦）さんが八月十六日急逝された。そして十八
日午後一時より葬儀並に告別式が、氏の遺言通り洵に清楚なうちにとり行われた。私は今まで
沢山な告別式に参列したが、先に岩崎愛二さんの奥さんの歿くなられた時のお別れに行った時
と、この度の多久志さんのお別れの時ほど清楚な告別式に出席したことがない。

当日は丁度朝から涙雨という程の埃沈めの小雨が降って、一時頃にはすっかり晴上って、式
場は多久志さんとお別れするのにふさわしい閑かな雰囲気になっていた。

正念寺さんの門前には親族一同の一对の楸と式場の石段下には、黄菊白菊の大きな丸い玉が

一対、これまた親族一同で供花されていて、その他は一茎の供花もない清々しきで、石段の下より正面に遺影を拝されるようになっていた。

御読経の前に、喪主の芳彦氏が石段下のマイクの前に佇立されて一場のご挨拶のあと、亡父の遺言状のお別れの言葉を一言一言噛みしめるようにして読み上げられた。それは、我々の宗祖、親鸞聖人ご入滅の時「それがし閉眼せば、このむくろを加茂河に入れて魚に与うべし」より始まり、最後に「ご焼香賜りました上は、出棺のお見送り等ご無用に遊ばされてどうぞご帰還の程偏えにお願い申しあげます」云々と、大変参列者に対して心を砕かれたお別れの言葉でありました。

弔辞も弔電の披露もなく、代表焼香もなく、お手近な方から順次ご焼香をする、あっさりとしたお別れであった。

又、ご会葬御礼の封筒には、帰真院釈成のご戒名で、既に生前より印刷された写真入りの用意周到なもので御丁寧な言葉が述べられていた。そしてあとで示寂の日や葬送の日を入れるようになっていた。

自若として死につかれた多久志さんは平素のご信心の深かったことは申すに及ばず、川柳は人間陶冶の詩であるという路郎先生のお言葉を忠実にマスターされたことに外ならないと思う。謹んでご冥福をお祈り申上げてペンを擱く。

悼

暗然と見上げる遺影夜の秋

訃の受話器とり落したる残暑

多久志逝くはや朝蟬の騒がしき

人の身のはかなき話露の朝

大文字未来永劫忘れめや

謝

々

十一月号を手にした表紙は、今尚眼底に残っている蘇州の水の姿であつた。

既に十一月号を予定して表紙を描いて下さった直原玉青先生が、十一月号は中国旅行特集号だということを書いて早速労をいとわず、蘇州夜見を画いて下さった。まことに有難いことであつた。謹んで篤く画伯に熱烈御礼を申し上げます。

ある鑑賞

びっくり箱ぐらいで妻は驚かぬ

明日のことわからないから種を蒔く

小出智子

二句とも表現のあとに起こる余情のあり方がすこぶる鮮明だ。びっくり箱から飛び出すものぐらいでは驚かない妻は、夫からのプレゼントとして、宝石箱ぐらいなら驚いてくれるのであろう。一句の表現を「驚かぬ」とあるところからマイナス(−)向きとすれば、余情は驚くものの方へ発展するので、プラス(+)向きと考えるとよい。同じように、「明日のことわからないから」は万一わかれれば種は蒔かないであろうから、(+)向きに表現して、(−)向きの余情を引き出すと考えるとよからう。

カラシレンコン忘れ物の中にある

ひとまずは逃げて野良犬考える

安藤 寿美子

野良犬の句を読み下すと、私たちはすぐ飼い犬に思いを馳せる。飼い犬ならば考えてから逃げる、あるいは走り出すであろうと想像する。つまり(+)向きに述べて(−)向きに余情が発生する。この余情もまた鮮明である。さてカラシレンコンの句は、先ごろ問題になった土産物が、電車か駅か何処かのたくさんの忘れ物の中に見つかったという、ちょっと取り扱いに困る状況が描かれてある。強いていえば、余情は表現の方向に広がる。つまり(+)↓(+)である。ただ、今までに見てきた諸句に比べて、その余情の行方は、はなはだ漠然としているように見える。そ

の原因は大方は、今までの諸句が、ほとんど直線的に余情へ入ってゆくのに対し、カラシレンコンの句では、余情が立体的に膨らむことによる。この句では、読者とその忘れ物をどう処理するかが分らなくて、そのことからさまざまの想像が広がる。打てば響く面白さと、いつまでも何となく、という面白さの違いがここにある。

右の鑑賞は、昭和五十九年十月二十七日の朝日新聞の夕刊に、「鮮明に広がる余情」という題で、後藤比奈夫氏が書いておられるのを転載したものである。

★

浦中八千代さんのお祝い

人生観変った今朝のねむいこと

紫煙の行方

灰皿を所望した男に「おまえ、まだタバコ喫うてるんか」という非道い声がとんできた。タバコを喫うてることが罪悪のような、野蛮人であるような言葉である。

最近禁煙車とか喫煙席とかと仲々うるさいことである。私が煙草をやめてから、十数年に

なるが、時々隣で喫われると、紫煙に鼻をもって追うていることがある。マコトに良い香りである。ものを書く者、句を作る者、選句する者にとっては、タバコこそ唯一の味方である。それじゃ喫えばいいじゃないかと言われるかも知れないが、一旦やめたときめいたらそれを守るのが私の意地である。

煙草について、面白い思い出話がある。私の育った阪大川柳会に私の最も敬慕してやまなかつた勅任教授、笠原路生という先生がおられた。かの有名な

六角堂幾何学的に暮れてゆき

という句の句主である。

先生は、素晴らしい煙草好きで、上着の両ポケットには、ゴールデンバット、ウエストミンスター、敷島、オリエント、と色々なタバコがポケットの型が崩れる程いれておられて、中食のきつねうどんのあとは、ゴールデンバット、寿司のあとは敷島、ピフテキのあとはウエストミンスターというふうに食べ物とタバコを組み合せて、喫煙を楽しまれておられたことである。また対面テストの時には、幾種類かのタバコを机の上に出して学生に「君の好きなタバコを喫うて答えなさい」という。教授と学生がタバコをふかしている一味違うテスト風景であった。その時は、ウエストミンスターが一番減ったということである。

毎年の歳末川柳会には、先生は、あの長方形のウエストミンスターの一箱を会員一同に下さっ

た。我々はあの良い香りを部屋一杯にただよわせて、新春を迎えたものである。

だからと言って、先生は肺癌や胃癌で歿くなられたのでなく、昭和二十年の三月、大阪空襲で歿くなられたときいている。

私は曾て、父からこんな話をきいた。

明治四十三年、第六潜水艇長として、山口県新湊沖で潜航訓練中遭難殉職した福井県出身、佐久間勉海軍大尉は海底で艇の最後の報告を死ぬまで書きつづけていた。そして手帖の末尾に、嗚呼タバコを一ぷく喫いたいと書いてあったということである。

遭難報告を書きつづけた責任感を賞讃された以上に、タバコを喫いたいという本音と余裕が何としても親しまれてならない。

旧 作

茶と苺蓼とお茶で萎びてる

輪にふいてその後にくるもの考える

漢方にタバコ煎ずと書いてなし

ゆうべ来たらしい吸殻捨てている

やるまいぞやるまいぞ

昨年の塔誌十一月号に「あるコラム」というのを書いた。その時「川柳漫歩」を書いておられる林富士馬氏を文芸評論家として紹介したが、お医者さんであることがわかった。お医者さんに文学の好きな方が多い。そのコラムの中に、恩師路郎先生の有名な雲の峰の辞世の句と、先生の老友である山路閑古氏の追悼句が載っていたので、之は珍しい句に出会ったものと思つて書いてみる。

前書に

路郎冠者を哭す

山路 閑古

やるまいぞやるまいぞとて泣くばかり

という句である。この句は能狂言によくでてくる、やるまいぞやるまいぞにこと寄せた趣向だけではなく、先生の辞世の句

雲の峰という手もありさらばさらばです

のさらばさらばを受けて、やるまいぞやるまいぞと老友を哀しんだ追悼句となったのだということである。まことやるまいぞやるまいぞの気持はよくわかる。

川柳漫歩を書いておられる林氏が四十年許り以前、医科大学の子科の学生の時に、山路閑古（萩原時夫先生）は東京大学理学部出身の化学の先生であった。予科は三年だが、林氏は落第させられて五年間、萩原先生に化学を教わり、ある時はクラス担任であった。

「山路先生は佐藤春夫が序文を書いた私の処女詩集を全く認めず、私はまたその頃から知っていた先生たちの川柳を文学と認めることが出来なかった。昭和五十二年に山路先生は鬼籍に入られた」と書いている。川柳を文学と認めなかった林氏が現在、東京新聞夕刊に川柳漫歩というコラムを連載されていられるのも亦面白いことではないか。

兄弟に思い出があり蟬の籠

妻の背が母の背となる針仕事

百度石整いすぎし目鼻立

君に似し姿におどる心はも

夏の月四十の未通女おとめためらわず

白 櫻 忌

去る五月二十九日、堺の覚応寺で情熱の歌人と謝野晶子の第五回白櫻忌が修された。その日

は生憎の雨であったが、本堂一杯の参加者があった。殆ど女性の方で、百人中男性は十人程であった。正面に晶子のパネル写真が飾られてあった。

一時半予定通り読経から始まった。最後に晶子の一番末娘の森藤子さんがお母さんの思い出を語られたのが印象的だった。そのあと、藤子さんにお聞きしたい方があればということで、色々質問された中で、晶子が、堺の生れであるのに、堺にいられないのはどうしてですかというのがあった。藤子さんのお答えは、私は東京で生れて東京で育ったので、その経緯はわかりませんと言われると、市の方が、目下記念館を建てる準備をして史料を集めています。

明治三十七年、かの有名な「君死にたまふことなかれ」の詩が禍いしていたのでなからうかと、そして御子孫はお医者さんや外交官になっておられて、文学の道に進んでおられないような話だった。

啄木といい、白秋といい、晶子といい、よく似た話だと想った、そのあと、晶子歌碑巡りを予定しておられたが、雨のため参加者がすくなかったようである。

因みに歌碑巡りを書いてみると、

一、堺市立図書館

堺の津 南蛮船に行き交へば

春秋いかに入りまじりけむ

一、生家跡

海恋し潮の遠鳴りかぞえつ、

少女となりし父母の家

一、覚応寺

その子はたち 櫛にながるる

くろかみの

おごりの春のうつくしきかな

一、西本願寺堺別院

劫初よりつくりいとなむ殿堂に

われも黄金の釘一つ打つ

一、泉陽高等学校

晶子の母校旧堺女学校の後身

「君死にたまふことなかれ」の詩

一、浜寺公園

ふるさとの和泉の山をさわやかに

浮きし海より朝風ぞ吹く

川柳塔

先月号で宿題になっていた、慰霊碑か供養塔かについての相談が、九月一日の常任理事会で決定した。色々意見が続出したが、結局、あっさり「川柳塔」と正面に刻むことにして、石標の表は、

柳聖 麻生路郎 語録

川柳は人間陶冶の詩である

寝転べば畳一帖ふさぐのみ

路郎

そして、その裏に、

川柳塔社同人は死して

尚柳号で呼びあい

永遠に川柳を語り合う

絆を以て此処に愉しく眠る

平成元年秋

川柳塔社代表 西尾 葉書

ということに意見が一致して、去る九月十日、世話人が高野山に行つて、手続きをすませた。続いて会計の方から発言があり、すでに二口、三口、四口と申込みのあることを発表され、万雷の拍手となった。

帰宅して女房に、今夜の出来事を話すと、早く川柳を上手になつて、同人にしてもらい、その塔の中へ入れてもらわんと淋しいわね。もう遅いかしら……日暮れて道遠き感の言葉で、我が家の夜の十時は賑やかだった。

路郎語録高野の奥の蟬時雨

川柳塔の下千万の虫の秋

熱爛や高野の塔に雪しきり

春の風川柳塔にふれてみる

お願い、一日も早くご喜捨の程を。

脳 と 心

私は常々、川柳は脳で作るものか、心で作るものかと迷っていたが、ある日、前大阪大学学長の山村先生の「私の履歴書」を読んでいると、司馬遼太郎さんとの対話がかかっていた。

「一流の絵かきさんは心で描いてゆく。そのため、本当のリングゴよりも絵の方にひかれますね」と司馬さん。

「カラー写真より絵の方をとるのが、人間の心だと思う。もしカラー写真をとれば、それは大脳を主として働いたものである」と山村さん。

人間の心は脳にあるのか、あるいは心と脳とは別のものかということについて、文学者と医学者との見地から論じている。

「私は、脳と心とは別だと考えたい。脳の働き如何にかかわらず、心の温かい人はいないか」と山村さん。

司馬さんは人間を書く。歴史、地理の中に登場する人間を生き生きと書く。

山村さんは医者だから病氣をみる。ただの人間でなく、病を抱えた人間をみる。人間をみるという点では、二人の考えには違いはない。

川柳家も人間をみることに ついて、両先生には決して劣らない、と私は考える。

ただ私が迷っていた脳で作るか、心で詠むかということである。

そくそくと、いついつまでも残る川柳は、心で詠んだ句であろう。

脳で作った句は理屈があり、人にせまるものがない。難解句と言われる句は、脳で作って競いあった句である。だから彼等は川柳とは言わないで、作品というている。

我々は川柳作法の一つとして、ゆたかな心で温かい句を詠まなければならぬ。

× × × × × × × × × × ×

今日の読売新聞に『女性だけの納骨堂完成』という見出しで、嵯峨野の常寂光寺に、十一月十五日に落慶法要の行われるという予告があった。

ここには、十年前に「女ひとり生き、ここに平和を希う」という碑が建っている。

これは当初（一九七九年十二月除幕）、九十六人でスタートした会員が現在、三百五十六人になっている。主旨は、第二次世界大戦で多くの若者が戦死したため独身を余儀なくされた女性たちが平和の願いと自分たちの永遠の世にしたいという思いを込めて建てたという。

十一月十二日に開眼式を挙行し、永遠に川柳を語り合う「川柳塔」の碑も、またユニークな

碑となることであろう。

句碑建立転々記

世の常の言葉に『あいつ！ 運のええ奴や』という言葉がある。今度の句碑建立に際して、そのあいつの一人が私であった。又『あいつついてるなあ』という言葉がある。そのあいつの一人が私であった。

昭和五十五年五月十八日の日曜日は、私の句碑が、河内西国第一番の札所、聖徳太子第二霊場である八尾市の大聖勝軍寺の山門の右側に建った句碑の除幕式の日であった。

此処は聖徳太子の古戦場で、蘇我馬子と物部守屋と戦をした由緒のあるところで、参道の入口に、守屋の首を洗った守屋池がある。

さて、式の前々日の十四、十五、十六日は台風二号とかで雨と嵐の三日であった。

『之だけ降っておけば、当日は大丈夫』と言う樂觀説と『これが、梅雨前線となって、シトシトと一週間位つづくのではないか』という悲観説との取沙汰があった。

ところが、十七日から晴れ上って、当日の十八日は正に爽やかな緑の風の匂う五月晴れとな

った。そして五時に目を覚ました私の目にとびこんできたのは燦然と輝く五月の陽光であった。この、お天気許りは、どんなに心配しても、如何なる帝王と言えども、如何なる長者と言えども、どうすることも出来ない、天の意志である。

それが、今日の日に賜った五月晴れの、しかも台風一過の清々しい朝の光であった。之が、ついていると言わずして、何であろうか、正についている奴である。

次に『あいつ、運のええ奴や』の話聞いて下さい。

そもそも、句碑を建ててやるという話のもち上ったのは、前年の矢張り五月であった。

句碑を建てると言うと、『何処へ?』と言うのが返ってくる言葉である。

私の家と会社との間に八尾木公園という公園があつて、一名、さつき公園という程、さつきの花が一杯咲く公園がある。八尾市の姉妹都市で、アメリカのベルヴィユ市にある八尾公園と同様、こちらはベルヴィユ公園とも言うている。先年私等夫婦は、ベルヴィユ市訪問使節団の一員として、そのベルヴィユ市へ行った。そんなこんな関係で、先ずこの公園が候補地に上った。

その建碑の話を書いた川柳塔誌の編集局は、誌上に発表の都合があるから一日も早く、日時と場所を報せてくれと言うて来た。そこで取り敢えず、日時は昭和五十五年五月十八日(日)と場所は八尾木公園という報告をした。

そして、市の公園課に行く、十一項目の申請事項を書いて提出するよう手続きの方法を教えてください。設置の目的、句碑の句、管理方法等、詳細に亘る事項であった。

このような書類を提出したので、私は今にも許可の来るものと許り信じていた。ところが一カ月経っても何の音沙汰もないので、不審に思つて公園課を訪ねた。すると、係員は実はと当惑顔に書類を見せて、課長迄判がすんでいるのですが、部長のところまで止まっているんだと言う。之は大変なことになった、誌上には既に発表になっている。そこで私は部長の家を訪ねる決心をした。部長の家は私の家から六〇〇米程はなれたところだときいたので、早速その夜出かけた。

暮夜、ひそかに手土産をもつて権威者の家を訪ねる。

之は私にとって、最も不得手な、憎悪の念の湧く唾棄すべき行為としていゝものである。それを敢えて、しなければならぬ。そのみじめさをつくづく情なく思いながら、春雨のそば降る中を小川づたいに歩いて行つた。二、三回訊ねると、すぐに部長の家がわかつた。応接間に通された私はソファーに半掛けになつてゐる自分を見た。色々と仔細に亘つて話をしたが、役所へ行つて考へて見るの一点張りであつた。

部長の家を辞去すると、雨は既に上がつてゐた。傘をくるくる廻し乍ら空を見た。暗い空に朧な月の光がボンヤリと流れてゐた。

それから、二週間位も経っただろうか、助役に会うことになった。出かけに、鬼遊さんが私に『先生はすぐに月光仮面になって、正義の味方の言動をするから、そうならないように』と、こんこんと言ってくれた。

助役は、先年ベルヴィユ市へ一緒に行った時の訪問団長で心安い仲であった。

昔話を始めていると、ドアにノックの音がして、部長と課長が相前後して入って来た。チャンと約束が出来ていたのである。私は一寸謀られたような嫌な気になった。そして、ここが辛ブリックなどところへプライベートなものを建てると個人の宣伝になるからという横槍が入っている。句主の名が入らなかつたら、或いは許可されるかもという話である。凡そ句主のないう碑なんて考えられない。私は芭蕉の句碑はどうだ、晶子の歌碑はどうだ、雨情詩碑はどうだと言うと、あれは故人だから、宣伝にならないと言う、気の毒だが駄目ですという遠廻しの断りである。

そして最後に、先般、八尾文化協会の方から八尾には聖徳太子に縁の勝軍寺がある、今度新装なった近鉄八尾駅の広場に、笏を持った聖徳太子の尊像を是非建てたいという申し出があったが、信教の自由で、仏教許り優遇するわけにはゆかないと或る党から抗議が出て取り止めになった話をして、二千万円で建てるといふ聖徳太子の尊像をお断りするより致し方がなかつた

と、言い足した。

私はそれをきいて、十七条憲法の創始者、和をもって貴しとする、一万円札のシンボルである、お太子さんでさえも断られたのだから、川柳の水鶏庵・葉が断られてもチツとも恥ずかしくないと思つて観念の眼を閉じた。

眼を閉じたのは良いが、さあ困つた、困つた、石はもう彫り屋で出来上つている。時は四月も半ばを過ぎて、玉串川の桜はハラハラと散り出した。

いらいらする気持は毎日私を苦しめた。

遂に幻の句碑かとも思つた。

そうして最後に、旧村の氏神の由義神社より外にないと思つた。神社は由義の宮と言って、八年間も皇居のあつたところで、一応由緒はあるが境内は狭いし余り参詣人もない。然しもう愚図々々もしておれない。人を介して氏子総代にあたつてみた。するとお宮さんも雨洩りが非道くて今年から修繕に入るので応分の御寄付をお願い仕度いという返事である。ではどの位かと訊ねると、足元を見たというのか、その金額は○千万円という高額であつた。私は余りの非常識にすっかり頭に来てしまつて、早々に断つた。断つたはよいが又建てる場所に困つた。

よりより協議したが、どうにもならない。いっそ息子がやっている割烹日本海の前庭一〇〇坪程の正面に建てることにしよう。そうしたら、金も要らないし、誰に頼むこともない。大野伴

睦も料亭新東洋の庭に句碑を建てている。それで、そこにきめて、四月二十一日、六人のスタッフに集まってもらって、最終の打ち合せをした。だから川柳塔五月号には、会場が八尾木公園から日本海に変更されている。

それから六日経った四月二十七日の日曜日朝のことであった。もと私の会社に勤めていたY君の車に乗る用事が出来た。それが、そもそも逆転する好機となったのである。

Y君は現在、やお市民新聞社に勤めている。Y君は句碑の建つのは公園とばかり思っている。そこで、実は、こうこうの次第だというと、『一度、私とこの社長に会って見られては如何ですか、マスコミの力は強いから』と進言してくれた。そこで、翌二十八日の月曜日に、新聞社を訪問した。社長とは熟知の仲である。二千万円の聖徳太子の尊像建立の話も出て、それじゃ、勝軍寺へ建てたら如何かというアドバイスを得て、早速勝軍寺へ電話をしてくれた。そして午後から、鬼遊さんと二人、寺へ向った。観音像を祀った奥の座敷で会った和尚も之亦熟知の仲だったから、快く承知してくれて、奉賛会長の了解だけとつておいてくれと言いたして、話ほとんどん拍子に進んで、どの辺がよろしいかと、白い鼻緒の草履をつっかけた和尚と三人で境内を見て廻った。

太子堂の裏の数十株の牡丹は、今を盛りと咲き誇っていた。椋の大樹の若葉はサラサラと風にそよいでいた。

そして、和尚さんは、さて句碑の句は？ と訊ねたので、

一歩出ずれば我れ旅人となる心

と答えると、和尚さんは、つかつかと山門をくぐって、ここが丁度一歩出たところだからと言って、山門の左を指さした。

そうして、行雲流水の旅の第一歩はここに決った。

私は不思議に逆転をやる運命にある。昭和二十年六月一日に満州から本土決戦で久留米へ帰って来た。魚雷の横行する玄界灘は荒れていた。修理に修理を重ねた輸送船徳丸のローリングは凄かった。軍刀を背に負うて今にも飛びこむ用意で、やっと福岡の港に着いた。そして久留米の部隊へ入った。七月二十日に原隊の金岡の部隊に転属になって、家から金岡へ終戦の八月十五日迄通った。

若し、六月一日に内地へ帰っていなかったら、ソ聯抑留組となっていただろう。正に鮮やかな逆転劇だった。

或る人は言う『もともと、句碑の句からして、公園や料亭に建つものではない。此処に建つべき運命の碑が色々と遠廻りしただけのことである。何事も苦勞することによって、よりよくなるものである』と、今にして思えば、よくぞ公園を断ってくれたと思ひ、聖徳太子像を断られた勝軍寺に句碑が建つ因縁の面白さを考えている。

五月七日に碑が建ち、台石の崩れ積みが十三日に出来上って、十八日に除幕となった。

この逆転こそ、運のええ奴やと言わずして何であろう。正に運のええ奴の見本のような。之もみんな、皆さんの温かいお心と自然の恵みの賜ものと茲に厚く感謝して、二転三転四転した句碑建立転々記はかくのごとくでございます。

尚、このように転々したために、ご迷惑をかけた方々に深くお詫びを申し上げます。

銀行屋とビール屋

A銀行のセールスと話をしていると、B銀行の外廻りが元気よく入って来た。A銀行が来ていると知ると、B銀行はひるがえる燕のようにして帰って行った。その瞬間火花が散ったような感じであった。昔、上杉謙信が武田信玄に塩を贈った話を思い出して、当今のシビアな競争を哀しく思つて明治生れの自分は贈塩の話をした。

すると、向いに座っているK君が、「私の息子はKビール会社に勤めているんだが、この間夕食を喰べにお袋と料亭へ行って、ビールを注文したところAビールを持って来たので、ビールをやめて酒にした」と笑つて話をした。すると今度は、銀行のセールスは口をはさんだ。

「KビールはM銀行、AビールはS銀行、SビールはS銀行と決っているんです」と言った。

いや僕も、こんな話を聞いたことがある。Aビール会社の五、六人の社員が或る食堂で、ビールを注文したところ、Bビールを持って来たので何も食わずにすぐに出て行ったという話をした。随分と売り上げに協力した話だが、ライバル会社の製品を試飲してみるという度量が欲しいものである。唯々我が社だけ、我が商品だけが良ければよいという当世のエコノミック・アニマル精神は、我々年寄りには理解出来ないのである。

ひるがえって、我が川柳界はどうであるかというと、これは又今の話と全然反対で、各結社は他社の行事や大会を親切に掲載し合って、その当日には参加し、大会を盛り上げ、風交を温めるようにしている。日川協が出来てからは、益々その傾向がエスカレートしたようである。嬉しい事である。

昔は、大会を企画すると他の結社は、その大会の日にとりきつと中、小句会をもって邪魔をしたものである。それで企画は密なるを要すという訳で誌上発表も遅れ勝ちだった。

が、今は一年も前から発表して予約制をとるなど全く夢想だもしないことである。

僅々十年余りの事だが格段且つ驚異的な変りようで、柳界も成長したものである。秋の文化祭は、十月、十一月の二カ月に開催せなければならぬ。而も日曜、祝日になるので、各衛星都市は、どうしてもダブリやすいので事前に話合せて譲り合せて決めている。今年も、八尾は東大阪さんに御無理を言うたが、快く了承していただいた。

流石文化人の集りである。文学をやるものは、せめてこれ位の襟度をもちたいものである。先刻の銀行や、ビール会社に川柳をPRせなければならぬと思った。

柚子の里

京都駅の一番はしっこに忘れられたようなホームがある。そこが国鉄山陰本線の始発のホームである。

十時二十分発の、どんこう列車の最後部に私等二十二名がドヤドヤと乗りこんだ。丹波口、二條、花園、嵯峨、と四つの駅で、薫風さんが長男の充君と一緒に、手を振って乗って来た。充君は唯今小学校六年生で来年は中学へ進学するので、今朝は早く家を出て、嵯峨の虚空蔵さんへ、十三詣りをして、この一行に加わったのである。途端に列車内は賑やかになった。次に停った駅は、保津峡という無人駅であった。若い後部車掌に切符を渡して跨線橋を渡ると、上りのホームの下は保津川の断崖で、その断崖にしがみつくように、形許りの無人の駅舎があった。そこをぬけてダラダラと降りると、さつき跨線橋から見えていた、百米余の吊橋がかかっていた。

保津の流れは、ここに淀んで少し下って曲ると、急湍になっている。素晴らしい良い眺めで

ある。

紅葉紅葉吊橋かかるここ秘境

栞

初冬には珍しい暖かい天気で、一同の顔は晴々としていた。

橋を渡ると、迎えのマイクロバスが二、三台待っていた。私達のうち、年輩の者の十一人はこのバスに乗って、あとの若い人達は、四軒の道を保津の流れに沿うて山路を辿って行った。

歩くこそ値打ちの道を野暮なバス

形水

トンネルを抜けて、あわやと思う絶壁を二、三度過ぎると約二十分にして目的の柚子の里水尾に着いた。

ここ水尾は現在四十戸程の農家許りであるが、郵便番号六一五の京都市右京区に入るのである。

柚子の里京に田舎と言いだたり

牧人

ここの部落の殆ど九割までは、松尾姓でさっきマイクロバスに乗るとき、松尾さん迄というと、何処の松尾さんだとすつと訊かれたので、姓だけしか知らぬ私達がとまどつたのも無理はなかった。

木守柿村に松尾の姓多く

酔々

バスに乗った組は皆より早く着いたので、オーバーと鞆を置いて早速、清和天皇の御陵へと

参拝した。

この御陵の参道は一度谿へ下って、水尾川のせせらぎを渡って、苔むした山道を上って行くので、道案内に書いてある十五分というのは、普通人には逆も無理のようである。

参道の棚田には、猪垣があった。

猪垣のこわれしところどころかな

栞

小松園さんは、そのこわれた猪垣を持ち前の技術で繕うていられたのは洵に殊勝の至りであった。

猪垣の棚田に重なり皆めき

栞

御陵は森の中の断崖にあって、御陵墓監もなく、ひっそりと鉄柵の中に低い土を盛り上げていて、清和天皇にふさわしい御陵であった。

清和天皇は九世紀の後半の天皇であるが、藤原良房の専横で、長兄の惟喬親王をさしおいて生後九カ月にして皇太子（惟仁親王）になり、僅か九歳で帝位につかれた、謂わば、藤原氏政権維持の為の悲劇の天皇であった。兄惟喬親王は人生に絶望して、出家され、天皇は兄親王の為心苦しさに耐えられず、やがて大極殿の放火による炎上を最後として遂に皇位を捨てて、出家してここ水尾の山の奥深く入って、仏道に専心された。

それがため、天皇の御子は親王にされず、臣下に下して源氏の姓を賜った、世に清和源氏の

始まりである。

今この御陵の辺りから山里に吹く木々の風は、若き帝の悲しい息吹きのように感ぜられる。時に帝は三十一歳であった。

山陵に詣ずる我は甲斐源氏

葉

愛宕山都忘れぬ夢枕

鬼遊

御陵より淋しきものに冬芒

酔々

ここは流石秘境だけに、四十軒程の家は、左家、右家のどちらかに属している。そして氏神祭（清和天皇社）の時には、席を定めるのに、左家の者は左座、右家の者は右座というふうにきめられる。又右近、左近、とよばれる家も揃っている。これは帝について来た近衛兵の家である。

それから清滝道と水尾道の合流点に、花売小屋があつて、ここで愛宕山清めの櫛を売っている。売子の茶の前垂は榛の木で染めたもので、平安初期の女官の袴に因んだものという。

この里は又南天のよく育つ土壤で、大きな赤や黄色の実南天が戸毎の門端に、暖かい冬の陽に映えていた。

大粒の南天の実の重さ見る

薫風

喪中の身赤南天に背かれる

君子

御陵から、帰ると、歩いて来た人達は、既に到着して、今日のお目あての柚子風呂に入っていた。湯殿の階段まで来ると、柚子の良い香りがして、所謂、この香りは日本人の嗜好と離れがたいもののあることを知った。湯槽は木の枠で囲んだ風呂で、之又柚子風呂の名にふさわしいなつかしいものであった。

柚子の枝母屋へ背く方へ伸び

小松園

湯桶にもゆかしい香り柚子の里

漫柳

柚子風呂に都塵の落ちる音がある

幸生

日めくりを逃げて柚子湯に身を浸す

美幸

いかき干す小門をくぐり柚子の風呂

柳太

恋人に見せたい柚子の風呂上り

弥生

柚子有情女は楚々と香をまとう

夕花

十二月十二日五右衛門風呂に柚子を入れ

岳人

今日は十二月十二日で、石川五右衛門が釜ゆでにされた日であった。それである地方では、十二月十二日と短冊型の紙に書いて、家の入口の柱の裏に逆さに貼って、盗人除けの呪いにしてあるのを見かけることがある。十二月十二日であるのと、五右衛門の命日とかけたのである。句会は丁度二時に終って、それからこの里独特のかしわの水煮の食膳についた。丁度先刻か

ら腹の虫が鳴っていた時とて、一杯のビールの美味しかったことは言うまでもない。

水煮に柚子湯のほてり丁度よし

栞

土産に柚子を買い、柚子味噌を求めて、村を辞した頃は、手に手にもった南天の枝も、冬至に近い暗さとなっていた。

マ ナ ー

先日、近鉄八尾駅から電車に乗った。入口に座った女性が二人、脚を組んで仲良く話をしていた。その前を通るのに組んだ脚が邪魔になったので、僕は持っていた新聞で、お行儀が悪いよと言って、一つずつ叩いてやった、二人はびっくりして脚をほだいて僕の顔を見た。烏打帽を冠って髭をはやした顔は、ニヤニヤと笑った。見ればかなり教養のありそうな女性であった。次の駅で一つ席が空いたのでそこへ座ると、前に三十前後の男が腕を組んで、俺の脚はこんなに長いんだぞと言わん許りの格好で、まるで自分の家の応接間のソファーに座っている姿であった。この脚も叩いてやろうかと思っただけ、やめにした。

この頃電車に乗るのが嫌になる。全然乗車マナーがなっていない。之はなんとかしなければならぬ。日本の国が道徳的につぶれると思っただら、この間、阪急電車に乗ると、貼紙があっ

て、その貼紙の絵に、脚を組んでいる足先を大きな植木屋の木鋏でチョン切つて描いてあった。

流石、阪急さんだと思った。そしてこの画を、各乗り物に貼つて、悪いマナー解消に役立てて欲しいと思つた。

悪いマナー許りでない。今年の三月に四国巡礼に出た。徳島市の眉山の頂上にある国民宿舎で感心したことがある。二泊したが、その風呂では何時入つても、湯桶はみんな隅にうつむけて揃えてあるし、腰掛もその通りであつた。僕もそれを見習つて、出る時は腰掛に湯をかけて洗い、湯桶の湯をきつて、隅へ揃えて出た。このマナーはどこの温泉へ行つても続けようと思つた。

鯖大師というお寺でこんな良いことが書いてあつた。

子供を叱るなよ、みんな歩いて来た道じゃ

年寄り嗤うなよ、みんな之から行く道じゃ

この言葉を手帖に書き止めてみると、暮六つの鐘がいんいんと響いて来た。

祝板尾岳人君金剛山五〇〇回登頂（二句）

金剛山へ五〇〇回登る莫迦でよし

登山靴の紐しめなおす五〇〇回

お口上手にのせられている藍浴衣

養毛剤のおろかしき値を信じ

天牛の棚を見上げる長い顔

或る難解句

元禄二年、弥生も末の七日、芭蕉は「不二の峰幽かにみえて」という深川を船出した。「千じゅと云う所にて船をあがれば、前途三千里のおもひ胸にふさがりて、幻のちまたに、離別の涙をそぐ」として

行春や鳥啼魚の目は泪

という一句が出る。「行春」はいうまでもなく、過ぎゆく春を惜しむ思いがこめられている。芭蕉の旅は単なる旅ではなく、「月日は百代の過客」であり、その中に生きる人間も流転するものとして漂泊の思いやまぬ「旅人」なのである。

人間存在の根元に旅の性格がひそむものと考えられているわけである。

自分は長らく、この芭蕉の鳥啼魚の目は泪の句が解らなくて、誰にきくこともせず、今日ま

で過ごしてきたが、或る本を読んでいると、陶淵明の「羈鳥旧林ヲ恋ヒ池魚故淵を思フ」という詩句に出会った。この詩が芭蕉の心を去来したことによって、この一句が生まれたのではなからうか。又杜甫の有名な詩の、「時ニ感ジテハ花ニモ泪ヲ濺ギ、別レヲ恨ンデは鳥ニモ心ヲ驚カス」という詩境が遠く響いていたのではないかと思うのである。すると、芭蕉の旅は一貫して「別離」という旅の姿のあらわれであるということになる。

この一句は、陶淵明の詩、杜甫の詩を合わせ考える時、幽かにも句境が判然としてくるのである。今度、堀江正朗・芳子さんの句集刊行に際して、私の祝吟は

僕が目だ中に葉の目も入れむ

とした。これも正朗さんの

妻の目が子の目がみんな僕が目だ

という、正朗さんの句をふまえて出来たものである。

因みに、陶淵明の「園田の居に帰る」の五首その一を次に掲げんか。

少きわかより俗に適うしらくの韻なく

性もと邱山を愛す

誤つて塵網じんもうの中に落ち

一たび去りて三十年

羈鳥は旧林を戀ひ

池魚は故淵を思ふ

荒を南野の際に開かんとし

拙を守りて園田に帰る

方宅は十余畝

草屋は八九間

榆柳後簷を蔭い

桃李堂前に羅なる

曖曖たり遠人の村

依依たり墟里の煙

狗は吠ゆ深港の中

鶏は鳴く桑樹の顛

戸庭に塵雜なく

虚空に余聞あり

久しく樊籠の裏に在りしも

また自然に返るを得たり

八月の空

今年も森田茗人忌の八月が巡ってきた。来る八月二十八日に修されるそうだが、生憎大陸川柳会と一緒の日になって、第一回より六回まで欠席したことのない御縁を初めて破ることになって、誠に残念至極である。

昨年は私のライオンズクラブの朋友熊谷勇氏の口次ぎと、鹿野町のみかづき川柳会の方々のお世話で鹿野温泉の国民宿舎で約二十名の者をご厄介になった。鹿野町は町ではあるが、亀井公の御城下で彼の有名な山中鹿之助のお墓のある、古い屋並の山間の小京都というたまたまの落ちついた町である。

山中鹿之助といえは私達幼少の頃より尼子十勇士の一人として非常に憧れていた英雄である。昨年八月、その碑前に於て、みかづき川柳会の会長山下以草夫氏が私達にお話して下さったことをつくづく思い出す。

「私（以草夫氏）はこの碑前に額突く時、何時もカルタゴの名将と言われるハンニバルの事を思い出さずにはおれないのでございます。幼時よりローマを畢生の敵として誓わしめられて

より、その終焉に至るまでローマを亡ぼさんが為にのみ生き抜いて連戦連敗、『ローマの血に飢えたるカルタゴの志士よ』と叫んで、アルプスを越え、終いには刀折れ矢尽きて憤死したハ
ンニバル將軍の生涯は余りにもよく鹿之助奮闘の歴史と酷似しているからでございます。

鹿之助幼時より尼子家臣として、不俱戴天の敵として毛利に挑み、百折不撓、終いに岡山県
の高梁川の辺りに於て三十四歳を一期として散華しました。その姿こそ武人の鑑と申しましょ
うか、最後の死闘に至るまで抱きつづけた敢闘精神こそ山陰の麒麟児とうたわれた所以である
と思うのでございます。」

熱血溢るる声は八月の空にこだまして、辺りに鳴く蟬の声も何時しか静まりかえりました。

「『我に七難八苦を与え給え』と神に祈り、『憂きことの尚この上に積れかし限りある身の
力試さん』と詠んだそのファイトこそ、その敢闘精神こそ今猶生きていますのでございます。東
西古今英雄と呼ばれ、豪傑と称されるものは数々ありますが、鹿之助の如く武将として珠玉の
言葉を残し、自らファイトの権化と化してその一生を貫き通した武将というものはまだ聞いた
ことがないのでございます。」

不可能という文字は予の辞書にはないと豪語したナポレオンも、その権力を恣にしたアレキ
サンダー大王も、ユーラシアを席卷して飽くことを知らなかったジンギスカンもフビライも、
その豪快さをもっておりまして、鹿之助の如く自らを見つめ、自らに鞭打ち、自らの人品を

高めんとして、その思索するところその次元の高さに於て、何れの国の英傑も遠く及ばないものがあつたと信じているのでございます。

今英雄とされている大閤秀吉もその臨終に當つては、秀頼を頼む頼むとその側近へ哀願して息をひきとつたと言われていることは、心理学的には退行現象と言われておりますものの洵に女々しい限りで、英雄としての色も香も褪せ果てた憐れさに較べまして、鹿之助公の生涯こそ武人の規範であり、真の英雄の姿であると思つてるのでございます。

勝手な独断に過ぎるところもあろうかと存じますが、私は鹿之助公をこのように観ております」。とここで山下さんの熱弁は終りました。私達は夢から醒めたような、まだ現に帰らぬ氣持で、再び公の碑の前に額突き、深く合掌しました。

山陰の麒麟児今も生きており

以草夫

八月の空英雄の物語

朶

この時、中原諷人さん初め、みかづき句会の皆さんに大変お世話になりました遅まきながら篤く御礼申し上げます。また鹿野郵便局の思い出も今尚生きております。多謝。

出湯ありて英雄ありて鹿野町

朶

風 蘭

私の街に、桃林堂という生菓子の老舗がある。ここの御主人は私と同じ歳であるが、旧制八尾中を出られて、どこへも修業に行かれず、すぐに生菓子の製造に就かれた。その時の話をきくと「Aの店で修業するとA店の餡の味になり、B店に入ると、B店の餡の味になる。桃林堂独特の味を出すには、自分自身の納得のゆく研究に頼るより外にない」というて、今日の老舗を造られたのである。

一千坪に余る製造工場の庭に数十本の桃の林がある。春四月ともなれば、温かいピンク色の桃の花が霞のように咲く。

文字通り桃林堂である。その頃になると、知人、得意先へ桃開きの角封筒の案内状がくる。今年も来たので鬼遊君を誘って出かけた。

折よく東大寺の元管長清水公照長老が見えていて、桃の木の間に佇って野外法話があった。正に桃源郷にある春の一時であった。

それから間もなく桜草の案内が来た。最近では風蘭の案内が来た。私の景仰してやまない榊莫山先生のお話があるというので、朝十時から出かけた。莫山先生は風蘭がとてもお好きで、

水の流れる庭園のそここに、鉢植の風蘭が白い煙のように風の如く咲いていた。期待していた先生のお話がなく、現管長さんの御令息のお話を、風蘭のゆかしい香氣の中に聞いた。

それから日本間の壁間に飾られている書や絵をゆっくりと見た。

莫山先生の絵も字も惚れ惚れする出来栄であった。一株のしめじを描いた色紙に

山を眺めて 雨降る日には

世を想い 雨に酔い

花を眺めて 風吹く日には

人を恋う 風に酔う

という一文が先生独特の書体で書かれていた。

鬼遊君は奥さんと午後に行かれて、莫山先生の話を聞かれたそうだ。

桃の花孤独の顔はなかりけり

桃の花解脱の僧の色話

桜草水のせせらぎきいて咲く

風蘭や御僧の挨拶掌を合せ

風蘭の香に酔う話佳い話

みずすまし

二月のある日だった。天王寺から森の宮迄環状線に乗った。

成人病センターの予約診療の為、昼の一時半頃だったので、さしもの環状線も空いていた。

その日の電車は四人掛を連結されていた。丁度私が乗った時に向い側に、おじいさんが座っていた。前歯が二本抜けていたので、十歳許り上のように思えた。あとで聞き質すと私より四歳上であった。

一見したところ、このおじいさんも私同様老人医療で成人病センターへ行くものと思って、森の宮までですかとつい話し始めた。

おじいさんは人の良い笑いを浮べて、いやと首を横にふった。私はあてがはずれたので、何処までと思わぬおせっかいな事を聞いてしまった。之は大阪人の悪い癖で知人に道で逢うと、「もうかりまっか」のあと、きつと「どちらへ」と訊く。相手は「へいそこまで」と適当に返事をする、それでどっちも納得をして別れる。之は一つの愛想のつもりであろう。

件のおじいさんは、相変らずニコニコ笑って、こうして一日乗ってますのんやと初めて口ら

しい口をきいた。そしてフツと酒臭い息が返って来た。余程酒好きらしい、私も好きな酒のことだから、次のような会話になった。

「大分飲けるようすな」

「昔は酒屋の店が開かないと飲めまへんでしたが、この頃自動販売機があるので、夜中でも買えるのでついつい飲みすぎしてな」

「成程、成程、それで一日どの位、いけますか」

「それが一合瓶を七本位やります」

「あれは、たしか百七十円でしたかいな」

「そうです、百七十円ですな」

私は、暗算をして、千円以上だと思つと、老人福祉事業も相当なものだと思つた。

「私はもう七十歳を過ぎていきますので、市バスも地下鉄も只ですけれど、地下鉄は景色が見えないし、市バスは車庫迄行くと降りんならんしするので、この環状線にしています。この電車やと初めに六十円要るけれど、一日乗っていても検札もないし、外の景色は見られるし、暖房もよう効いて、もつてこいですんや。そして此方の景色が見飽いたら、向う側に移りますねん。向う側は信貴山や生駒山が遠く霞んで見えますし、此方側やと、灯がはいった通天閣がとても綺麗です。それで、もう一つ見飽いたら、進行の反対に座つて逆に見ますと、又違った景色に

なります。

家に帰りますと、息子の嫁が酒臭い酒臭いというし、孫からつらくあたられますので、ついこうして水すましのようになり、環状線でぐるぐる廻ってます。私はこの電車が大阪駅へ着くと、ホームで一合瓶とアテを買って、又乗りますねん、一寸した旅行気分になれますのでな」

私は若しこの人が、川柳を知っていたら、良い吟行になってどんなに楽しい日々を過ごされることかと思った。そして一日千円以上もアルコールを摂ると身体にも悪いし、孫や、嫁の経済的補助をしてやれば、と思うと二本抜けた口元が馬鹿に濁んで見えた。

間もなく電車は玉造を過ぎて、森の宮に近くなった。

窓外に大阪城が見えて、折柄の風花に天守閣が竜宮のように浮いていた。

私は私の手に川柳塔の二月号を持っている倅せをつくづく感じながら駅の改札を出た。

海^う 潮^し 温^お 泉

昭和五十九年五月八日は「むらくも」の三十五周年観桜川柳大会であった。

それに参加すべく、川柳塔の連中は、本社の五月の例会もそこそこにして夜行列車で大阪駅を発った。

紫香さんから、寝台車を用意したげるからと親切なお誘いを受けたが、血圧の都合と、折角酷鉄の高い交通費を遣うのだから、知らない温泉にも入りたいと思って、我侭に、六日の昼頃新幹線に乗って、三時十分の伯備線の人となった。今年は長く居座った冬で、新見から奥は山影に残雪が深く残っていた。五時五十九分松江に着いた。改札で海潮温泉へ行くバスはどこから出るのかと訊ねると、

「これから海潮温泉に行くのですか。あんな山の中へ」と反問された。「それは大変だ、タクシーしかない。ここなら松江温泉もあるし、玉造温泉も近い」と駅員さんは言い乍ら、海潮温泉へ行く私を如何にも物好きな人間!!と言わぬ許りに、隣の駅員と笑いあっていた。

致し方がないので、駅の外に出て五、六人並んでいるタクシー乗り場の列の後についた。

「海潮温泉のうしお荘へ」というと、日交タクシーの運転手さんはニコニコして「それは、良いところへ」と言いながら早速、メーターを倒した。

「海潮荘の露天風呂は天下一品ですぜ。自分も、休みには家族の者をつれて、のんびりとあの露天風呂へつかりに行くんです。それは良いところへ行きなさる」と今度は先刻の駅員の笑いと別に、ベタほめの言葉で、あんな山中の温泉という嫌な印象から救われて、段々に暮れて

ゆく窓外の暗い気持から、明るい気持になっていた。

約五十分余り乗ると、歓迎海潮温泉という電飾が春の闇に浮かんで、赤川にかかる温泉橋を渡ると、車は温泉町らしい明るい玄関の旅館を三軒程通り、目的の海潮荘の前で車は停った。

鞆をもって、先にたつ女中さんに飛石伝いについて行くと、一番奥の離れの部屋の前でとまった。上を見ると「蛭」と書いた名札がかかっていた。三畳の控えの間には冷蔵庫があつて、次の八畳には本床があり、ホーム炬燵と石油ストーブが置いてあつて、旧式のストーブの故か、石油の匂いがプンプンとしていた。

先ず一風呂と、女中さんに訊ねると、ここは露天風呂の温泉がメインで、他に浴槽がなく、雪が降っても露天風呂ですから、ご案内しますというて、簀の子板を並べた渡り廊下を露天風呂へと先にたつた。右の入口は殿方左の入口は御婦人と別れていたが、中に入ると岩で仕切つてはあるが、湯はいけいけの混浴であつた。先刻の運転手もほめ、女中さんが自慢するだけの立派な何十トンとある岩が程よく組み合わされて、二筋の原湯が岩を伝つて湯船に流れ込んでいた。

私の経験からしての露天風呂は、この温泉は先ず一級の風呂である。岩と岩との組まれて立派なのは、山梨県の石和温泉の花月旅館であつたが、その岩は他国から集めた岩で岩の一つ一つに国の銘が入っていた。が、ここの岩石は自然のままなのが何よりも嬉しかった。その外、

上州の宝川温泉の露天風呂も一級である。

湯の真中に、大きな一枚岩が丁度お膳のようにしつらえてあって、先客の四、五人がその岩の上へビールやジュースや、おつまみを並べて、歌こそ唄わないが、身体を湯にとつぶりつけて、いつものんびりと静かな宴をしていた。

私は岩を枕に仰向けに浮いていると、折からの春の月が木の間にぐれに上って来た。

露天風呂岩を枕に春の月

川柳とも俳句ともつかぬ句を口ずさんで、ふと見ると、そこから岩と岩とが押し迫って女湯の方へゆけるようになっていた。女湯の方はポチャッとも何とも音がしないので、閑かに、こわごわ行くと、岩の肌

殿方は入浴近視寸留

というユーモアの文字が刻まれていた。

奥出雲の湯の効能を読んで、ゆっくり、つかって出てくると、ホーム炬燵の上に種々のご馳走が並んでいた。女中さんを相手に、松江駅で笑われた話や、タクシーの運転手さんにほめられた話をした。そして友達に紹介された旅館は山水館であったことを言うと、ライブル意識をギリリとだして、女中さんは何かと抗弁した。

こんな山の中で、何故、海潮温泉というのかというと、天平五年（七三三年）の風土記に、

地元の旧家今田家の古文書では、尾のない子牛をこの湯に入れたところ、シッポが生えてきたことから『牛尾湯』と呼ばれるようになったという。海も見えない山里が、牛尾から海潮に変わったのは、泉質にあるといわれている、という話である。

もう一度、露天風呂であたたまって、静かな静かな山の湯の宿に一ト夜の夢を結んだ。

朝の食事をすますと、今日のプランは鬼の舌震へ行くことであった。曾て『旅』という雑誌で、鬼の舌震の記事を読んで、あこがれたこともあったが、とても行けるところではないと観念していたが、ここまで来たからには舌震を見遁すわけにはゆかない。

タクシーを頼むとキネマタクシーの恩田さんという運転手がきてくれた。恩田さんは、赤川の蚩保存会の提唱者で、蚩を自分で孵化している努力家である。

先ず、絲原記念館へ案内してくれた。ここは鉄師頭取として栄えた絲原家の歴代に亘って所蔵された美術工芸品や、たたら資料が一、二、三の展示室に沢山陳列されていた。残念なことは絲原家の庭園が雪のため閉鎖されて見られなかったことである。

ここの売店で中食のそばを食った。

雪晴れや出雲のそばは旨しとも旨し

それから待望の鬼の舌震へと車は走った。

斐伊川の支流馬木川の中流二キロに亘る大溪谷で、浸食によって出来た巨岩奇石、鷗穴があ

り、その岩間を清流が流れ、自然の作り出した壮大な景観は洵に筆舌につくせぬものであった。下れば上り、上れば下り、橋があれば渡り、渡れば溪に沿い、沿えば巖にぶつつかる。流石亭をはるかに後にしてゆく。自分は、自分の脚を疑った。恩田運転手さんがもう一息もう一息、折角来られたのだからという励ましの言葉で先に立ち、そして木の枝を折って杖を拵えてくれたから、よく歩けたものだ。

昭和五年五月二十六日、与謝野鉄幹、晶子夫妻がこの地に遊んだ歌に

馬木の溪七つの龕の岩すぎて

ひかれるきぬを曳く泉かな

みづからの投げたる岩に驚きて

舌震いたる鬼の溪これ

山かげの仁多の長者の家ひろし

泉の音に青すだれして

絲原家を訪れた時の歌である。

絲原記念館で、売っていた『碧雲抄』という二人の歌集の中に数十首載っているが、余りに

も生々しい雄大な景観に圧倒されたのか、『みだれ髪』『恋衣』『舞姫』のような優美な雅やかな歌はなかった。

曾て、路郎先生は、旅行吟はあとで出来るものである。その時の感激は余りにも生々しくて句にならない。何日か何カ月か経って、尚心に残るなれば、それが昇華して、印象となって句となるのだと、言われたことがある。心にうなづくものである。

水の精岩のこだまは雷に似る

やよ鬼の舌震はよし企つる岩

岩ありて凭れてきくは春の河鹿ぞ

新芽もゆ、花には早き舌震の谿のこだまを空耳に又乗って、運転手さんも初めて行くという、可部屋集成館を訪ねたが、生憎冬休として残念ながら、一路海潮荘に帰ったのが三時半だった。

ロビーで休憩していると、ふと目についたのが、毎週水曜日が休と書いてある文字であった。旅館やホテルで完全に一日休日をとる規則の旅館は初めてなので、色々と質問したが、完全に実施しているというので感心した。例えば火水木のお客さんは如何するかときくと、火曜日は泊ってもらって、水曜日はお隣のあめや別館で預かってもらい、木曜日に当館へ帰ってきてもらうのだという返事であった。

大いに感心して、疲れた身体を件の露天風呂で癒して、早々に部屋に帰った。

翌朝九時半に梶みどりさんのお嬢さんの運転で、藤井明朗さんが迎えにきて下さった。そして堀江正朗さんの旅館のような立派な新築の家へ着いたのが十時であった。そこで、大阪から、和歌山から来られた方々と合流したのであった。

最後に、黒川紫香さんのアドバイスとご親切で、海潮温泉を知ったことを心から篤く御礼申上げる。

帽 子

天皇もおやめになった帽子を、僕がかぶりだして十五年程になる。最初はチロルハット型の帽子だったが、段々変ってソフトの中折帽子になった。前の縁をグッと下げて、レインコートの襟を立てると、誰かがジャンギャバンと言ってくれたので、いい気になって愛用している。

軍帽の後遺症で、昭和四十年頃から前頭部の総退却許りか顛頂部が、まん円く光彩を放ってきたので愈々帽子をはなせなくなった。そして帽子は僕の顔の一部となった。それで帽子と眼鏡と髭がトレードマークになっている。

カリカチュア帽子と髭で出来上り

昭和四十九年、ハワイへ行った時に革のハンチングを購うた。烏打帽は人相が悪く見えるか

らと敬遠していたが、鳥打帽は鳥打帽なりに又、リラックスした雰囲気を作ってくれる。それ許りか年を十歳も若く見てくれる。この間、僕のハンチング姿を見て、部長刑事の芦田伸介にそっくりだと言うてくれた人がいる。だから目下盛んに鳥打帽を愛用している。

そうそう、西いわをさんのお通夜に行った時周章で、バスにとび乗った。鳥打帽を脱いで汗を入れていると、後から三十歳余りの男が僕の肩を叩いて、

「おいッ！ 人の靴を踏んどいて黙っている奴があるか！」「僕、踏んだか」「踏んどきゃがって何ぬかしやがる」「そりゃ、すまんかったなァ」「すまんかったで、すむか。おまえどこまで乗るんじゃい」「藤井寺迄や」

之はえらい事になった。藤井寺で下りたら勝負せんならんと思うて、鳥打帽を目深にきて、席を立つと案外相手は小男であった。間もなく藤井寺の二つ程手前の停留所で、男は、「よう、おほえとけ！」と捨台詞を残して降りた。僕を部長刑事と間違えたのかも知れない。

帽子の効用は、今更喋々するのもおかしいが、冬は暖かいし、夏は涼しい。少々の雨でも無帽のようにあわてない。

爾来、僕は帽子道楽になって、パナマ帽が四ケ、中折帽が五ケ、鳥打帽が三ケ、ベレー帽が二ケある。そして外に白いゴルフ帽が一ケあった。そのゴルフ帽の正面に、

一歩出ずれば我れ旅人となる心

という一句を書いていた。

或る日、関西線の八尾と久宝寺の間で窓外に映える綺麗な残照を見てみると、折柄の風で、この帽子を飛ばしてしまった。

残照や帽子にあつた旅心

弔 辞（故西いわを氏に捧ぐ）

謹んで西いわをさんの御霊にお別れ致します。

貴方の柳歴は、私等よりずっと古く川柳雑誌社がまだ同人制をとっている時代に、日本楽器に居られた今は歿き村松夢裡さんや、後藤青児さん等と一緒に、御池橋支部の幹事として、故麻生路郎先生の指導のもとに『川柳雑誌』発展に活躍せられて川柳の社会化運動に努力されました。又曾ては不朽洞会の副理事長として柳務に専念された事もありました。そして、『川柳雑誌』が廃刊されて、川柳塔に改題された時に川柳塔社の常任理事として、企画に参画され色々英智を發揮して下さいました。

私が、貴方を知って一ぺんに親しくなったのは、貴方のお名前が西岩雄であり、私の本名が西尾巖であったからであります。その時十年の知己のように手をとりあって話したことを今尚

よく憶えています。そして今日、

親しさは同名なりし君なりし

という弔句をささげることになりました。

又、こんなこともありました。貴方は仲々の酒豪で、私も貴方についていける程のお酒が好きで、昭和三十年前後はよく共に暖簾をくぐったり、座敷に上って胡座をかいて盃を高々と上げたものでした。

ある夏の夜のこと、上着を脱いで、栞、いわを、と呼び捨てにする程メートルのあがった時にどうしたはずみか、貴方の上着を僕が着て僕の上着を貴方が着て、家に帰って朝になってから解って、翌日電話口で大笑いした事がありました。その時間違えた上着に、

間違えた上着に君の香が残る

という句をつけて取り替えっこをした事がありました。

一昨年入院されたと聞いて早速お見舞に上った時に、国立病院の門のところ迄、スリッパのまま送って下さって、夕闇迫る中に互いに何回も手を振って別れた事が今日の前に幻のように浮びます。

唯今御焼香を上げている前のお写真は、京都の旅館で昨年の正月を過された時に撮されたものと伺いました。いただいた年賀状に、今年の正月は子供達の設営で、京都の旅館で迎えまし

た。朝夕鐘の音のきこえる閑かな、古都のお正月も亦良いものですと書いてありました。

又貴方は歌を上手に唄われて、宴席では、ボルガの舟唄を右の手を胸の辺りまで上げてその手をタクトにして、エーコーラー、エーコーラー、と良い喉をきかせてくれました。今はもう再びお得意のその喉もきかれない悲しい現実を迎えました。人間、一度はお別れする時があることは承知して居り乍ら、こうして香煙の上る御影を前に佇っていると、もう胸がつまって、何も言うことが出来ません。哀しいですが、淋しいですが、

いわをさん！ お別れします、

いわをさん！ さようなら、もう一度さようなら

逝く春やボルガ舟唄遠くなり

栞

昭和五十四年五月二十二日

川柳塔社同人代表

西尾

栞

祖い谷や溪行

昭和五十一年九月二十四、五日と高知市で大陸川柳同窓会が開催された。

小松園さんと私は、二十四日の一時に、伊丹を発つてこの大会に参加した。翌二十六日朝、解散と同時に、ふと思いついて奇勝、大歩危、小歩危に足を踏み入れることになった。急遽、高知駅へ駆けつけ、窓口で訊くと次の列車は特急で、大歩危駅には停まらないから阿波池田でバスに乗り換えて、祖谷まで行く方が、旅館も民宿もあるからその方が良いのじゃないかというアドバイスを受けた。それで二人は九時二十二分発南風一号の特急券を買った。車中は中学の卒業旅行の一団で、すごい混雑であったが、間もなく、ポケットから出したチューインガムを学生達に配って心安くなった。京都、奈良、大阪への三泊四日の旅だそうである。肱かけに尻をおろして右に左に変わる大歩危、小歩危の景勝を車窓に楽しんだ。先刻、聞いた駅の窓口の話では、大歩危、小歩危は車中から見る方が、降りて見るよりずっとよろしいと言うたので、阿波池田まで直行する気になったのである。

丁度一時間で阿波池田の駅に着いた。阿波池田は四国の中心の位置にあって、曾て綜合の四国大学が今にも出来るような噂のあった町であるが、その後一向に繁栄せず、未だに阿波池田

町である。旅鞆を肩にして佇った町は、巡礼の鈴の音に明け暮れる町といった淋しいたずまの町であった。

祖谷行のバスを待つ待合所にも、数人の人が汚れた板張りの長椅子に腰を下ろしていた。折から急に暗くなって、ポツリポツリと雨粒が落ちて来た。阿波池田の町と時雨、フトわびしい旅愁が湧いてきた。

十二時七分、案外正確にバスが入って来た。切符を渡して乗った時の車掌は確かに男の車掌だと思っていたのに、発車して前に立った車掌は女になっていたのは驚いたが、今度此方をむいて案内した車掌は又男に変わっていたのには再び驚いた。この頃の長髪と服装が全く男女の区別がつかなくなったことが、こんな淋しい田舎町にも起こっているのには、我ながら迂闊だった。

バスの中は、大阪から来たという、男一人に女七人の五十歳前後の一組と、私等二人の十人の乗客だった。ここでも小松園さんは、ポケットからチューインガムを出して、すぐに心安くなった。例によって、冗談と駄洒落の多い饒舌で、時々大きな声で皆を笑わしていた。

バスは四国三郎の大きな鉄橋を渡ると、左へ吉野川を上流へ上流へとハンドルをとった時は碧潭を直下に見る断崖の絶壁を行くかと思うと、九十九折の峠路を右に左にと鮮やかにハンドルを切った。

先刻の時雨は何時しか止んで、紅葉には、一ト月早い峰々谿々の樹々が、窓外にひらけて行つた。発電所があつて、そこからダムが明礬色の水をたたえていた。道端は曼珠沙華の花盛りで、ダムの岸にも屯したり、帯状に長く咲いていた。折からダム放水のサイレンが鳴った。

曼珠沙華ダム放水の鐘が鳴る

祖谷の手前、二十分程の断崖に小便小僧が谿にむかつて放水しているのだが、案内書にもあつたので、何処だ、どこだと訊ねているともう過ぎたらしいといふので、ふり返つてみると丁度小僧の横の姿がハッキリと秋空のもとに見ることが出来た。なんだ之かと思わず笑つたが、観音さんや地藏さんより愛嬌があつて良いかもねと車中の女が言つた。

そのすぐ傍に祖谷温泉が絶壁に臨んで、あたりの景色をほしほしにしていたが、私達は民宿に泊るといふので、かずら橋迄乗つた。乗降客は殆どなく、時たま停る停留所で、二人が乗ると一人が降りた。

阿波池田の町を出てから、丁度一時間二十分にして、祖谷のかずら橋に着いた。十人の乗客は、やれやれ着きましたという安堵の顔で次々と降りた。

バス停をガラガラと下りると、そこには、祖谷の一枚看板、日本三奇橋の一つのかずら橋が、すみきつた秋空の下にかかつていた。この橋は一方通行で、橋の袂に老夫婦が仲よく渡り賃をとつていた。一人二五〇円である。前に来た時は、一〇〇円だったのにとほやいている人もあつ

た。

老媪の言うのには、三年に一回かずらの蔓で架けかえなければならぬので、それにかずらの樹がだんだんなくなってしまうと、二五〇円は高くないという説明だった。全長四二米、幅二米というかずら橋であった。

私は早速二五〇円を四二で割って、一米六円の渡り賃で、横に渡した板が二五〇枚あったら、一枚渡るのが一円やなアと計算して、橋の袂の人達を笑わした。

欄干の蔓をもって、辿り行く我々渡る姿は実に傑作であった。もう二度と渡るまいと決心するゆれ方であり、おっかなびっくりものであった。渡りきった所で二、三枚カメラのシャッターをきって、左へダラダラ坂を上ると、大きな水車が廻っていて、その水車茶屋が今晚私達が泊る、かずらや経営のお食事処であった。今日は日曜日で沢山な人が、水車でひいた蕎麦を食べ、炬の辺りや、畳敷のところでは、山菜料理、あめごの串焼、でこ廻しを肴にビールをのんでいた。私達はそこで軽い食事をして、十分程坂道を上ったところの、かずらやへと歩を運んだ。かずらやのお婆さんは、慣れたもので、愛想よく「今日はあんた達二人だけの泊りやけん、どの部屋でも使わっしゃい」と各部屋を開けて廻ってくれた、見晴しの良い大きな部屋へどっかと座り込んだ時は、「矢っ張り疲れたなア」と二人は思わず顔を見合わせた。

窓から見た景色は谿を距てて、向うの山腹のあちこちに、善徳という部落が点々としていた。

そしてその山の向うへ、送電線が長く長くのびていた。

民宿の窓に送電線の天高し

先刻下で食事をした時に、乳呑児を背負うて、甲斐々々しく動いている如何にも、それとうなずける平家の落人の血をひいているという若いお嫁さんのことを、茶を淹れにきたお婆さんに訊ねると、あれは妾の孫の嫁ですけん、背の子は曾孫ですら。妾は六十五歳じゃけんども、曾孫が三人も居って、かずら橋の渡り初めには、私等夫婦に伴夫婦、孫夫婦、三夫婦揃うて渡りましたんよ、と無雑作に話したのには、流石、秘境を訪ねて来た思いを一入深くした。

「大きな風呂が故障ですけん、家の方の小さい風呂で我慢さっしゃい」というので、五右衛門風呂かと訊ねると、怪訝な顔をするから、小松園さんは、五右衛門風呂の説明にかかったが一向に通じない、通じないままに、二人は手拭をぶらさげて藁葺の母屋の方へと石段を上って行った。コスモスの咲き乱れる庭と水貯めの小さい池の間を行くと左の端に湯殿があった。何やかやと置いてある上の棚に浴衣をぬいで、風呂の扉を手前へひくと、二人はアッと驚く為五郎であった。そこには水色に塗ったポリ風呂が湯を満々とたたえてあって、タイル敷であった。コックの向うにプロパンガスのボンベが五、六本並んでいた。五右衛門風呂の通じなかったのも尤もだが、秘境の夢も一ぺんにさめた。でも旅の疲れは風呂に限る。二人はほてった顔を夕風にあてて、暮れるに早い秋の庭に出た。

やがて部屋に戻って、腕時計をつけていると、小松園さんは「栞さん、今何時？五時やなア」ときいたので時計を見直して「今丁度六時やで」と言うと、「僕のん、一時間遅れているわ。五時になっている」という返事が戻って来た。

「小松園さん、あんた何時も遅れてくるのんあんた悪いんやない、時計が悪いんねんなア。夕べ竜頭巻くのん忘れたんと違うか」

「そうかも知れん」

「今度、皆にそう言うとかわ」

「たのんまっさ」

一時間進ませておいて丁度よい加減やのに一時間も遅れていては、小松園さんも立つ瀬がない。

パンフレットで見た、あめごの串焼と、でこ廻しを夕御飯に食べさせてくれと頼んでおいたので、間もなく用意が出来たからと、先刻話にあった、二十一歳のお孫さんが車をもって迎えに来てくれた。

夕ご飯は水車茶屋の方で食べるのであった。早速上りこんで、囲炉裏を囲むと、主人の細君を初め、昼間の赤チャンを負うた若嫁サンに、主人の妹の十八歳になる昌チャンの三人で、色々ご馳走を運んでくれた。先ず菟蓐のさしみ、生椎茸、ワラビ、筍、うどの山菜料理の一鉢、

そば雑炊、ツボという魚の照り焼、ご飯と香のもの、之が今日の泊りの二、五〇〇円の夕食の献立で、あめごの串焼とでこ廻しは、特別注文料理ということになっている。

囲炉裏の火が段々赤く燃えると、あめごがそり返ってくる、それをきりつと廻してこちら側を火に当てる。でこ廻しというのは、馬鈴薯の丸のまま蒸して皮をむき、それに山椒を入れた味噌をぬって炉の端へ立てて、くるくる廻して焼き上げる。だからでこ廻しという。味噌に山椒がきいてすばらしい味である。色は黒いが腰のある莧蕪のさしみも旨い。お目あての、あめごの焼けるのも待ち遠しい。大きな田舎徳利に大きな盃、地酒が人膚程に温もったのを一気にあふる。かねてこの情緒を娛しみに待っていたのが、今宵実現した嬉しさに盃の数が増える。酔だちをかけたアメゴ（地方によっては山女、あまごという）の美味しさに、もう一串注文する。早速孫息子が手網をもって暗い外に出てゆく。なんとも言えぬ素朴な雰囲気である。そこへ、ここの主人が帰って来て、炉の向うに座った。

よう来て下さった、今夜はゆっくり飲んでつかわさい、と言う。そして、お客さん達は正についているという。もう少時すると、紅葉の客が立てこむとこんなゆっくり炉を囲んでもらえない。

「さあ一杯やってつかわさい」と銚子をもつ、そして細君に銚子の追加、追加を命じる。

そこへ下の土産物売、琵琶滝茶屋のお女将さん、さあ年の頃なら四十五、六のマダムと

いう方が適当なタイプのお女将さんがやって来て、四人になって炉を囲んで又もや酒盛が始まった。

三時頃パラパラと来た時雨で、今日の祖谷西小学校の運動会は、どうやら後残りもなく無事に皆すんだことを、女同士の二人は何回も何回も話題にした。流石秘境だ、村の小学校の運動会がこんなに話題になるとは思いながら、適当に酒の廻ったところで、土産の一つに、祖谷の粉ひき唄でもと所望すると、主人とマダムは仲々名調子で

へ祖谷のかずら橋くもゆの如く

風も吹かんのにゆらゆらと

ふかんのにふかんのに風も

風もふかんのにゆらゆらと

へ祖谷のかずら橋ゆらゆらゆれど

主と手をひきゃこわくない

手をひきゃ主と

主と手をひきゃこわくない

へ祖谷で名物かずらの橋と

平家美人とそばの味

美人と美人と平家

平家美人とそばの味

閑かな秋の夜にふさわしい、ゆるいテンポの粉ひき唄を、ほどよく酔うた身には得もいわれず、来てよかったを二人は何回もくり返した。

又パラパラと時雨が来た。もう之以上飲めぬと、そば雑炊を食べて立ち上ると、そこに並んだ銚子の数が十七本であった。

外へ出ると時雨が上っていて、二日の月が黒々とした山の端にかかっていた。それから車で上の宿舎まで送ってもらって床についた。

話をしていいる中に、私達が句を作る人間だということが主人にわかって是非一筆残しておいて欲しいということであったが、かんじんの短冊も、色紙もないので後日送る約束で翌朝小雨の降る中を発った。

そして、勘定の時に大阪へかけた電話代の二〇七円をつけ忘れていたので、この間色紙を送る中に礼状と共にに入れておいた。

送った色紙の句は

民宿の心もぬくし炉もぬくし

という民宿コマージュシャルの一句であった。

×

大陸川柳大会―題「走資派」

走資派の胸に十字架ぶらさがり

小松園

走資派の糖衣となった毛語録

栞

同一題「よさこいぶし」

よさこいの名手今年もまだ嫁かず

小松園

ヨサコイの上手な人で職がなし

栞

武雄温泉の一夜

第九回唐津川柳大会の二日前の日から、大阪を発って佐賀県の遺蹟、吉野ケ里を見学した。

一時は耶馬台国がここだったのでと騒がれたのだが、今では一豪族の支配下にあった王国だろうということになっている。でも樓観があり、環濠があつて広々とした高台であつた。乗ったタクシーの運転手さんは、懇切丁寧に説明をして手をひいてくれた。良い方だったから、胸章の副田さんという名をすぐにおぼえた。そして、副田さん副田さんというて話した。最初副田さんと呼んだら、皆さん副田かくだと呼ばれるんですよ。学のある方はそえだと呼ばれるので嬉し

いですと、早速、空気をいれられた。吉野ケ里の売店で絵葉書を買って店を出る時、店の可愛
い店員さんが出入口まで送ってきてくれて、丁寧にお辞儀をしてくれた。タクシーに乗った時、
手まで振って別れを惜しんでくれた。副田さんに、吉野ケ里の店員さんはやさしい店員さんで
すねと言うと、「あれは私の女房でアルバイトに来てるんです」と言うたので、掌を振るはず
だと大笑いした。

四時頃、今日の宿武雄温泉の京都屋の玄関に入った。唐津支部の仁部校長先生の紹介の宿で、
雅やかな京都屋の名にふさわしい部屋に通された。丁度、九州場所の相撲があったから、六時
半の食事を頼んだ。温泉は、美人の湯の歌い文句のとおり、すべすべとした湯であった。タオ
ルに石鹸をつけおわるのをまって、隣におった三十五、六の男性が「おじさん、背を流しましよ
う」と言うて、見も知らぬ私の背を流してくれた。お名前も、出身地も聞かなかつた。寧ろ聞
いては失礼にあたるし、折角の善意を無駄にするものと思つて有難う、有難うを繰り返し、お
礼を言つて別れた。よく団体旅行の風呂で、若い人が課長や部長の背を流すのを見たことがあ
る。私の曾ての句に

世渡りの上手な姿背を流し

というのががあるが、此の頃の若い人は、「お先」とも言わずに出てゆく。

部屋に運んでくれた夕食の時に、女中さんに温泉の一件を話して、今日のお客さんのことを

訊ねると、北海道から高等学校の学生さんと近県の会社の人が泊っていられるだけだと言った。私は曾て銀行員時代、広島からきているY君のことを思い出していた。

ある宴会の時だった。Y君は、僕の隣に座っていたが、ポロポロと涙を流して盃を重ねていた。「君、泣き酒か」と問うと、「いや、泣き酒でも何でもないのだが、広島 of 山村に残している父のことを思い出したのだ。父は酒は好きで好きであるが、こんなご馳走で一杯吞ませてやりたい。俺はこんなご馳走でぜいたくをしている」と鼻をつまらせた。

先刻、温泉で背を流してくれた若い人も、きっとお国に年老いた父が居られるのじゃなからうか、と家内と話して、私は泣かなかつたが、ビールを呑んだ。

温泉や羅漢のような背を流し

旅の郵便貯金

私が旅に出て記念郵便貯金を始めたのは、昭和四十五年の九月七日のことであった。その通帳の第一欄には、熱海駅前郵便局の判が捺してある。記念貯金というのは、私が旅行した先々の土地の郵便局へ立ち寄って、そこで自分なりの壱千円宛の貯金をして、某年某月某日その地

へ旅行した記念の思い出としているものである。

この記念貯金は、仲々貯まらないものである。というのは私等の旅行は大抵土曜日から日曜日にかけて一泊二日の旅行が多いので、目的地へ着いた土曜日には既に午後で郵便局は閉まっている。日曜日は勿論駄目である。

それで、たまにあるウィークデーのグループの小旅行がかきいれどきで、目的地へ着くと、近くにいる土地の人にこの辺に郵便局はありませんかと訊ねると、ポストならその煙草屋の前にありますよと、いとも簡単に教えてくれるのだが、こちらは特定郵便局でもよいから郵便局を探しているのである。

グループの連中は、何だ何だと訊ねてくれて、そのわけを話すと、仲々しゃれたことをやっているじゃないか、どれどれと貯金通帳を見て、第一欄の熱海駅前¹の局名を見て、「之は誰と行った時だ」と詰問されたことがある。

熱海の改札二枚ずつ二枚ずつ

という光景を憶測してのことであろう。

第三欄以下六行は、北海道旅行を家内同伴で、珊瑚婚祝に行った時のもので、それこそ思い出の記念の貯金である。

網走、宇登呂、斜里、広尾、えりも岬、支笏湖と昭和四十六年九月十七日から九月二十一日

までの六欄である。ここの思い出は網走の刑務所を小高い丘から眺めてその下の料理旅館で昼食をした時のことであった。早速旅館の人に、郵便局を訊ねると、ここから約五百米程行くとありますよという返事に私が困った顔を見ると、どんな御用事ですかと聞いてくれた。こうこうしかじかだと話すと、それじゃ皆さんとお食事中にライトバンで一走り行ってきましようとかく走ってくれたのには有難かった。次の広尾の時も矢張り昼食の時であった。柳の下には泥鰌はいないの譬の通り、網走のようににはゆかず、自転車を借りて往復二十五分程のところを走った。帰って見ると石狩鍋の昼食は殆どすんでいて、家内がやっと確保しておいてくれた石狩鍋の中に兵隊の襟章程の鮭の一片が浮いていた。未だに覚えているところをみると、昔から食べ物への怨みは恐ろしいとはよく言ったものである。次の襟裳岬は身体ごと風にもってゆかれるかと思う凄惨い風の中を局迄走って行ったことをおぼえている。

北海道最後の支笏湖の郵便局は、支笏湖を前にした大変眺望の良い局であった。そして私の通帳を見た局の人は、良い御趣味ですねと言って愛想笑いをしてくれた。碧い九月の湖を前にした眺めの良い局に勤めていると、こんなにも心に余裕が出来るものかと感心して、矢張り人間は環境の動物だなあと考えた。

この北海道旅行のスケジュールは道内は全部バスツアーで、私のこの貯金を知ったツアーの人達は本当に協力的で、バスの窓から郵便局が見えると、西尾さん郵便局がありますよと教え

てくれた。「有難う」と言ってバスを停めてもらって走って行ったら、今日は日曜日だったという札幌の哀しい思い出もある。

昭和四十八年五月十四日の松江郵便局のこの判は、尼緑之助氏の句碑建立に行った時に中川晃男氏が案内してくれて貯金したものである。それから年に一度の晃男さんからの年賀状にはきまって記念貯金も大分貯まりましたでしょうと今年も書いてくれていた。他人の趣味をよく憶えていて下さる温かい心の人である。その後晃男さんを臉に浮かべる思い出の人となった。

この貯金は大体壹千円が基準でやって来ているが、昭和五十年二月二十二日の、城崎郵便局の預金だけでは、金壹千六百円になっている。それは前の晩に中国文化研究会（麻雀）に参加して最後の計算に六百円浮いたので、その収穫を加えて千六百円の貯金となったものである。之も旅のつれづれの思い出の一つである。

良い思い出許りではない。こんな事もあった。それは昭和五十三年八月十八日に東京上野駅前の郵便局のハプニングである。上越線の猿ヶ京温泉で開催される俳句の「鯉」の発行所の夏行に参加する為、上野駅で急行佐渡三号を待ち合わせる約三十分を利用して駅前の郵便局へ跳びこんだ時の事である。局は昼の休憩中であった。だから一時迄仕事は休みだという。私は十三時十分の急行に乗る旅の者だから洵に勝手だが一時迄待っていては列車に乗り遅れるから枉げてやってくれと言う。窓口の女事務員のうちの一人は編物をしていたし、一人は本を読んで

いた。誰も相手にしてくれない。些かむっとした私は局長は誰だと少し大声をたてたら、正面の机からそれらしい人が起つて来て、組合の規則で一時迄待ってもらうより致し方ないと言う。それじゃ管理職の貴方がやってくれては如何かと言うと、一寸女事務員の方を見やって黙ってしまった。とりつく島もない。時間は刻々と経つてゆく。

「もう！ たのまねえや。てめんち、長生きしろよ。バックヤロー」と、河内弁が途端に江戸ッ子になって、ぐっと睨み返して局を跳び出した、という悪い思い出の一幕もあった。

之によく似た最近のハプニングは沖繩の名護郵便局である。日付は昭和五十四年二月十日となっている。その日は土曜日だった。丁度四〇名のバスツアーで名護の賑やかな街へ入ったのは十一時五十五分位だったろうか。例によって運転手に郵便局を訊ねると、局迄は少しありませんよ、この道を右へ入って突き当たりを左へ曲がって云々という。じゃ此所で下ろしてくれと停めてもらって、タクシーを拾うことにした。二月とは言え南国の沖繩の観光バスは冷房を入れてある。街はもうガラガラとする強い日射しである。タクシーは仲々やって来ない。やっと来たタクシーに乗って郵便局へやってくれと息急ぐ。局へ着くとシャッターが半分下ろされている。そこをかいくぐって、中へ入るとまっ暗で、ローソクの焰がゆらゆらとゆれている。停電らしい。時計を見ると十二時二分である。時間外で洵にすまないが旅の者で記念貯金をしているものだから是非受付けて欲しいと頼むと、ここでも二人の女事務員が居って、窓口は既に

下ろされてローソクの暗い灯で今日の出入を締めている最中であった。局長さんらしい人が出て来て、一寸当惑した様子であったが、通帳とお金を受けとって、唯今は生憎停電だから機械操作は出来ないが手押しでよろしいかと言って、事務員の後ろから手を伸ばして、昭和五十四年二月十日の判と名護郵便局の印を捺してくれた。時間外の事で局長さんもあわてていたのか慣れていないのか、下の欄に捺す局長印を捺し忘れていた。自分もあわてていて上野駅のような事ではなかった嬉しさに急いでそのままポケットに入れて半シャッターの下をくぐった。だから通帳には今も尚名護郵便局長の判の一箇所がブランクになっている。

この名護局の貯金をする為に、往復タクシーを使った。思えば涙ぐましい貯金である。でも名護のタクシーは小型で片道二二〇円であったことは幸であった。

こういうふうはこの貯金は、大げさに言えば一分一秒を争うので、常に住所氏名金額を書き入れた貯金預入票を数枚用意しておかなければならないのである。

この間迄この通帳の一番南は屋久島郵便局だったがこの二月で、北は北海道から南は沖縄まで、八十二の郵便局を廻っている。そして二冊目の通帳はもうすぐ満了である。残高は八九、九九七円であってその内利息が七、三九七円ついている。この通帳はこの頃テレビで流行っている私の宝物であり唯一の遺産である。孫が七人居るが、どの孫がこの遺産を引きついでやってくれるか今のところ見当がつかない。

この通帳の利点を挙げると、あそこへ旅行した時は何年何月何日だったかを思い出すのに便利であると同時に又、重要なアリバイ証明にもなっていることである。

唯今、通帳の最後の欄は、昭和五十四年二月二十七日の新潟県湯沢郵便局の判が捺されている。「国境の長いトンネルを抜けると雪国だった」という書き出しの小説雪国の越後湯沢の郵便局である。昨夜泊まった旅館タカハンホテルは、曾て川端康成が雪国を書いた旅館である。芸者駒子のイメージを追ったが、もうそんなロマンも何もない。スキーをかついだ若い男女のカラフルなスノーラックの姿が出入りするだけであった。つぎたしの廊下の果ての湯槽につかかって目を閉じると

雪しんしん駒子の影がふとよぎり

と口をついて出た。

翌日、越後湯沢の郵便局を出ると、真向いの店で駒子餅を蒸す蒸籠の湯気が上がっていた。越後湯沢の二ヶ月の風は肌を射すように冷たかった。

陣中だより

「栞さん、栞さん」という、形水さんの声に目が覚めた。つづいて、「ぼちぼち行こうか」という声。「今、何時?」「六時十分や」眠い目をこすつて起きた。

六時半に外湯が開くというのを、きいていたので、形水さんと夕べからの約束だった。「小松園さんも行く言うてたで」「何号室や」「二〇八号室や」。手洗いから戻ると、小松園さんも手拭いをぶらさげてやって来た。

今日も申し分のない良い天気、三人は口々に喜んだ。外湯の前へ来ると、はや柳太さんが来ていて、切符を買ったよ、と桃色の小さい切符を見せた。「何ほのとこ買った?」「八〇〇円のとこ買った」「これ八〇〇円の切符か。小さいなあ」と言いながら、続いて三人は八〇〇円のその切符を買う。次が六五〇円、大浴場が三〇〇円である。八〇〇円の切符は間もなく売り切れて、我々に追いついた夫人連は六五〇円のとこを買った。

やがて、ドンドンドンと太鼓が鳴って、一同ドヤドヤと入口へ入り込んだ。よく拭きこんだ狭い廊下を突き当たって二階へ。二階は六五〇円の口。そこを左手に見て、もう一階上へ三階へ上がると、松山市の吏員である中年の婦人が、四人御一緒ですかといとも事務的にきいて、

六畳の部屋へ案内してくれた。部屋の真中に古ぼけた机が一机あって、五枚の座布団がそれを取り巻いていた。適当に座つてももの珍しそうにキョロキョロしていると、先刻の女吏員さんが来て戸袋の鍵を渡して、貴重品はこの中へ入れてください。時間は一時間ですから、時間がきたらお報せしますと、言い捨てて出て行った。時間を報すはよかつたね、何だか昔の廓を思い出させるなアと昔、昔、人後に落ちなかつた面々は期せずして顔を見合わせた。部屋には丸窓が切つてあつて、その前の床の間に芍薬が活けてあつた。丸窓の向うは階段になつていてその階段の上に、また花が活けてあつた。だから部屋から見ると向うにも部屋があるような設計であつた。

さて八〇〇円の風呂は一階下にあつた。靈の湯という名がついていた。石の浴槽が二つあつて湯舟に、光っているのや、白いのが西瓜のように浮いていて満員の盛況であつた。これでは筒一杯切符を売つたらしい。漱石の坊っちゃん泳いだ三〇〇円の浴場の方がよっぽど安うて情緒がありそうだとそんな事を考えながら、手拭いに石鹸をぬろうと、石鹸をとると例によつてレモン石鹸だ。僕はレモン石鹸のあのきつい匂いがもう一つ好きになれない。おそらく石鹸の中でも一番安物であろう。八〇〇円の入湯料にしては不勉強だ、矢張りお役所さんの経営だなど些か不満を感じ乍ら元の三階へ上つて、四人が車座に座ると、小さな桃山という名の和菓子と、朱塗の天目台に乗せてお茶が運ばれて来た。例の坊っちゃんに出てくる天目台だ。寺の

和尚さんがつかつてゐるような二重台の朱塗は一つの優越感をそそるようで人騒がせな代物である。僕はこの湯へ二、三回来ているが特等は初めてだ。話の種に入ったわけだが、今後は決して人に奨めるものでない事を悟った。お時間ですという係の人が来ないままに四人は物足りない顔で、狭い階段を背負われるように下りて二階の広間を見、一階の浴場をのぞいて、濡れ手拭いを頭に、五月の爽やかな風の中に出た。

ある日記

今年も、柳翁忌が廻ってきた。丁度二〇一回忌である。

七月七日は路郎忌、八月六日は水府忌、九月二十三日は川柳忌、と不思議と連続して修されるのも何かの因縁のようである。

今年の路郎忌は番傘本社から、吟一さん、いさむさん外沢山な方々が出席して下さって意義深い路郎忌を修することが出来た。

それにつけても思い出されるのは、路郎先生の還暦祝賀川柳大会が、昭和二十三年七月十一

日に戎橋南東のオメガハウスで開催された時のことである。そして私の頭の中に、三十二年前と思われぬ程、鮮やかに浮かんでくる。その日の祝辞のトップは番傘の主幹水府先生であった。そして一冊の日記を持って登壇された。一場の祝辞を述べられたあと、「今日は、私の川柳入門当時の日記を読む。明治四十四年、私が二十歳で路郎君は二十四歳の時の日記で、路郎君と私につながる縁というだけでなく、柳壇の上からみても面白い話だと思う。この日誌は明治四十四年三月から書き出している。そして八月十五日に路郎君が東京に出発する日、大阪駅に私は見送りに行った、が逢えなかった。と書いてある。翌日清明氏の話から確かに路郎君は大阪駅を發つたことを知った。もし路郎君が、あの日私が見送らなかつたと怒っても、この通り日記が証拠で私は確かに駅に行った。裁判所でも日記は何よりの有力な証拠物件として認めますから」と言われて会場をドッと笑わされた。そして日誌を繰って、四月の月などは十七回も互いに往つたり来たりして、徹夜で作句し、喋り、更科でそばを食い、吉兆で飲み、悪酔いをしたりしながらも川柳を作り、雑誌の計画を立てたりしていたと話された。

そして大会後のテーブルスピーチの時に私は、今でこそ番傘と川柳雑誌はライバルとして世間で噂されているが、若かりし日の両巨頭の逢う瀬は、月に十七回というと一日に二回会う日もあったことになりましたが、私等恋人同士でもそんなに逢うていません、全く羨ましい限りですなアと話をしたことを思い出します。

当日は穎原退蔵氏の講演を予定されていたが、病気の為欠席されて氏の挨拶を香林氏が代読された。そして福田山雨楼氏の祝辞の代読を私がした。

因みに会場の東の壁に、富士野鞍馬氏の祝吟、「還暦はまだこれからの卓たたく」の軸が鮮やかな達筆で書かれて、路郎先生の心境を詠っていた。

その日の路郎先生の還暦の軸吟は、かの有名な

「六十一まだ情熱は燃えに燃え」であつた。

来る八月六日は水府忌である。明治四十四年の両先生を思い出して、塔社からも一人でも多く参加させてもらう決心である。

年 賀 状

一九八〇年の新年をむかえてお目出度うございます。

先取りという言葉があります。そして最近は特にこの言葉を使われるようになりました。唯今新年の原稿を書いている私も、ご多分にもれず先取りの行為であり、ポチポチ年賀状の句など考えている今日此頃も亦先取りでありましょう。

年賀状と言えば、ホーム炬燵の上に十五センチ位の嵩の束が積み上げられて、一杯機嫌で何

時もよりエエ方の丹前を着せてもらって、悠々と一枚一枚念を入れて読んでいた頃はよかったが、七、八年前から年々五〇枚一〇〇枚と増えてきて昨年は七〇〇枚を突破して、元日早々から、賀状の整理に、やれやれという勿体ないことになり出した。会社、恩師、柳友、知己、親戚等々、その中でも柳友関係が一番多く、年々増加の一途を辿っている。その反対に会社関係の減っていくのは如何した事だろう。

年賀状というものは不思議なもので、出したところからは来ないで、出さんところから来るものである。その為にその仕分も亦一苦労で、七〇〇枚の賀状を前に頭をかかえるのである。然しそうもしておられず、硯笥をもって来てポチポチ返事を書き出すのを見て、女房は「そうして返事を書かはるから増える一方ですがな。いっそもらい放しにしておいとかはったら、来年から来ないんと違いまっか」

「阿呆言え！ 向うさんが新年の挨拶してくれたはるのに知らん顔出来るか」

「そやかて」

「そやかてもくそもあるか、今日とは言うたはるのに、おまえは向うむいているか。向うさんよりも余計丁寧に挨拶するやろう」と元日早々口喧嘩をやる始末である。

曾て私の賀状は賀正というゴム印を押して、柳友にはその年の思いつきの句を書いていたが、故人になられた福島鉄児さんの真似をして、はがきの横書にその年の干支又は御題を詠んだ一

句を筆書きして、賀正も頌春も書かずに出すことを始めた。だからこのはがきは新しい年を迎えた挨拶状であって、賀状でないかも知れない。先年母が歿くなった年も挨拶状として出した記憶がある。

それは

書斎よし服喪の初春をこもらばや

というのであった。それで或る友人から「君のお母さんが歿くなられたから賀状を遠慮していたら、反対に賀状をもらった」という抗議が来たことがある。

この横書の挨拶状が如何したことか、大変人気があつて、受けとつた人から折返し札状をもつたこともあるし、会つた時によるこびの言葉をもらう事もしばしばである。

私は曾て、N氏宅を訪問した時に硝子をはめた懸額が部屋の一隅にかかつてあつて、十枚程の賀状が納められていた。その中には、その年の極彩色の御題の絵や、諸判の雅な千支の画や、素晴らしい達筆の賀状の色々が縦、横に並べられていて全体として一種の楽しいムードをもつた懸けものになっていた。そして主人の曰く、毎年沢山戴く賀状の中から、之はと思う十枚を本年の十傑と称して、こうして額に入れて今年の目出度い心としているのだと話された。そうして、貴方のは毎年入選ですわとニッコリ笑いながら額をはずしてこられた。

その時の句は

おおらかな海元旦の酔い心地

というのであった。この年の干支は巳年で仲々巳さんの句が出来なかったので、その年の御題の海に因んで、おおらかな海元旦の酔い心地となって新年の御挨拶を申し上げたものである。主人のN氏はいたって、お酒が好物だから、早速差し向いで、おおらかな海の酔い心地になった事は申すまでもない。

今、どんな句を書いたのだろうか、調べてみると、昭和四十二年には、

日本に箸紙があり祝膳

箸紙と柳の丸箸は何時の頃から正月のものになったのか知らないが、日本の素朴な正月が嬉しいのである。

翌年は、

齢六十 三猿主義に徹せんか

丁度来年いや今年は申年だが、先取りに書いてみると、ここところがややこしい。還暦の六十歳になって、三猿主義に徹せんものとの覚悟を詠んだものと思う。然しそうはいかず今尚うるさく喋り、うるさいことをきいて、うるさいものを見て生きている。

その次は、

暮からのこの楽しみの寝正月

余程十二月には疲れていたものと見える。正月には寝正月を娛しみにしていたらしい。私の曾ての句に、「三カ日明治生まれは寝るといふ」のがあるが、六十を過ぎると寝るのが一番楽しいらしい。

その次の年は、

元日の書齋水仙の黄に対す

少し構えた句である。この時はせめて正月だけでも自分の部屋で机に向いたいという心境だったことを思い出す。そして楚々とした中に凜とした水仙の一輪ざしが迎も好きである。又こんな句を書いた事がある。

元旦や酒禅一味の心しる

之は路郎先生の「凡聖一如元旦の心しる」の下五を黙って拝借したもので、朝から陶然となる元旦の酒に禅味があると、ひとり悦に入ったところである。

その次の年は、

元旦や我泰山の如く座す

家長ということ、座るべきところへ座って、盃を手に泰山のように動かさず、この頃流行の関白宣言の歌のようにデンと構えたところであろう。

又或年の句には、

読初や句集旅人福寿草

之は勿論、我等が聖書のようにしている、路郎先生の句集「旅人」と、葭乃奥さんの句集「福寿草」を読初めにした楽しいそして温かいお正月の雰囲気である。

一昨年は午年であったので、

床に置く埴輪の馬のあたたかく

という句であった。

昨年は未年であったが、

和顔愛語元旦の心しる

という句を書いた。一年中和顔愛語であればよいがと念願したことである。

さて来年はいや今年は申年だが、もう三猿主義でもあるまい、何か佳い句をと考えているが仲々出来ない。とり敢えず

元旦や七十年の猿芝居

という句を用意している。七十歳の古稀を迎えたが、ふり返ってみると、全く人真似許りの猿芝居だった。申年を迎えての自嘲の一句を入れて、この稿のメくりとする。

日本のルーツ 幻の邪馬台国を求めて

一九七七年十一月十五日の朝日新聞夕刊の全面広告に、一行でも一句でも、歴史の空白を埋めたい。

78 邪馬台国シンポジウム。

構成、司会、松本清張氏。

とあって、七人の講師の横顔がズラリと並んだ一頁があった。之は一体何ならんと仔細に読んでゆくうちに、私の物好き、歴史好き、考古学好きが頭を拾げて来て、之は是非参加して、松本清張氏の警咳に接し、日本のルーツを確かめんものと早速申込んだ。

(申込多数の場合抽籤)にも無事当選して、十二月二十二日手続き書類が届いた。

又その広告に曰く。主催朝日新聞。後援全日空。協賛博多全日空ホテル。

期日 53年1月15日～16日

会場 博多全日空ホテル

とあって、一月十四日に現地に飛び、十七日まで三泊四日の旅。参加費(大阪発)三万三千百

七円（航空運賃、宿泊料、朝昼食代、聴講料含）とあった。余りの安値に私は参加料を再確認した程であった。

そしてオプショナルツアーが五コースあった。

志賀島宗像コース、唐津呼子コース、筑後路コース、壱岐コース、対馬コース、そこで私は最後の対馬コースを申込んだ、費用は一万四千円であった。

一月十四日伊丹発十三時四十分の二〇九便は丁度伊豆地震の為とかで、二時間延着して十五時四十分に離陸した。

座席を並べた右隣の紳士は、私より少し余計頭が禿げていて、早々に言葉を交わすようになった。話される口元の辺りが、新喜劇の俳優心平さんによく似ていて好感のもてる人柄であった。シンポジウムに参加する話から何時しか年齢のことにふれて、私は四つ年下であることを知った。一時間にして博多空港へ着いて、ホテル迄の乗り継ぎバスに座ると又彼氏と隣席した。この奇遇を喜んで二人はここで名刺を交換した。私は、日川協常任理事、川柳塔副主幹、西尾某の名刺を渡した。彼氏は肩書なしの、すっきりした、西浦達弥と左端に、豊岡市伏、とだけ書いてある名刺をくれた。

「西尾さん、之はしおりと読むんですか」

「ハイ」

「本名で」「ハイ」とバスが信号を曲って一揺れした途端につい嘘の返事をしてしまった。

「明治時代のお父さんにしては、変わった名前をつけられましたなア」ここまでくると、本名は巖です、葉は雅号ですと言ひ替えられないうちにホテルへ着いてしまった。

ホテルのロビーで休憩していると、部屋割が始まった。初めはシングルベッドの人が二十人程で、あとはツインベッドの人々の名を呼ばれた。好い人にあたればよいがと心に念じた。曾て私は香港へ行った時に同室した人が昭和生まれの若い人で、年代にズレを感じた事を思い出していた。次第に呼ばれた人達はどちらも初対面のこととて、「どうかよろしく」「どうかよろしく」と鍵の音をさせて、エレベーターの方へ歩いて行った。私は最後に呼ばれた、そして続いて呼ばれたのが、件の西浦氏であった。

「これは、これは」と異口同音に発して、又々不思議の縁を喜びあつて、九階の九二二号室へ入った。

私はここで、過去の香港のことを思い出して、「西浦さん、貴方は私より四つ年上だから、ベッドは窓際のそちら、入浴その他一切のことは私より先に遠慮せずやって下さい」というと、「いや、こりゃどうも、私は本当に良い方とご一緒しました、どうぞよろしく」という言葉がはね返って来た。そこで先刻嘘を言った葉の本名問題を言い訳すればよいものをここでも言いそびれてしまった。だから西浦さんは今尚葉を本名と思っていられるだろう。辛いことである。

旅日記小さな嘘を懺悔する

一風呂浴びて浴衣に着替えて、夕食に行こうとすると、ここはホテルであった。フロントへ電話すると同じホテル中の食堂へ行くのに、洋服を着て靴を履いて行ってくれと言う。廊下はすべて歩道ですと言う言葉も言い添えられた。

数寄屋造りの料亭、筑紫野、は十五階にあつて、博多の夜景をほしのままにしていた。本場の活け鰻のさしみに、玄海鍋の鯛の味は九州に来た欣びの思い出となった。ビール一本ずつに銚子二本ずつという酒量の程度は又々倅せそのものであった。

鰻さしみ知らぬ同士がもう親し

部屋に帰って、裸になった二人の身長は共に一六八糎で、体重は西浦さんの方が私より二疋オーバーの七〇疋であった。

赤コーナーから共に跳び出してもよい格好な二人の体格であった。

西浦氏は、砂漠が好きで世界の砂漠巡りをしていると言う話や、それにつけて面白い話をした。

色話思ひ出となるホテルの灯

翌朝八時に、トマトジュースとベーコンエッグとパンの朝食をすませて、三階の会場、万葉の間へ入ると、既に椅子の上に各自の持物を置いて良い場所は確保されていた。本年も又昨年

につづいての参加者が一〇〇名程あるということだった。そして東京方面からの参加者が一番多いという話をきいた。私はこの会が今年で二回目であることを初めて知った。報道陣約三〇名をいれて本日の参加者は六〇〇名ですと会場係は紹介した。

邪馬の謎とくは万葉の間でありぬ

諸々の挨拶のあと、愈々九時半、松本清張氏登壇して本日のシンポジウムの開幕となった。清張氏の挨拶は約五十分。シンポジウムの司会者は空気の如く無色で、厳正中立がモットーである。喋りたいことはまだまだあるが之位でしておく。と言うと本日のトップの講師奈良大学助教授、田辺昭三氏にバトンタッチされた。田辺氏は考古学専攻の立場から、魏志倭人伝の中に「倭国の内乱」を語り、卑弥呼の冢（墓）について、奈良県の箸墓古墳は考古学資料上百年近くもあとのもので、彼女の墓は、倉敷市にある楯築遺跡のような墳丘墓でなからうか、又岡山県総社の宮山古墳が比定されるのであると四十分の講演時間を約十分間延長して降壇された。続いて矢張り考古学専門の北九州市立歴史博物館主幹、小田富士雄氏も九州から出土する考古学資料により、邪馬台国の九州説を力説され、三雲遺蹟、平原遺蹟の漢鏡の面数をあげて、之亦十分間延長の講演であった。

ここで十三時三十分迄中食休憩があった。中食は和食であった。魩と牛蒡と蓮根の焚き合せは九州の魚の旨さを物語ってくれた。

十三時三十分再開。立命館大学助教授山尾幸久氏が登壇。文献史学の立場から、邪馬台国は畿内の大和川水系にあった部族連合と考えられる。倭人伝に出てくるその南の狗奴国クナノクニは伊勢地方という設定の元に畿内説を力説して同じく次の講演に十分間食い込んで降壇。

次の早稲田大学教授、水野祐講師は「女王国と男王国」という主題と、副題に「女王国の末路」を掲げて、矢張り文献史的に、前の山尾講師の畿内説と真向から反対の北九州説を、卑弥呼並びにその二代目の壺與の女王の存在論に入り、その後の二十九ヶ国連合体がどう展開してゆくか、又古代国家の統一など説いて、その南にあたる狗奴国はクナノ熊一熊本地方であるという説をされて降壇。

倭人伝ああ読むこう読むそれも読む

ここで十分間の休憩があり、十五時三十分から、東京商船大学名誉教授、東海大学教授茂在寅男氏が登壇されて、先に配られていた四枚入りの海図を元に、歯切れのよい江戸ッ子弁で「航海術とはある地点よりある地点に、安全且つ快速に達するのが航海術である」という定義より説明され、倭人伝に出てくる韓国を経て、あるいは南しあるいは東し、その北岸の狗邪韓国に到る、七、〇〇〇余里という文章に対して潮流の関係を説得され、倭人伝にある一里は約九十三メートルとして水行十日、陸行一月、又郡より女王国に至るには、万二千余里、又東南に陸行すること五〇〇里伴都国に到る、等について一里を約九十三メートルと仮定するとぴつ

たりの行程になるという説明で聴講者を喜ばして降壇。この時古代の里数を計る機械として切子車というものがあつたと耳新しく聞いた。

潮流にのつてきた国四季の国

次に登壇されたのは、国学院大学の樋口清之教授であつた。昨年六月、柳誌「平安」二十周年川柳大会に記念講演をされた講師で大変話の上手な終始にこやかに笑みをたたえた方であつた。講師は民族学的に論じられて、倭人伝記載の生活様式を、考古学、文化人類学、風俗史学等を綜合して語られ、「男子は皆露紛し、木綿を以て頭に招け、その衣は横幅、但々結束して相連ね略々縫うこと無し」「婦人は被髪屈紛し衣を作ること貫きて之を衣る」と貫頭衣の見本をもつてきて、壇上に奇麗な娘さんを上げらせ、貫頭衣を被せて通風性等の説明をして、ルーツはポリネシア南方系であることを強調して降壇。演出は効果一〇〇パーセントだった。

貫頭衣脱いで見せれば奇術めき

続いて、東京大学名誉教授 江上波夫氏は例によって、騎馬民族説をされ、女王卑弥呼は魏より「親魏倭王」の称号を与えられ、倭と魏は服属的關係でなく、同盟的關係であることを早口で喋られて「邪馬台国の女王支配から倭国の征服王朝まで」持ち時間以上に講演されて終了したのが十九時を少し過ぎていた。

かたくなな教授の自説それもよし

朝の九時半から夜の十九時迄、九時間半という長丁場は最近の天井知らずの邪馬台国ブームを物語って、専門家以外の町の歴史家、自称考古学者、好事家の百家争鳴を面白く感得した次第であった。

考古学街の学者の一言

それで私は一階のシンポジウム受付迄行って、試みに聴講生の男女別と平均年齢を尋ねると、まだ確実な数字は出ていないが、女子は約一割、年齢は五十歳を少し出たところではないかという答えを得た。

家を出る時、「邪馬台国が何処であろうと、卑弥呼が誰であろうと、貴方には関係おまへんやないか」と言うて見送った家内に、この数字は大変良い土産になった。

このホテルは、昨年オープンした許りだと聞いて成程綺麗な筈だと思った。今度の参加費が大変安いので、どんな宿に泊まらされるのかと、飛行機中の話で西浦氏も私も案じて、洗面具一切から用意してきたのに、すっぴんがはずれて二人は大笑いした。

今夜は洋服を脱ぐまでに夕食に行くことにした。博多の街に出て名物の水炊きでもと相談したが、すっかり疲れた二人は矢つ張り十五階へ行くエレベーターのボタンを押していた。今夜もビール一本ずつと銚子二本ずつとで、しゃぶしゃぶを食べることにした。丁度良い具合に昨夜の窓際があいていた。そして今日の講演を肴に楽しい夕食を摂った。

幻の邪馬台でよし炉辺話

西浦氏に最も感心して敬意を表すことは、今日の七人の講演を全部ノートされたことであつた。万年筆のカートリッジが失くなった時に赤のボールペンで続けておられた熱心さには全く敬服した。洵に見習うべき情熱だと思つた。

翌朝は昨日の通りの朝食で、九時に会場へ入つた。一番前の端の方で、講師を横から見る位置になつた。今日は壇上に机を半円形に並べて、清張氏を真中に七人の講師が居並んだ。

定刻九時半開会。清張氏の挨拶のあと、愈々討論に入つた。テーマに対して各自の主張はされたが激論はなく、樋口講師は、「松本さんは喧嘩させようと思つているだろうけれど、そうはいかないよ」と言つて会場を笑わせた。

十二時から十三時半迄昼休憩であつた。今日の中食はパンとハンバーグの洋食だった。再会の十三時半からは、司会者松本清張氏の総まとめであつた。後ろの方からかすかな賑がきこえて来た。遂に九州説、畿内説、どちらにも軍配が上がらなかつた。本居宣長、新井白石の昔より解らない邪馬台国が昭和の御代になつてそう簡単に解決するものではなかつた。

幻の邪馬台国、謎の邪馬台国として今年も結論を得ぬシンポジウムとなつた。

「そう簡単に解つては折角の邪馬台国の値打がない」

「解らないから来年も全日空さんに儲けてもらいます」

「解らないから面白いので、解ってしまったえばそれまでよ」

「来年のシンポジウムは韓国へ渡って、そもそもから始めるか」

邪馬台国わからないから金になり

五時三十分終了。それから各講師のサイン会があったので、私は博多駅の井筒屋へ走って、色紙を二枚買うて来てその列に並んだ。そして西浦さんと一枚ずつわけた。

十八時三十分より交歓パーティーが開催された。会場の周囲は、博多名物の雑果、活作り、梅ヶ枝餅、馬刺し、その他沢山な屋台店が並んで、真中に例の如く、洋食和食の突き出しがあって、ビール、酒、水割りは飲み放題であった。グラス片手に講師の誰彼をつかまえては、勝手な邪馬台熱を吹いたり、質問したり、講師と並んでシャッターを切ったりの和やかな交歓パーティーが八時までくりひろげられた。

パーティーを廻っている中に、大阪空港の受付で出逢った神戸の女性二人と話すタイミングになった。西浦さんのカメラに四人並んでレンズに入った。写真が西浦さんから来ると私が中継する約束で住所氏名をきいておいた。彼女等の明日のオブショナルツアーは壱岐コースであつて、私等は対馬コースだと言うと彼女等は大変残念がった。

壱岐、対馬コースの方達は明朝七時四十分、一階ロビーへ集合というので、早々に部屋に帰ってシャワーを浴びて寝た。

西浦氏の凄まじい軒で、フト目が覚めた。二時であった。七時にモーニングコールが鳴った。今日の朝食は二階の「桃杏」という中華料理であった。薬具めいたチャプスイがおいしかった。豆の入った粥一碗とシューマイと野菜と他に一品のついたポリウムのある朝食だった。

明け方のうっとうしい天気も、八時半空港に着いた頃は素晴らしい天候に変わっていて、誰かが邪馬台日和だと言っていたが、日本晴れの先祖だから、素晴らしい日和に違いないだろう。空港で壱岐組と会った。そして彼女等と手をふって別れた。

空港の一期一会は手をかざし

空路半時間にして対馬に着いた。玄海灘に影をおとす、YS11の銀翼はまるで鳶のように軽やかであった。

冬風の島へ空より渡りけり

今日の案内される方は、対馬郷土研究会の高雄武保氏であった。携帯マイクをもって、参考書を沢山かかえて情熱をこめての案内振りには頭が下がった。対馬組には、茂在講師夫妻と田辺講師が参加されていた。五つの古墳を見て廻った。ガラガラ坂の獣道を上り下りした。所々に根雪があった。昨日は寒い風が吹いて雪が散らついたらと案内人は言った。

今日からの四温を語る島言葉

鶏け知の港で、汐帆というものを見せてもらった。普通帆は船の上に張るのであるが、汐帆は

船の下に張って潮流を利用して航行するようになっていた。

初旅や汐帆の島の汐流れ

今日の昼食は美津島町営の国民宿舎「対馬」で石焼料理という珍しい料理であった。平った石を火にかけて、石の上へ植物油を塗って、その上へ鰯、鯛、烏賊、蛸、玉ネギ、茄子、ピーマン等をのせて生焼のところを、ポン酢で食べる郷土料理である。どこかで海賊料理だという声が出た。魚が新鮮だから、どんなにして食べても旨いのだけれど、又格別の味であった。

対馬なる石焼料理小正月

晴れた日には、上見坂の展望台からは、韓国の山々が見えるのだけれど、今日は午後から曇って見えなかった。李ラインはあの辺だろうと指さす人もあった。

邪馬台をたずねる島の冬霞

あの山の天辺で第一の狼煙をあげ、第二の狼煙は白岳の頂きで上げ、次々に上げて、老岐、唐津と遍伝していくことになっている、と言うことを高雄氏はマイクを左右にふって、話をつづけられた。狼煙という字の説明に、昔は狼の糞を焚いて狼煙にしたのが始まりだという。何故、狼の糞を焚いたかという、狼の糞を焚くと樟脳の匂いがして、時間的に長く燃えている点を利用して烽火にしたということである。又どうして狼の糞と他の動物の糞とを見分けるかという、狼は獲物の動物を毛もろとも食べるので、その糞に毛が混じっているからすぐわか

るということである。その毛が樟腦の匂いとなるのかも知れない。

石焼料理で半時間も予定の時間を食ったので、展望台をそこそこにして、途中椎根の石屋根の倉や、元寇の古戦場を見て、対馬最大の町厳原町へ下った。この町は対馬の殿様、宗重尚より三十六代の当主武志氏迄続く城趾のある町である。

対馬は山又山の島だから米がとれない、内地から移入するより朝鮮から船便で入れる方が早いので長らく朝鮮米を食べていたという。そして民具の石に朝鮮語そのままのが多いのも朝鮮との距離を物語っていた。又ここでは甘藷のことを孝行藷という。その名にも由来がありそうだがききもらした。

厳原では、宗家の菩提寺、万松院と史学館を見た。万松院の古い山門を見上げていると、折からハラハラと時雨がきた。変り易い島の天候であった。

十六時、島の空港へバスが着いた頃は嘘のように晴れ上がっていた。

飛行機のフライトは十六時半だった。私は空港の外に出て再び訪れることのないであろう対馬の山々を飽かず眺めていた。

第十四回 大陸川柳同窓会に出席して

「今年の大陸川柳同窓会は博多で、やんなさると」

「うんにゃ、そうですバイ」

「博多は、今、水飢饉とじゃなかですタイ」

「水飢饉、水ききんというばってんが、大陸川柳同窓会は、水いらすですけん、よかばってん」という博多仁和加を最後に、二日に亘る同窓会も無事終了した。

大体、四時から始める句会が、NHKのテレビ放送の都合で一時半から句会が始められた。そして句会風景の放映が、六時四十分からなので、宴会も六時半に切り上げた。

今度の同窓会の出席者は七十余名で、川柳塔社から、顧問の東野大八先生を初め、小松園氏、日満氏、太茂津氏、弘朗氏、と金氏と栞と七人であった。当日の各氏の入選句の一句を抽き出すと

水飢饉どこか身体が痒くなり

大 八

柳川に日本のよさを見直され

小松園

北帰行生まれた駅がある旅順

日 満

之しきに負けぬ老兵水飢饉

太茂津

満州も旅順も遙か偲ぶのみ

と 金

ボン友の招く旅順へ行けぬまま

弘 朗

鄧小平夜店を出すとよく似合い

葉

因みに、当日の題は、鄧小平、夕日、旅順、北鮮、太宰府、柳川、水飢饉、梅ヶ枝餅であった。

この二日間は、と金氏と小松園氏と自分と三人、四〇三号室のベッド暮らしであった。水飢饉の博多の策戦は、浴槽に水を張らないように、栓をとりあげてあって、十七時から十九時迄の時間制限のシャワーのみ許可されていた。「旅に来て風呂に入らへんの初めてや」小松園さんはほやいた。でも私達は慣れないだけで、シャワーで結構間にあった。

翌二十三日朝食をすますと、小松園さんと私は西鉄福岡より大牟田行急行に乗って、久留米で下りた。ここで小松園さんの知り合いの龍頭（リュウトウ）さん御夫妻と落ち合って、龍頭さんの乗用車で柳川迄飛ばした。筑後平野は行く手に拡がって、今日の秋晴れと、豊かな稲の出来が話題になった。

最初、今年の同窓会は筑後柳川で開催というので、長年憧憬していた北原白秋の郷里、柳川なら是非参加したいと考えていた。ところが急遽博多に変更になったので、私は何とか都合を

つけて、一日ゆっくり水郷柳川を訪ねたいものと、今度の旅行のポイントにしていた。丁度十二時前に着いたので、殿様屋敷と温泉の料亭旅館「御花」で中食をとることになった。今日は彼岸の中日で有名なこの「御花」の車寄には、乗用車以外に二、三台の観光バスが降りていた。

この料亭「御花」は柳川十二万石の城主立花氏の末裔の経営になるもので、四代目立花鑑虎の折、別荘として建てられたのであるが、ここの地名が花畠というたので、柳川の人々は「御花」と呼び慣らしたのが料亭の名前になったのである。

正面玄関に立つと明治を思わす立派な西洋館で、ここが料亭旅館かとびっくりしたが、ここは立花家の史料館で二階に上がり、一階に下りてゆくうちに、国宝吉光の短刀や重要文化財長光の剣を始め県文化財、家宝がぎっしりと陳列されていた。

最初玄関に入って、龍頭さんが入場料を購われた時にふと耳にした事だが「本日は祭日の為、予約なしでは逆も中食出来ません」という最大の期待外れの声であった。もう十数年も前になるが、母が生存中嫁にやった福岡の娘（私の姉）のところへ遊びに来た時、その一家と、この「御花」へ来て、鰻のせいり蒸し、柳川鍋、鴨の大名焼の珍しい話をきかされていたので私は水郷柳川許りでなく、ここの料理も目的の一つであった。でも先程の予約の話をきかされて今日の目的の半減した事を返すがえすも残念に思っていた。

史料館を廻っている中に、龍頭さんの御主人が何処からか帰って来て、奥さんに「とれたよ、

とれたよ」とささやかれているのが聞こえた。「之はうまくいったのに違いない」と私は嬉しさで心がおどった。

歴代藩主着用の甲冑、金甲、墨繩の銃など見終った頃、女中さんの案内で私達四人は、松濤園の庭に面した茶室風の優雅な一室に通された。庭園は仙台松島の景を模したものだといわれて、園内の松は二百八十本、庭石が千五百個、石灯籠が十四個という立派な庭園で毎年十月頃より翌年四月半迄野鴨が群来するという福岡県名勝の指定のお庭である。

龍頭さんは、先刻案内してくれた女中さんと福岡弁で、冗談を交わしながら上機嫌であった。話の節々によると、氏は商談や何や彼やでここへ再々来られるので、お馴染さんであったのだ。ナント良い人に御案内していただいたものである。全く感謝の外はない。

昔から食べ物の恨みはおそろしいというから、もしこの「御花」が不首尾だったら、この原稿を書く気が起こらないでいただろう。

三味線貝、あげまき、という有明海独特の二種類の貝のつき出しを始めに新鮮な刺身、お平にあえもの、問題のせいろ蒸しのうなぎ御飯とお吸物、最後に出た巨峰の十数粒はこの農園作として、はちきれん許りの実り方であった。ビールと酒で溶け合うた料理は今尚舌なめずりする印象であった。ご馳走様でしたと箸をおいた時に「お中食ですので、大体これ位ですが、お夕食ともなればまだまだ沢山出ることになっています」という千鶴子と名乗る貫禄十分のねえ

さんがつけ加えた。

乗用車をここに置いてタクシーで川上の乗船場へと行った。秋晴れの九月の陽はまだ仲々暑かった。楡笠を被った四人は、昔遊女屋だったという橋の袂の前から乗船した。

愈々水郷柳川の川下りであるが、近年にない早つづきの川は水位が下がって、水郷の風情も趣も半減していた。この河は矢部川からひいた外濠のクリークである。二十分も下ると船は街の裏から出た。右手の岸には枝垂れ柳の並木が川面を撫でん許りで、その間に白萩、紅萩の萩叢が丁度今が盛りで、時には萩の花屑が川面に漂うていた。幾つかの橋をくぐると、蜘蛛手網が右に左にとかけられていた。この辺りでは川幅も広くなって、どうやら水郷の情趣が感ぜられた。

橋ぎわの醤油並倉西日さし

水路は埋む台湾藻の花

白秋

この歌の赤い煉瓦の醤油倉が左側に見えて来た。ここが川下りの一ポイントになっていて、倉庫の影が水にゆれていた。大きな醤油樽が二つ並んでいた。約一時間にして、元の「御花」の片側に着いた。

矢印の通りに二度程曲ると、六騎神社に出た。昔平家の落人が六騎、この沖の端に住みついた伝説のある神社だそうである。そこを右に曲がると、白秋の「帰去来」の詩碑が建っていた。

この詩碑を建てるのに、「北原の家が破産して貸した金とれなくなって人々は困った。人に迷惑をかけた一族の碑を建てる必要などあるのか、白秋は詩を書いたが地元で役立ったことがあるのか」などと批判が続出した。之は二十年程前のもめごとである。思えば観光柳川と詩と水郷の現在は夢のようである。

近くの小学校で、はや秋の運動会が開催されていた。兎と亀の音楽が流れてきた。旅人にはフト郷愁の湧くものである。

そこを出て、帆柱の見える入江の四ツ辻を左に折れると、すぐに白秋の生家があった。

海鼠塀と細かい木格子の如何にも造り酒屋という構えであって「史蹟北原白秋生家」という石の碑が建っていた。

中へ入ると、城ヶ島の歌がゆるいテンポで流れていた。中庭に石で囲んだ井戸が忘れられたようにあった。二階の勉強部屋に小さな机が一机閑かに窓にむいて置かれていた。

それから間もなく、暮れるに早い秋の筑後平野を、車は元来た久留米の街へと走って行った。

そして小松園さんのかすかにきこえる軒の中で、私は念願の水郷柳川と白秋の里と「御花」を満喫した欣びを何度も反芻していた。

白 寿 と 母

私事で恐縮ながら、私には本年とって、八十七歳になる母がある。

うす糊のきいてる母の小さい足袋

昔気質の母は、九文の白足袋に、うす糊をきかしたのを、きっちり履いて、茶の間の主のよう
にちんまりと座っている。

張り替えた障子の中に母います

母者人炬燵のかさの尊とけれ

何時もこんな姿で、テレビにむかっている。炬燵の上の新聞のテレビ番組には、ところどころ
赤丸のしるしを打ってある。そしてこっくりこっくりとやって時には軽い躰をたてている。

昼日中母の躰は口を開き

かすかなる母の躰のリズム感

帰り来て炬燵の母と対いけり

いくつになっても、母の傍は良い。一日の出来事の話をして、肚のたつ話になると、相手にな

りな、阿呆になつとき、と言うてくれる。

阿呆になつときなはれという母があり

親のある倅せを六十の身におぼえ

こんな心境だから、八十七歳の今日もなお至つて元気で、少々の縫いものは自分でやっている。

針を持つ母へ春の陽がこぼれ

今年のおせち料理の半分は、母がこしらえた。

炬燵出て母母なりの大晦日

高野豆腐もどくこつあり母の味

一子相伝という黒豆の出来具合

何分齡が齡だから、母の万一を考えて、妻と言わず語らず、これも勘定の中に入れておかないと、と思う近年であつたが、

ままごとの中の母にも役があり

八人の曾孫子等のままごと遊びの中へはいりカレーライスを食べ、お手玉をし、プラモデルを手伝う母を見て、これはひよつとすると百歳まで生きるかも知れぬ、いやきつと生かさねばならないという欲が出て来た。今までに、風邪ひきなはんや、そんなもの毒だつせ、長生きしなはれやと、ただただ消極的な言葉ばかりで、母にも我等にも目的がなかつた。それで家族中、

よってたかつて、まず本人がその気にならなければ、その根性をうえつけなければ、その執念を持たさなければと言うわけで、或る日こんこんと百歳まで生きる自信の話をした。母は、そんなに生きたら化け物やがなと笑っているが、家族中折にふれて、その信念と性根をうえつけている。

来年は米寿。次は九十九歳の白寿だ。白骨の御文章の中に、誰か百年の形体を保つべきや云々と説いておられる。

御文章書きかえるほど生きてくれ

百歳になって、市長さんがお祝いに来てくれはって、長寿の秘訣を訊かいたら、どないに答えはりますかと、母にたずねると、

「わたし、七宝製菓のお菓子食べてまっさかいにと答えますがな」と言うたので、とんだコマーシャルや、これやったら、百歳充分やと家族中大笑いした。

たのしみは米寿白寿の母があり

因みに私は七宝製菓(株)の代表者であります。

祝 辞

祝辞というものは、言葉を極めて主賓をほめるのが定石であるから、先に言いた者が勝である。然し通りいっぺんの祝辞は、料理の味を損ねるし、退屈なものである。

そこで私は考えた。先ず司会者と打ち合わせをした。伊勢海老の出たあとで、指名してくれることである。

「唯今は、司会者からタイミングよく指名をうけました。厚く御礼申し上げます。と申しますのは、先般もこのような目出度い席で、祝辞がありました。丁度海老を半分食べた時でありました。早速お祝を申し上げて着席いたしますと、その残りの半分の海老は、ボーイがもっていつてしまったのであります。今尚このことをおぼえているのは、昔から食べ物への恨みはおそろしいということでもあります。然し乍ら今日はタイミングよく海老の出たあとでございませうで、安心をして祝辞を申し上げます」と前置きして、新郎新婦の名を仮名書にして、その下へ二人にふさわしい文句を読みあげることでした。例えば、新婦の名が、瀬尾朱実さんですと、

せんすがあってやさしくて

オおらけくうつくしく

ア情深くこまやかで

ケいかくせいがあつてそのうえに

ミめうるわしきよい嫁御

と、こういう風にはめて、今度は新郎の水本一明君に、

ミれば見るほどノーブルな

ズいいちばんのわが君は

モラルがあつてやさしくて

とても素的な良い男子

カン闘精神旺盛で

ズ脳明晰そのうえに

ア情深き

キン代的なしびれるような良い殿御

というように色紙に書いて、最後は

何もかもバラ色に見えるおもしろさ

の一句を詠いあげて三枚の色紙をご兩人に渡すという一劇を演じることにして、過去十一回のお祝いの座をもったことでありました。

先般、同人、浜光治先生が勲三等瑞宝章を受賞されたときのお祝を参考に書いてみますと、
ハちめん玲瓏のお人柄

マことをつらぬく仁の道

ミごと仕遂げた

ツよい意志

ジゅ章の誉は勲三等

先生はお酒も大変お好きなので

刀圭も酒も勲三等瑞宝章

の一句を色紙に書いて差し上げたところ、和歌山県知事が、この句を祝辞に引用されたことが
今尚私の最も欣快としている祝辞の一つであります。

一家 三教

私の住んでいる八尾の街は、大和と摂津の丁度中間にある。それで昔は、問屋業が発達した。
というのは、大和の穀物、米、炭、織物、そういったものを、馬の背にのせて運んでくるが、

大阪迄行ってようと、値段は高く売れるが、大阪で宿を取らなければならない。即ち宿代と二日の日を費やすひんずなことになる。そこで八尾の町へ卸して帰ると、宿賃の一日の日が助かる。そんなわけで、八尾の町は中継所としての問屋が栄えた。それで今でも、問庄、問市、問米、問安などの名の残っている家が店を張っている。その中の問庄さんという家に、この間八十九歳のおばあさんがなくなられた。私は常々この家の主人と懇ろにしているので早速数珠をもってお通夜に出かけた。通された通夜の席の正面の一番右の端には、天理教が祀られてあり、真ん中には、真宗のお東さん、そして左の端には、本門仏立講の黒檀のお仏壇が並んでいる。さて、それを拝んでいいのやらと思うて、その家の主人に訊ねたところ、あなたの好きなのを拝んでくれたらよろしおまんがなあという。私もお通夜に沢山行つたけれども、こんなことは初めてで、読者の方も、きつとそうだろうが、全く変わりすぎていたので、呆然としてみると、実は今日歿くなった母は、天理教だったから、天理教で拝んでくれと言われた。仔細にきくと、お母さんは天理教、この家は代々お東さんの浄土真宗、それにつれそつた奥さんが、本門仏立講という信心をもっておられるので、自分の信ずる宗教を各自が拝んでいて、一寸も差支えない日々を送っているという。之は戦前からそうしているので、信教の自由などという戦後ではないそうである。

私は今日柳界に於て、伝統、或は本格川柳、革新又は前衛川柳だとか言うて、誌上を賑わし

ているが、一軒の家で、三つの宗教を各自が信じて、仲よく暮らしているのを見ると、柳界もかくありたきものと思うた。折も折、時も時、読売新聞の夕刊に、柳界統一の「日本川柳協会」の記事が載っていて面白く読んだが、「六人の大先輩が相ついで、死去したのに伴い、新しい時代を迎え、友好ムードが急速に高まった」という一文は、誰が言うたか知らんが、一言多い一文であった。

翌日、私は数珠を持たずに、昇天の式に参列して、玉串を奉奠して、静かにご冥福を祈った。

鮎美さんのこと

去る第二十三回大万川柳大会に於て、第一回大会の、旧い写真を持って行ったら、故人となられた、珍しい方々の話が出た。その中で鮎美さんの話が出たので、鮎美さんのことを思い出して書いてみよう。

鮎美さんは、人も知る、路郎門の、鮎美、豆秋というコンビで呼ばれた川雑の逸足であった。阪神電鉄に勤務されたので、川柳の種を、阪神間に播かれて、すくすくと育てられたことは有名である。鮎美さんと私は不思議な絆をもっている。鮎美さんが育てられた、角一ゴムの、

白鷺会（誌名唐辛子）の後を私は一年余り、指導に出向したし、又鮎美さんの指導された、明和病院の青蛙会のあとを、川柳雑誌社明和支部として、受け継いで、毎月明和病院へ私は通った。その時、今活躍中の、薫風氏、牧人氏その他の好作家を知ったのである。

鮎美さんは、何はさておき、お酒が大好きであった。或る時の川柳大会の懇親宴の帰り道、天王寺公園のベンチで、酔いつぶれて寝てしまい、眼が覚めたら、九谷焼の盃を一つ大切に持っていて、朝になっていたという話をきいた。

鮎美さんの、最後の句集「美をぶらす」は昭和三十年十一月に発刊された。

当日私は一升瓶を提げて、阪神電鉄の地下室の刊行句会に出席した。

その時にもらった句集が手元にあるが、その自序の中に、両行間を一行あけて、

麻生路郎先生の御高恩に深謝申し上げます。と書いてある。私はこの一行の文章を読んで今又涙を新たにしている次第である。

今この句集から、十数句を抽いて、鮎美さんを偲びたいと思う。

出雲屋で父たり夫たり子たり

追いかけてくる雷雲へ金魚売り

児の指でつつかれていゝのだ仏

女病みながら桔梗の水を替へ

残骸の工場で鯊がよく釣れる

噴水は月をくだいて暇がなし

べんちゃらはやめとけ俺は酒をのむ

公園のトンボ公園とは知らず

一羽二羽三羽四羽五羽春霞

かくれんぼ鬼より怖い犬がある

ポーナズで上中下巻揃へたり

父として血の逆流をおぼえる日

若死の白地に椿画きのこし

鮎美さんは椿が大好きであった。

鮎美さんの歿くなられたのを知ったのは、告別式もすんでからでした。それで私は、あわてて或る日の夕方阪神電車に乗って、お詣りに行きました。武庫川の堤を、タラタラと下りて右へ廻って右側のお家であった。

鮎美さんの句の

風呂好きの老母に三日月さまの道

を、思い出して、七日過ぎの夕月が出ている堤を鉄橋の方へ歩きました。

因みに、鮎美さんの御逝去の日は、昭和四十二年九月十三日（六十七歳）であります。謹
んでご冥福をお祈り申し上げます。

合掌

幹部候補生

茶の間から紅白歌合戦が流れてくる頃、私は玄関の釣り床の掛軸の短冊を、路郎先生から戴いた「ふるくとも僕には仁義礼智信」の短冊と挟み替えて、一輪ざしの水仙の位置を整えて、それから座敷の本床の軸を「凡聖一如元旦の心しる」の路郎先生の軸に掛けかえて、静かに元旦を迎えることが例年の慣わしになっている。今年もその通りにしたが、思えば先生が歿くなられて十五年ということは、川柳塔が十五年の年月を経たことになる。

私は、先生を思い起す度に、先生の御存命中に確たるお返事をせず、お別れしたことを申し訳なく思うことがある。

それは終戦直後二、三年の頃、或る日、先生は私と向い合って、川柳雑誌のあとを、おまえ、やらないかと仰せられたことである。もしやるなら、特訓をする。そしてあの本を読め、この本を読め、そして柳界のことも教えよう、どうだ、やる気はないかと仰言って下さった。それ

私が昭和十八年に第一乙種で応召して、幹部候補生になり、久留米の予備士官学校を出て、終戦の時には少尉になって帰って来たその事実で「こやつ、やる気のある男」と見込まれたのことであろう。

私はこの一言をきいた時、嬉しさより、その責任の重大さに、すぐには言葉が出なかった。当時私には両親と、教育盛りの四人の子供と祖母の九人の大世帯で、生活することが精一杯であった。ただ考えさせて下さいと答えるのがやっとだった。

それから二十年余、そのことについて、先生もふれられなかったし、私もこわいものにさわるような気がして一言も言わなかった。

然し、破くなられる三年前、先生は突然、「栞君、君からまだ返事をもらってないことがある」と仰言つて、雑誌のあとつぎのことにふれられた。私はギョツとした。そして、先生はただあの事を思うて下さっていたのかと思うと胸が熱くなった。

然し有難いお言葉ではあるが、川柳雑誌の看板の大きさ、重さを考える時、「ハイ」とは返事出来なかった。そして自分が「ハイ」と言わなければ、誰かのところへ行くのではないかという不安もあつて、はつきりと断らなかつた狡さを今も思い出される。

先生の御病気が厚くなられた時、「川柳雑誌」は自分一代限りと仰せられた。

私はその言葉をきいてホツとした。川柳雑誌はもう誰のところへもゆかない、よかつた、よかつ

たと私は心の中で叫んだ。

時々生駒の葎乃先生の許へ参上するが、ふとこのことを思い起すとき、すまなかつたと冷や汗をかくと同時に、私は幸福者だったとつくづく述懐する。

生駒の冬は大阪より酷しい。葎乃先生の御健在を切にお祈りする次第である。

海鼠と海月

川柳塔誌の十一月号に、好郎氏が海鼠の美味しい時季になったことを書いている。僕も海鼠は大好きだ。俳人黒柳召波の句に、

憂きことを海月に語る海鼠かな

という、俳句とは思えぬ川柳味横溢した面白い句がある。海の底を這っている海鼠が、海面に浮かんでいる海月に話しかけている奇想天外の着想が、二六〇年前に詠まれているかと思うと嬉しくなった。

召波の師の去来の句に、

思ふこと言はぬさまなる海鼠かな

という句がある。召波の句は去來のこの句を踏まえて詠んだものであろう。

又、

尾頭のころもとなき海鼠かな

という句もある。最初に海鼠を食べた勇氣のある人と誰もが思う海鼠のあのグロテスクな姿を
言い得て妙というべきである。

海鼠も面白いが、海月（水母）も亦面白い腔腸動物である。

海月には、故堀口塊人さんの句に面白い連作がある。

水母流れてふるさとを知らず

みずからを忘れしままに水母浮く

はからずも水母の頭北を向き

月の出に水母ほのかに呼吸する

水母ゆらゆら夜光虫のうたげ

水母は海鼠のように食べられないから残念だ。

虫明の宿

(一)

五月二日新大阪駅十六時二十八分発特急、しおじ3号の6号9Bという切符が、白柳さんから、速達で届けられたのは、四月二十八日のことであった。

切符を落手したお札の電話をすると、同行者は生々庵主幹と白柳さん、好郎さんと自分の四人で、形水、薫風の両氏は岡山の会場で落ち合うことになっているとのことであった。その時、自分は新大阪駅でなくて、大阪駅から乗るかも知れないことを話しておいた。新大阪駅は地下鉄を下りてから、途中にエスカレーターはあるけれども、相当距離があるので、環状線と一つ違いのホームで乗れる大阪駅から乗車しようと思つた時から考えておいたことだった。

大阪駅のホームに立った時は、発車に丁度二十分前だった。五番線のホームには、十七時発、みまさか3号に乗る人の列が幾筋も出来ていた。ホームに佇って、朝日新聞の将棋名人戦を読んでいる私の耳に、十六時三十分発、しおじ3号の自由席にご乗車の方は、始発駅新大阪駅で、既に満員の状態でありますから、ご乗車の方は、新大阪駅の方へお越しになつてご乗車をおすすめ致します。

新大阪駅へは八番ホームから発車しております、次の駅が新大阪駅で、およそ四分で到着致します、というアナウンスが何回もくりかえされた。時にはおよそ四分が、およそ三分に変わったことも面白くきいた。特急指定席は有難かった。6号車は軽食堂車と半分ずつになっていた。乗車すると、同行の三人が鍵の手に座っていて、主幹の前の席が空いていて挨拶もそこそこにその席にすわった。白柳さんは、被っていたベレー帽を脱いで「席がわからなかったらいから、帽子を被っていたんや」と脱いだベレー帽を網棚の上へ放り上げた。

白柳さんなら、反対に脱いでくれた方が、よっ程解りいいのじゃないかと思ったが、慎重深い私は、そんな失礼なことを言わずに、もっぱら主幹に句集の序文のお礼をくどくど言うていた。

車中では、小松園氏の声の出ない容体の話や、例によって毒舌を交えた川柳の話、又川柳塔社のスタッフを始め同人一同が余りにも仲がよすぎる、もっと仲が悪くなれば、切磋琢磨があつていいのじゃないか、「仲善き」とは美しきかな」許りでは如何なものであろうか等と話した。間もなく、座席の横を前車の方へ行く人が多くなった。時にはアベックも幾組かあった。それは前にも言った前の車が軽食堂車になっていたからである。ドアの開閉がある度に、良い匂が漂うて来た。何時もなら、誰からともなくアルコールの誘惑に負けて立ち上がるところであるが、神妙に社の話、岡山の話に夢中になっていた。というのも岡山へ着けば、今晚泊まる虫

明（むしあけ）という漁港の旅館で、新鮮な旨い魚をたっぷり食わしてやるという餌の為であった。

暗くなってきた窓外には雨らしい気配がした。目をこらすとやっぱり雨だった。

愈々生々庵の本領を発揮してきたぞと、期せずして四人の口をついた。

十八時四十分岡山駅に着いた。駅は新幹線の工事の最中で、どこが出口か迷うほどだったが、人の流れについてゆくと、出口に出た。そこには久しぶりの、久米雄さん、久志良さん、三林坊さんの三人がニコニコして待っていてくれた。挨拶と握手で久闊を敘して、タクシーの列に入った。久米雄さんはもう良い顔色をしていた。自分はすかさずやってきたなというと、素直にみとめた。

四人乗りの車には、助手席に道案内の久志良氏が乗り、主幹、好郎、栞と三人後ろの席に乗った。もう一台のタクシーには、久米雄氏、三林坊氏、白柳の三人が乗った。

薄暮の岡山の広い通りを幾曲りかすると、間もなく旭川にかかる相生橋を渡った。

この向うの端が後樂園ですけん、私の祖父などは、御後園と申していました。先祖は武士の端くれで、お城に勤めていて記帳などをやっていたんですという久志良さんの話。世が世ならと誰かが言うと、いや単なる藩士ですけん謙遜された。

車が二つに岐れた道にさしかかった時に、こちらの道をゆくと、何とか温泉へ行く道で、と

生々庵と好郎が何時か来て泊った温泉宿の赤い布団の話をした。

行く手に墨絵のような備前富士が見える頃、干拓で出来たという岡山平野はもうすっかり暮れていて、もう一つ早い列車で来られていたら、明るいこの景色を十分説明出来たのにと、それでも何とか平野、何とか平野と、その当時の土木奉行の名のついている平野の名前を暗い中で、久志良さんは説明してくれた。

西大寺の町へ入ると、四つ辻の信号の赤も緑も、すっかり夜の光となっていた。

吉井川の橋を渡る時に、有名な会陽（エヨ）の裸祭りの西大寺の塔と屋根が黒々と聳えて、久志良さんが乗り出すように助手席からふりむいて指をさしてくれた。

運転手と久志良さんが、虫明行の道のことでもやりとりしている中に、車はむずかしい字の邑久町へ入っていた。

「それ、それ、左前方に大きく三つの灯が見えます。その中の一番手前の灯が、私の家の灯ですけん」と久志良さんは、なつかしい我が家の所在を教えられてお家のありかを確認された。ガソリンスタンドの明るいところへ出た時、ここを右へ入ると、邑久町銀座ですけん、言うて笑わされた。

今宵の宿の虫明は邑久町の小字であるときいていたので、もうすぐに着くかと思っていたが、車は走れども走れども、それらしい灯りも見えず、港ときいていたのに、反対に山道を上り下

りするので、好郎さんと私は思わず顔を見合わせた。

ちよつと灯の点々とする家並に入った時に、ここが竹久夢二の生家と歌碑のあるところですよ。もう少しゆくと鳥居が見えます。そのところに

待てど暮らせど 来ぬ人を

宵待草の やるせなさ

今宵も月が 出ぬそうな

と刻まれた碑が立っています、と言うて左手を指さされた。そして運転手に徐行するように言われた。明日は是非立ちよつて、生家と歌碑を見ようと話しあつた。

「明日は、皆さんより一足早く出て、古武先生のお墓へ詣りましょう。あの山の一番上ですよ。こうしてお花と線香を用意してきました」と紙で巻いた花をさし上げて、主幹に久志良さんは見せられた。話の古武先生は大阪帝国大学の名誉教授で、主幹の恩師でこの邑久町出身の方である。古武先生のことについて、しばらく主幹と久志良さんとの間に話が交わされた。

然し車は、坂を下ると又上つた。前方に海のあることなどの想像もつかぬ暗い山道許りだつた。

「虫明の港は、岡山藩主池田侯の一番家老伊木長門守忠親が、虫明港の守りとして勤番していたところで、藩の海軍の要塞という港町で、今夜の宿は、百石どり笹尾助之丞の屋敷跡であ

ります。虫明の町は山ふところの暖かいところが上町というて、そこに武家屋敷が並んでいました。泊る宿の松本楼は屋根は萱葺き、巡らす塀は土塀で、切腹の間が今尚残っている由緒ある旅館であります。それから、散っていなければよいが、立派な牡丹園のあるところですよ」と久志良さんのガイドぶりは仲々懇切丁寧であった。

聞いている中に、車は平坦な道を走っていた。ここも武家屋敷の跡で今は畑になっていますと話された途端に車は、やっと停った。自分達は蘇生の思いで車を下りた。そして玄関に立つた。佇った玄関のつきあたりに夜目にも明るく、真紅の牡丹が咲き誇っていた。

玄関に牡丹明るく迎えられ

先にたつた久志良さんは、牡丹はまだ散ってなかってよかったと、大きな声で出迎えの人に言うていた。

鶯張りの音がする年代の廊下を右手に、牡丹を見ながら曲ると、十畳二間の室に入った。一時間余の車の疲れを、座布団の上へあぐらをくむと、電灯に照明された数十株の牡丹が、今度は真正面から驚きと喜びの声で目にとびこんで来た。

もう一度牡丹の散っていないなかったことを久志良さんは大きな声で喜んだ。客人には大輪の艶やかな満開の牡丹は何よりも御馳走だった。

短尺に切られた羊羹が、雅な銘々皿にのって出されて、香り高いおいしいおうすが運ばれた。

この銘々皿の焼物は、京都の清水焼の流れをくむもので、伊木三猿齋が始めた虫明焼という。そして出された銘々皿は、この宿の八十歳になる千鶴女さんの作だと女中さんが説明した。お茶碗も亦虫明焼の逸品であった。

風呂が小さいので、二人ずつはいることにした。風呂から上ってくると、驚いたことには、形水さんが丹前姿で座っていた。さつき風呂場できこえた、口々に叫んだ大きな声は形水さんを突然迎えた一同の驚きの声であったものだ。形水さんは、一時間程前に着いてもう風呂はすませたのだと言って、美しい顔は額から頭にかけて湯上りらしくよく光っていた。

席について考えると、三林坊さんとは初めてであった。そして

「三林坊という名がよくつづいていますなア」というたのが、初対面の挨拶になった。何故よくつづいていますなアと言うたのは、三林坊という名を何時改号されるだろうか、いつ改名されるだろうかということが、いつも自分の頭の中にあつたからである。

「いやアーまだつづいていますよ、これからもつづきますよ」という挨拶で、二人は高高と笑いあつた。

汽車中から漁港の新鮮な魚につられてきた空腹は、風呂から上ると途端に鳴りだした。乾杯の猪口の一杯は、古い言葉ながら五臓六腑にしみ渡つた。新しい魚の秀逸は子持ち蝦蛄（しゃこ）だった。歯にかかるくあたる蝦蛄の子の味は、車中の辛抱を十二分につぐなうに余りあつた。

「旨い酒だが、何という名の地酒かきいてきてくれないか」と生々庵は訊ねていた。燭を替えてきた女中さんは、

「それは白雪です」とこたえた。

「なんだ、灘の地酒か」旨い筈だと大笑いした。

竹ペラで裂く、蝦蛄の裂き方を、手真似までして話す生々庵、細い目を愈々細めて、猪口をはなさぬ久米雄、蝦蛄については一言申す久志良。

盃の程よいところで、短尺が廻って来た、画帳が廻って来た、そして灘の地酒がホロリと廻って来た。

突然「アットおどろく生々庵だ」と生々庵が叫んだ。「実は、さっき自分の部屋へ入ったとたん、牡丹の色紙が目に入ったのだが、見覚えのある筆運びだったので、よく見ると『玉青』とあるんだ」。「ホウ、皆も知っている、川柳塔の表紙を書いてくれている先生だ」。みんなは口々の話をやめて、その話にひきこまれた。

コの子に座った宴席の真ん中に、一人座っている、年の頃なら五十を半ば過ぎた、吉元ふな

子さんという漁港にふさわしい名の女中さんと、生々庵との間に、玉青先生のことについて話
がはずんだ。

「玉青先生が、ここで泊られて、こんな歌を作られました」

ここより瀬戸が見える

白帆が通る

夢みるような

春景色

生々庵は、これは良い歌をきいたぞ、と早速手帳にその歌を書きとめて、

「玉青先生の前で知らん顔して、歌ってやるんだ」と鼻の上の皺を愈々深くして無性に喜ん
だ。そして自分で盃になみなみとついで、一気にのみほした。

生々庵はつと立って、二階から件の牡丹の色紙をもって下りて来た。

そこへさつき噂の主人公の千鶴女さんが、白い髪を茶筌にした美しい姿をあらわした。漱石
の草枕の中の峠の茶屋の婆さんを上品にすれば、この嬢になるだろう。そして何だか今にも大
髻（タブサ）に結うた、笹尾助之丞が出て来そうな雰囲気になってきた。

千鶴女さんは東京の葉専を出られた当時のインテリです、という久志良さんの紹介であった。
色紙は墨絵の牡丹に、黒井山麓、玉青と書いて、当日の同行者らしい二人の名前が並んでい

た。色紙を中にして、生々庵と千鶴女さんは物の怪につかれたように話はずんでいた。

良いあんばいに酔うた身には眠気がやってきた。きしむ階段を十二段に上ると、つきあたりが生々庵と好郎の部屋、その隣が久志良、三林坊、白柳の部屋、角に曲ってその隣が久米雄、形水、栞の室となっていた。

やがて久米雄を中に、形水、栞と枕を並べた。いつしか岡山出身の香林氏の話になっていた。最後は薄幸の柳人、香林さんであった。子供さんのなかったことが矢張り不幸なことであった。先刻止んでいた雨が一しきり時雨のように大きな音をたてた、風も出てきた。

五月というのに褥に毛布を敷いた漁港の宿は寒々と更けていった。

すれちがうものみな風をきってゆき

失明の香林さんの句が、頭の中をいつまでも去来した。

朝方になって形水も、久米雄も便所になったような気配を夢うつつの中できいた。

「団体は喧しいぞ」と白柳が隣から怒鳴った。

自分等三人は、さつきから目をさまして、朝飯までに海辺まで行って来ようじゃないかと相談していたのだ。時計を見たら六時を少うし過ぎていた。

自分等の室の真下は、丁度夕べの牡丹園で夜来の雨の雫が白玉のように光って、花卉の一枚一枚が蘇ったように一段と艶やかな色彩をととのえていた。

昨夜暗くなって着いていたので見えなかったが、今朝は夕べの話の通り、萱葺の母屋の屋根がどっしりと落着いた貫禄を見せていた。少時三人は萱葺の話をして下へ下りた。

宿の下駄をはいて、港の方へぶらぶらと歩きだした。そこへ、好郎も追いついた。見ればドテラを着て靴をはいている。大正時代の女学生は、袴をはいて靴を履いていたが、寧ろハイカラであったが、丹前をきて靴をはいた姿は、平抜きにもただけなかった。

横山製網株式会社という工場の前を通って、十分も歩くと小さな灯台のある防潮堤へ出た。久米雄さんはカメラをかまえて、防潮堤を背に私等三人を並べた。

帰り道に魚のせり市をするようなところへ出た。そこには子供二人と大人二人が魚を浅い木箱に並べていた。十五糎程の鮓このしちが新鮮な眼を開けていた。

「小骨の多い魚だからなア」と形水がつぶやいた。小舟の中では烏賊を並べていた。

「もんご烏賊」とたずねると、

「真烏賊」と答えた。

そこへ白柳がやって来た。

「愛生園の長島はどの島かいな」と魚を並べている人に訊ねた。たずねられた人は、防潮堤の向うに長く横たわっている島を指さした。

「あの長い島がそうかいな」

「そうですけん」

「それで長島か」

「王はどれだ」

しゃれではないが、黒い長島の姿が岬のように長々と横たわっていた。有名な愛生園、光明園のある長島へは、ここの港から船でゆくそうだ。

静かな朝の海の空気を破って、一艘の船がエンジンの音をこだまして出て行った。

(三)

雨に濡れた黒井山道という道標が、岐れ道に立っていた。黒井山は、昔弘法大師巡業の砌、古井戸にて、衣を洗われた、その衣をこの部落の間口というところの海中の大岩にかけて、乾かされた、という伝説で、裳掛岩というのがある。虫明が邑久町に合併前は、裳掛村というていたそうだ。毎年旧六月十七日には、お衣洗いというお祭があるということである。

夕べ暗がりて教えられた屋敷跡には、葎の広い葉が、行儀よく並んでいた。宿へかえると、自分は皆からわかれて、一人雨上りの新緑の庭に歩を移した。

松、梅、石榴、山梔、桜、柏、笹、金木犀、銀木犀、珊瑚樹、千両、万両、沈丁花、椿、蟻通、山茶花、榎、と数えてゆけばきりがなかった。若葉の緑が目をそばたてた。特に榎の若葉の美しさは、艶々しさは、得もいわれなかった。スモッグのない、樹々の青葉は、みな嬉しうだった。五月の雨を充分吸うた苔の色の鮮やかさは、ピロードのようだった。

自分は旅をすると、その行く先、行く先の宿で、ちょっとした植木の苗をもらって帰って、記念の樹にしている。今朝起きると、山を背にした周囲の樹木を見ながら、今日は良い土産が沢山あるぞと、ひとりほくそ笑んでいた。

もう一人の女中さんの姿が見えたので、厚かましく、そのことを頼むと、入れ替りに、昨夜の千鶴女さんが、手鋏をもって出てこられて、「何が良いでしょうか、好きなものを掘って下さい」と親切に言うて下さった。

流石は由緒ある庭、百年いや二百年、苔むした土に、どうしても鋏をいれられず、誠に有難いお言葉ながら、どうしても鋏をいれられないので、何でも結構ですからお願いしますと件の鋏を返すと、

「それでは後程若い者に、掘らして進めます」と言うて厨の方へゆかれた。

室へ戻ると、牡丹の正面の位置に、四、五人たむろしていた。

せんべいが出て、抹茶を供せられた。せんべいは熊が鮭を荷負うている絵であった。おや北

海道のせんべいだねとつぶやくと、よくご存知でと、夕べのふな子さんがこたえた。

「北海道のせんべいを、鹿兒島の人に供せられて、岡山で喰べるとは」

と私は思わず、口にした。因みにこの、ふな子さんは、鹿兒島出身だということを、昨夜の宴席で聞いた。

皆が揃うたので朝の膳についた。猪口を持つと女房質においても、昔からの言葉を誰かが吐いた。そして旅の宿の朝酒ほど、楽しくもまた旨いものはないと、口口に言った。

夕べの打合せの通り、生々庵と久志良は、一足先にタクシーで墓参にたった。玄関の框には、先刻頼んであった、植木が、ハトロン紙に包まれて、紐でくくられた、提げころの荷物が出来ていた。見ると、二十糶余りの千両と、沈丁花であった。千両は、つきにくい木ですから、実生がいいでしょうと言うて、赤、白の実をいれた古封筒も、添えられていた。このご親切に深く厚く感謝して、虫明東のバス停まで、吉元さんに送られて歩いた。

雨は又ポロポロして来た。これじゃ、夢二の歌碑は逆も無理だから、割愛しようと言うことになった。私は多数決に押しきられて、黙ってしまった。

バスは定時の八時三十八分に細雨に煙る、虫明の町を後にした。久米雄氏と自分は同じシートに並んだ。バスが福谷の停留所まで来ると故障した。運転手と助手は、スパナを持って車内を後ろへ走っていったが、仲々直らなかつた。退屈した乗客は三人四人と下りた。ここの農家

の庭先にも、四、五本の牡丹の花が満開だった。ここで三林坊さんは、蔦の新芽の手頃なのをとって来て私にくれた。又虎杖もとってきて、子供のように、しがんで酔っぱい顔をした。故障車は遂に直らず交替車が来ることになった。この故障については、運転手も、車掌も一言の挨拶も説明もしなかった。癪にさわって、バスをにらみつけると、バスの腹には両備バスと書いてあった。この故障がせめて、夢二の歌碑の前であつたらと思うと、残念でならなかった。

竹久夢二、その名をきいただけでも、緋の着物を着た、少年の頃の淡い惚れが、ひしひしと身に沁みだした。その夢二の故郷へ来て居りながら、その故郷の土を踏めない縁を、つくづく悲しく思った。

紫に小草がうへへ影落ちぬ

野の春風に髪けづる朝

夢二画集にあった、ある頁の思い出の歌である。

自分達が並んだシートの後の席には、二十歳前後の娘さんが、紺の服を着て座っていた。それが偶然、乗った時から、又乗りかえた時から前後だった。

「朝パラパラに傘持つな」という譬を破って、ここまで来た時には、今日の雨天はもうのがれられない雨脚となっていた。

バスは西大寺町で乗り換えて、天満屋行のバスになった。車の数はふえて、雨の岡山市は都

会の形相となって来た。

フト見ると、今度は前の席に、先刻の紺の服着た娘さんが肩を並べていた。自分達と丁度入れ替ったわけだ。後ろからは話し易い。

「虫明から乗って来たね」

「ハイ」

「どこかに勤めているんだね」

「ハイ」

「あてて見ようか」

「あててごらん」

「横山製網だろう」

「よくあたりました」

「国はどちら？」

「私は岡山よ」

「君は」

「私は山口県よ」

「そう玉江、それとも仙崎」

「先島よ」

「これからどこへ？」

「天満屋へシヨッピング」

バスは深いビルの谷間に入って、静かに停った。終点の天満屋だった。

ここで又タクシーに乗りかえて、今日の会場へ五分にして着いた。会場には、先に発った、生々庵氏と久志良氏が到着していた。雨は愈々はげしく降って来た。

この雨が今日の会の挨拶となり、自己紹介に大変役立つ五月の雨となった。そして岡山の思いは、満開の牡丹に降る静かな雨の虹のような思ひ出である。

一 笑 一 幼

この間、東京のM社の社長から、韓国で貰った掛額に

一笑一幼 一怒一老

という対句の文字があったという話を聞いた。之は説明するまでもなく、一つ笑えば一つ若くなり、一つ怒れば一つ年をとるという意味である。之を聞いた途端、これは川柳のコマーシヤ

ルになるゾとピンときた。今まで私が川柳の社会化運動に使ってきた言葉に「動物の中で笑いを知っているのは人間様だけである」とか、チャムオフト氏の「最も空費されたるは笑わざる一日なり」とか、又サツカレイ氏の「笑いなき人生は物憂き空白なり」とかいう言葉を引用して笑いの文学である川柳を宣伝してきたが、一つ笑えば一つ若くなるという、笑いにオマケがついているので「これあるかな」とホクソ笑んだ次第であった。先般Yライオンズクラブで、川柳についてスピーチをたのまれたので、

試作品として長男に生まれ

好 郎

家計簿をきっちりつけてメていず

圭井堂

間違いなやと宿題母にさし

花 村

たして二で割ればなかなかよい夫婦

多久志

赤ちゃんが突如気持の良いおなら

形 水

盗人の逃げた窓から首を出し

小松園

お寺さんスイスイと奥へ行き

いわを

倒産旋風うかつに臨休貼り出せず

静 馬

後輩にスタミナ源をすすめられ

葵 水

あと十数句、このようなユーモアな句を説明つきでしたあと、最後に、川柳の中に、誹風末摘

花（寿恵津陸花）という破礼句のあることを話して、その例句に、

枕絵の通りにすれば筋違え

という句をあげたところ、百二十人程度の会員がドッと笑った。そこで、すかさず、今笑われた皆さん方は、御経験のある方でありましてというと、またドッときた。これで二つ若返っていただいたことになりまして、本日の私の話の目的も達せられました、と笑いと拍手の中に降壇して元のゲスト席に戻ると、卓上の一輪ざしのバラの花が、笑い声で左右にゆれているのが目についた。

卓上の花もゆれてる大笑い

栞

噫 願生院文空葵水禅定門

八面六臂という言葉がある。この言葉は、垂井葵水君のために作られたような言葉である。バイタリティーという言葉もある。之もまた同君のために作られたような言葉である。

君を知ったのは、まだ数年の間しかない。然し、お付き合いは数十年の感覚である。

七面句会の席で、とびぬけて達者な句を作る人があった。それが葵水君だった。

川柳和歌山の句会の夜、二時間程早く来てくれとのこと、君の私宅へ伺った。

寂びた門と柵木の生垣に囲まれた、広い庭のお家は、和歌山市内の賑やかな小松原通りのあたりとは思われなかった。開け放たれた縁側の向うには、夏の樹木が生い繁つて、所々におかれた灯籠は苔むしていたし、手前の池水には錦鯉が遊弋していた。ビールのグラスを手にした二人は、川柳の話から俳句の話へとつきなかつた。

ふと見上げたところに「冷水荘」と横書の何とも言えぬ味のある字の額が目についた。そして八十二翁逸水と署名があつた。

之は僕の祖父さんの字で、この家はもと和歌浦にあつた別荘を解体して、ここへ、もつて来て建てかえたということを話された。

木地は古い、門を入つた時の感じから、こうして座っている感じは、正に浜の別荘に居る思いで、庭の向うから、潮騒の音がきこえてくるようであつた。その時はまだお母さんもお元気で奥さんは何くれと接待して下さつた。それから君との親交が急速に深くなつた。川柳塔社の常任理事に推薦して就任されてからの川柳への欲求は爆発した。事業は倉庫業、貸ビル、マンションと手広くやられ、和歌山ロータリークラブのメンバーとして活躍せられ、趣味の川柳は倦むことを知らず、新宮吟社の『みかん』のバックアップをされ、大会といえ、山陽、山

陰、北陸と足を延ばされた。そして遂に奥さんも、千寿子の本名で川柳をはじめられて、鴛鴦作家として有名になられた。

アルコールにも強かった。理事会の帰りには、小松園、形水等と四、五人、南海電車の終を気にしながら盃を手にした。梯子の最後は難波駅に近い新歌舞伎座の裏の昔なじみの、小料理屋であった。

気に入りののみ屋は路地の奥の奥、と良い御機嫌の四、五人は入っていった。

初恋談義

初恋の告白は酒の席でも、またバーの隅でも、よくきいたことがあるが、余程上手にやらないと歯のうくような、のろけ話になって鼻もちならない仕儀になる。それに初恋の話には、相当粉飾されたことが多くて、どこかの小説か、映画でみたことのあるような話の多いのは、けだし初恋は破れる、成就しない為に自らの慰めとして、また綺麗な思い出として、何回も話している中にいつのまにか、小説の主人公になり、映画のヒーローとなった初恋が多いと思うのだ。

自分の初恋はどうだときかれたら、満五歳の幼稚園の時に机を並べていた目の細い細い女の子に思いをよせて、千代紙をやったり、はじき玉を買いだりしたことが、初恋のはしりだったのじゃなかったらうか。勿論帰りには、手をつないで、家まで送って行ったことも思い出される。ナニッその時の癖が今も癒らず、ホステスをマンションまで送って行くのが常習となったのと違うか？ と、言われるが、昔の諺に、三つ子の癖は百迄もとは、けだしよう言つてあると感心している次第。

五歳の時の初恋だけでは、オナニーにもならないので、せめて十歳以上と想着て考えてみるとあつたあつた。十三歳の時に……考えて出てくるような初恋じゃあんまり大したことではないけれど、今から思うと当時は相当真剣だった。それは五歳上の姉の友達であつて、名は綾子というた。どうだ良い名前だろう。なんだか紫の君という感じのする娘さんだった。姉のところへその娘が遊びに来ると、僕はどこへも遊びに出ず、二階へ上がれば二階、縁側へ腰をかければ縁側と、つきまとうていたものだ。

或る日姉達は、えらい剣幕で「ウチラの側にはっかりへばりついていないで、外へ遊びに行つておいで」ときつい叱りようだったので、残念ながら、しぶしぶその場をはなれたが、今から思うと、どうやらこれから、アンネの話でもするつもりだったのだらうと思う。そうでないとあんなに叱る筈がないものなア。それから二十二歳の時に、もうこれは初恋じゃない。つまり

初恋とはプラトニックなもので、時には片思いと、年上の人に憧れた、はかない、やるせない、又楽しい思い出というものらしい。長くのびた少女の髪の匂いと、その手触りにブルブルときた。トキメキのあの頃がもう一度来ないのが残念だ。

初恋の思い出はがゆいことばかり

初恋の人に似てるとくどきだし

柳々会小浜紀行

大阪駅九時四十五分雷鳥二号のグリーン車にコンパになって納まった七人は、米原駅着締切「入れる」という席題になやまされていた。例によって、コンビの圭井堂、静馬が並び、向い側は好郎、小松園。通路を隔てて、形水、葉、前は葉子さん一人という座席。空席は、多久志が乗る筈だったが、敦賀に用事があつて、昨日から先行して昨夜は敦賀泊り、今朝十一時三十分九分に敦賀駅で落ち合うことになっている。この旨を幹事役の葉から一同に伝えると、

「それはようある術や」

「旨い具合に敦賀でよかつた」

「広島やったら、こうはゆかぬ」

「行先はどうにでもなるさ」

と経験者は、語るに落ちる半畳を口々に入れた。

京都を過ぎた頃、小松園から飴が配られたが、匂はさっぱり出来ない。

葉子さんは煮ぬき卵の皮をむいて配給してくれる。飴と卵が口の中で変な味となる。能登川を過ぎて、間もなく彦根城の見える頃、心配していた天気が、本日は小雨なりという烙印を捺してくれた。

何んだ、かんだと言うていても、米原へ着くと約五十枚の短冊が集まった。敦賀迄二十二分大急ぎで清記互選する。題の割に案外真面目な匂が並んだことは、自称紳士の集まりか。

入れ知恵とわかる代理の吃りよう 好郎

係りへのリベート入れた見積書 同

当選祝一票入れた顔で来る 同

大入りのわりに売上げすくなすぎ 静馬

大鳥居入れたら顔が小さすぎ 同

入れかけてみたがつづかぬ貯金函 圭井堂

入れ知恵もみなチヨボチヨボですぐにばれ 同

月光をベッドのそばへ入れさせる
小松園

近所への気兼ね黙って入れてやり
同

恥かかぬように財布へ入れてやる
形水

金入れる程の才能見当らず
同

北風をいれて心をととのえる
葉子

入れかわりたちかわり孫が来る客間
葉

十円入れて按摩機へ目をつむり
同

入れたはずやとひっくり返す旅靴
同

改札には、レーンコートに身を包んだ、多久志が一行を待っていた。

自動車車を二台連ねて、先ず氣比神社へ参詣する。ここは長生きの神様で、長命の井戸がある。我れ先にとその井戸の水をがぶがぶとのむ。これ以上長生きしたいとはあさましい。氣比の松原は人口五万余の敦賀が誇る景勝の自然公園であった。敦賀、小樽間のフェリーコースが出来て、近時發展途上にある良港の街の噂を、運転手と話しながら美浜港に着いた。日曜日の三方五湖巡りの定員五十五名の船は三つの棧橋から、小雨に煙る湖上へと、発着して大変な賑いであつた。

中食を虹岳（こが）島荘のスエヒロでとる予定の我々は、地図の…の裏見川をもう一度見た

かったが、久々子湖、水月湖、三方湖、菅湖を廻って、虹岳島で下船した。傘をさしても、ささいでもという天気で、フト見つけた薊の花の色に、島に上ったという感じを深くした。

虹岳島荘は荘の名にふさわしい、民芸風の建物で、部屋は水月湖に突き出っていて、造作も民芸調で、皆の気に入った。昼食は

噛めば噛むほど

ピフテキ程に

ふかい味ある肉の方

そんなあなたがなげスキヤキに

私しゃコンロで熱くなる

こんな音頭の、ピフテキにビールの満をひく。給仕の女中さんは、若狭生まれの若狭育ちという娘で、一言いう毎に、傍の者の背中を叩いて喜ぶ賑やかさに、ついつりこまれてポチ袋に入れたチップに、それではお粗末と小松園が偶然もっていた、大きなし袋に、二重袋にして渡すと、「これはこれは、重ね重ねの御心付、誠に有難うございます」という、ウイットに一同今夜はここで泊まろうやと湖畔の宿が大気に入り込んだ。

クラクションの音に、残念ながら座をたつて、車の人となる。今夜の宿泊地小浜の青浜館は曾て、陛下のお泊まりになったところ、その部屋が開放されているというのが、今度のこの一

泊旅行の目的の一つとなつてゐるのである。一時間余にして、青浜館着、小浜湾に面した十畳二間の室は、御殿襖に緋の房がついてゐた。洋服箆箆にもやっぱり緋の房がついてゐた。女性用の桐の和箆箆もおいてあつた。

昼のビールがたたつて、もう句会をやる元氣もなく、湯から上つて、宴会の六時まで、各自暫しの睡眠をむさぼつた姿を見て、齡は争えぬとみたは葉子さん一人であつたらうか。

夕食は、海幸の料理、流石若狭湾をひかえただけに、新鮮さと量で満足させてくれた。

ここは梅田雲浜先生の出生地とて、芸者のひく三味線は、

妻は病床に臥し児は餓えに泣く

の詩吟入りであつた。

八時に散会して、一同部屋に戻ると、按摩をとつて、コテンパーン。これもよる齡波か。

「葉の軒が、一番大きいな、しかも往復やつた」という声で目が覚めた。

九時四十分、蘇洞門（そども）観光の船が宿の裏から八人を乗せて出た。今朝はすっかり晴れて、静かな日本海になつてゐた。鋸崎の灯台を左に見て、松ヶ崎を出ると、先刻ほめた、日本海のうちねりがきつくなつてきた。やっぱり湾と外海とが、はっきりわかつた。例によつて、どこにでもある、亀石やライオン岩の説明があつたが、あみかけ岩だけは、他で見られない、そのものずばりに感嘆の声をあげた。私達の雇つた船は、六十余りの船長一人だが、舵を片手

に、マイクをもって、汐に鍛えた良いのをきかせてくれた。

「今日は運の良い日で、蘇洞門へ船が横付け出来ます。波の荒い日はとてもとても、傍へも寄れません」というて、洞門の棧橋へ、エンジンの音をゆるめて入って行つた。花崗岩の柱状節理で出来た大門、小門をバックに思い思いのポーズでシャッターを切つた。水は綺麗に澄んで底の底まで見えたが、魚は見えなかつた。聴て船はバックオーライと、後ずさりに棧橋をはなれた。

「よくもまあ！」と釣りの名人の圭井堂が声をあげる程、小さな岩礁に、一人二人と磯釣りの人達が散らばっていた。

帰りの船は、他人のおらない気安さで、誰が歌いだしたか、なつメロがとびだして、果ては小学唱歌から軍歌まで、船頭さんが気をきかせて、マイクを船室へ入れてくれたのには、恐縮した。

十一時半再び船は無事、元の宿の裏へ着いた。

「海のある奈良」というキャッチフレーズの小浜市は、国宝や重要文化財のお寺が沢山ある。予定通り、お寺巡りを、ハイヤー二台に分乗して出発した。

「最後はお寺詣りか」

「そろそろ行くこうぜ」

口だけは達者な連中だ。

先ず明通寺に詣る。苔むした高い石段を登る。若葉の中に埋もる鎌倉前期の栓皮茸の三重の塔が最も印象的だ。拝観者は若いヒッピー風の外人のアベックと僕らだけ、閑かなことこの上なしだ。帰りに庫裡をのぞくと、大黒が一個三〇〇円の土産人形を、せつせと拵えていた。待たした車を次の寺、万徳寺へと走る。茅葺のどっしりした田舎家がところどころに見えるのが珍しい。夜は蛍が飛び交うという話を運転手は当然のように言う。

万徳寺は、埋石式庭園と天然記念物の「山もみじ」があるお寺だ。本堂は上にあつて、扉が開いているから、勝手に入って拝んでこいという。成程扉があいているが誰もいない。和尚の座る赤い座布団の上へ葉子さんは座つて、横の鐘をカーンとたたく。明通寺よりはここは俗寺だ。道端に蛍草が今を盛りと咲いていた。記念に採ろうとしたら、多久志は今度持つて来てやるからと言う。あれから一ヵ月楽しみに待つているが、まだ持つて来てくれない。

次は神宮寺だ。ここは奈良のお水取りの水を送る若狭井のあるお寺だ。神仏合体時代の重文で、男神女神を祀った文字通りの神宮寺であった。ここの拝観者は、東京から来た女子大生二人と私らだった。本堂へ上る時、先に乗った件の二人は、私らの為に、ジャパニーズスリッパ(藁草履)を箱から出して揃えてくれたのには感激した。男の学生に混じってゲバ棒を振る学生もあるかと思うと、些細な親切で人を喜ばせ、文化財の研究に二日も三日も泊りこんでいる

若い人のあるのを、如実に見た時、今日の日本の表裏を、まざまざと知った感じであった。

案内の僧の、もの言いと態度が、中学時代に習った体操の先生そっくりで、薙刀を持たせて高下駄を履かすと良く似合うだろうと想像しながら、いつの間にか降り出した、霧雨に煙る前庭の広い芝生の上へ下りていた。

この他、羽賀寺、妙楽寺、姫彦社等とまだまだあるが、今日はこれまでと、駅前通りの喫茶店、クロンボでとりあえず、コーヒーをのむことにして車を捨てた。

思うと、どのお寺も、参観料は五十円均一であった。京都、奈良のあこぎな参観料と思ひ比べて純朴なお寺と共に、派手な宣伝をしない昔ながらの白壁土蔵のある、小浜市を立ち去りかねる心で、雲浜先生の銅像を見上げていた。川柳文学の堀口塊人氏は当地の出身ときいている。四時十九分小浜発敦賀行きに乗車した一同の鞆は、名産笹漬と蒲鉾でふくれ上がっていた。敦賀発六時九分の雷鳥四号に乗った時は、誰も句会のことはおろか、ものも言わぬ程疲れていた。ひとり小松園だけが隣に座った婦人と、手振り面白く話しているのが、後ろの席から見えていた。

八時七分無事大阪駅に着いて、目出度く解散したが、それから一週間程して、一杯を嗜む好郎から、笹漬の味が酒とマッチする旨さの電話があった。

山陰紀行

——山陰觀桜川柳大会

新大阪駅集合は四月十五日午前九時。つき子さん、岳人君、天笑君、百酒君。珍しく早々と小松園君がやって来て今日の雨の原因はこのためと毒舌も出る。

指定席が入手できず岡山までの五十八分は立ちん坊覚悟の上ながら、矢っ張りつらかった。むし暑い車内で、天笑君から冷たい缶ジュースが配られた。若いながらよく氣のつく人である。

三石のトンネルを出ると、早や雨の岡山駅へ着く。

乗り換える、伯備線は九番線だ。

ここでも指定席券を持たぬ我等一行は、ドヤドヤと、自由席へ乗りこんだが、之また満員で赤字国鉄は嘘のようである。もう立ちん坊は嫌だ、食堂車、食堂車という合言葉で、ホームへ降りて食堂車へ走る。食堂車は汽車が発車しないと、入れてくれない規則で、三分程入口で待たされて、ゴトンとゆれると同時に六人は一番乗り。四人掛のテーブルに三人ずつ二組がコンパに座って、先ずビールだ。一人前九〇〇円以上が税金つくからとの含みで、岳人君が勘定係になって、チーズからサンドイッチと、こまこま注文して、新見着まで一時間二十分を、ここ

動かしという算段である。

雨に煙る倉敷の家並みも、高梁の城趾も、ビールと雑談の中に過ぎて、特急やくも一号は四分延着の十二時七分、新見駅の構内へ入った。ここで芸備線に乗りかえる。

乗り換えた、芸備線は、二輛連結で、一輛が指定席、一輛は自由席となっている。綺麗な方のクッションの良い席を探したが、ここでもまた満員だ。思えば今日は土曜日である。仕方がないから、汚い方の悪いクッションの席が、ガラ空きだから、その方へ陣取る。各自の鞆から二合壺が出る、ウイスキーが出る、おつまみが出る、雲丹も出る、とやりだしているところへ、専務車掌が乗車券拝見に廻って来て、ここが指定席だという。

「ギョッ、ギョッ、ギョッだ」汚い方が一〇〇円出す指定席で、美しい方が自由席とは酒の味の変わる思い。泣く子と国鉄さんには勝てんから、仰言る通りに払う。

「やまのゆ」と銘うった、二輛連結の急行列車は、山また山をぬけて、一時間五分で、備後落合へ到着。ここで五十四分の待ち合わせで、木次線に乗り換える。昼中とはいえ、山の中の雨の駅はまことに侘しい。

それでもホームに売店があつて、おでんそばを売っていた。早速六人が群がる。

五十を過ぎた許りの婆さんが二人、聞きかえしてもわからん言葉で、おでんそばをこしらえてくれた。おでんそばというのは、そば台に、半分のちくわと玉子の煮ぬきと色蒲鉾一切と入っ

ていて、一〇〇円である。すこしぬるかったが、ビールと酒で奈良漬のようになった腹には旨かった。横にコップをそえた水呑場があった。蛇口をひねると、清冽な水が迸しつた。冷たい。婆さんにきくと、山水をひいてあるんだと言う。グッと一のみもう一杯。

十四時九分発の木次行が向う側のホームに入つて来た。傘をさして渡る。列車はガラ空き。列車の中へぬれた傘を、ひろげたまま乾かす。まことにローカル線の有難いところである。岳人君は肱掛に顔をのせて、さも考えているような格好で眠っている。小松園君は週刊誌を見て一人悦にいつている。あとの四人は明日の兼題の作句だ。雨は止まない。車窓に、斐伊川（簸の川）が、神話の八岐の大蛇のように蛇行して、素晴らしい景観をそえている。些か退屈して、人恋しくなった頃、列車は出雲横田に着いた。きけばここには高等学校があるそうで、学生さんが沢山乗ってきた。あわてて傘をたたむ。前の座席に女学生が座った。雲州算盤や、鬼の舌震の話から、鳥取大学へ入学したことまで、次から次へと話して、彼女は出雲三成で降りて行つた。

いつしか雨は止んでいた。十六時、待望の木次駅へ着いた。改札を出ると、明朗さんと正朗さんが、固い握手の中に出迎えて下さった。雨上りの綺麗な歩道を向うへ渡ると、観桜の舞台、斐伊川の桜の堤であった。

へ桜ごころは嵐にゃ散らぬ

木次桜はなおさらに

と人情豊かな唄を書いた雪洞に、折からの夕風に花吹雪となつて散つていった。溪谷をぬつていた美しい水の流れの斐伊川は、ここでは悠々と平野を行く川となつていた。

桜の堤を三〇〇米程あるいて、堤を下り、県道を横切つて少し入ると右側に、堀江正朗さんの、お家があつた。家の前迄出迎えられた芳子さんは、小走りに走つてきて、一同に抱きつかん許りの感激ぶりの歓迎であつた。あとで、岳人君は、小松園さんと芳子さんとは初めての出会いだときいてびっくりしていた。匂につながる縁は、遠くはなれていても、一瞬にして、熱い血潮のたぎるものがあつた。家の中には、路郎先生の短冊を初め、白柳さんの軸や、その他の柳人諸氏の短冊がかけられていた。芳子さんの御手前で、おいしいおうすを、二ふくずついただいて、旅の疲れが、すつとんでしまった。一時間程にして、正朗居を辞し、再び桜の堤を歩いた。

町には桜祭りのピラが戸毎に貼られていて、木次の町の自然を愛する心と、四季の移り変わりを楽しまれる余裕のある、一万三千人のこの町の人達の恵まれた環境を心から羨ましく思った。

今夜の宿は、料理旅館畑旅館であつた。廊下づたいに、奥に入ると、池があつて、澄みきつた水に、真鯉と虹鱒が、喜々と遊弋していた。奥の離れに靴を脱ぐと、そこは十畳と八畳の二

間つづきで、両側に前栽のある、明るい良い室であった。

明日の司会をする、勇さんが見えて、七時半から歓迎宴をするという、あたたかい言葉に恐縮した。

表座敷の広間に集まると、立派な御馳走が並んでいた。特に鯉の卵でまぶした、鯉の糸作りには一同舌鼓をうって、盃を重ねた。

明朗、白汀、正朗、清泉、勇、芳子、秀子、孝華の諸氏のサーブスで、宴正に酣の時、正朗さんの娘さんの初子さんが端麗な容姿に、綺麗な瞳をかがやかせて、臨席して下さった。一同賞讃の声を発するやら、喜ぶやらで、宴は正に最高潮に達した。

十一時お開きになって、就寝。

朝食をすませて暫くすると、緑之助さんと水客さんが正朗さんの案内で見えた。緑之助さんとは、去年の九月以来だった。来年五月の緑之助さんの句碑建立の話の色々とした。そして当日は川柳塔社から、すくなくとも三十人は出席するでしょうと話した。

十一時過ぎに一行は会場へ着いた。既に五、六十人の人が席題にとりくんでいた。

大阪組の席は正面に設けられていた。即ち小松園、水客、天笑、百酒、岳人、栞の六人に、つき子さんの弁天一人が入って、期せずして正に七福神が、正面に並んだことになった。はからずも、今後のむらくも吟社の益々栄えることを寿ぐ、七福神の列席であった。

紅一点のつき子さんは、席題「根負け」の選者として、立派な披講をされた。

十二時四十五分にメ切られた、兼席題は、勇さんの、ソフトタッチな名司会で、スムーズにしかも和やかにすすめられた。私達は懇親宴にも臨み、用意の車をいただいで、十六時四十一分の急行、ちどり二号に乗れたことは誠に有難いことであった。

大会の模様や句報は、むらくも吟社の方で、委しくされることと思うので、ここに割愛する。十八時二十四分、列車は米子駅についた。出迎えの瑞枝さんと悦子さん、同行して下さった、孤呂二、鶴丸、竹馬さんと松江から乗られた通児さんとの一行は、三台の車で、今夜の宿皆生温泉弓ヶ荘へと走った。

夕食には、米子の皆さんも付き合って下さって、今夜もまた賑やかな宴会となった。

千代さんからの差し入れだと言って、露の臺と蟹の卵のあえたのとおいしいお漬物が出された。珍珠とはこのことで露の臺の香りが今尚口の中に残っているような気がする。

九時半、アルコールにほてった頬を、皆生の浜風にふれんものと、一同十二人は松並木をぬけて浜に出た。海岸に立った、つき子さんは、父はこの隣の、淀江の出身ですのと、暗い夜の海をジッと眺めていた。それから春宵一刻の皆生の灯の街を流して、米子組の三人の方と別れて宿に帰った。

翌朝九時半、宿を出て出雲清水寺へ松江の二人の案内で参詣した。こんな山奥と思うところ

に、立派な三重の塔をもった清水寺を、苔むした石垣の上に拝んだ。

登りつめた息づかいを、清凌亭で、羊羹とお茶で咽喉をうるほした時は、柳友の友情をしみじみと嬉しく思った。

清水寺の下の売店に預けた鞆を、各自持った時、ここで、新築の鶴丸居を訪問する、小松園、天笑、つき子さんの三人と松江の二人と、百酒、岳人、栗の三人と袂を別つことになった。

十一時四十分、米子の駅へ着いて暫くすると、瑞枝さんと竹馬さんが見送りに来て下さった。十二時六分発やくも一号は相変らずの満員でここでも食堂車にもぐりこまねばならなかった。

瑞枝さん等の下さった、ウイスキーを高々とかかかて、窓のあかない食堂車から、お見送りのお二人に厚く厚く御礼のゼスチャーを何回もした。間もなく列車は、岡山へむけて発車した。美しい瑞枝さんの顔がだんだん小さくなって、やがて見えなくなった。

今度の旅行について、木次の方々、松江、米子の皆さんに大変お世話になりました。茲に謹んで厚く御礼申上げます。

喋らん漫才師

上六から近鉄電車に乗った。ふと見ると筋向いに、漫才師の、ラッパさんが例のスタイルで、歯を出して目をつむっていた。相手役の日佐丸さんとはあたりを見ると、丁度自分の横に座っていた。日佐丸さんは目を開けていた。そこで次のような駄句が出来た。

電車では別れて座る漫才師

漫才師電車の中で目をつむり

右の二句を紙片に書いて、隣の日佐丸さんに渡すと、一読してすぐにポケットに入れた。それから暫時して又ポケットから出して読み返していた。何か言うかと思つたが、一言も言わずに二人は八尾の駅で降りた。喋ることを商売にしている人は、銭にならぬことは喋らんものだと感心して後ろ姿について下りた。二人は多分農協の演芸に出るのだろう。

足早に踏切を渡って行った。

眼鏡談義

私は中学校の一年生から、三十度の眼鏡をかけ始めまして、現在右眼十度、左眼九度の眼鏡をかけています。最初かけた頃は、赤銅縁の玉子型で、それから縁なしの眼鏡になり、四年生頃にロイド縁が流行りだしたので、太い黄色のロイドをかけて登校したら、長谷川という先生に、生意気だ、赤銅縁に替えて来いと、ひどく叱られたことを憶えています。私と眼鏡は一体であって、私はこの世の中へ、眼鏡をかけたまま生まれて来たのではないかと、思うております。と申しますのは、眼鏡をかけた顔と、眼鏡をはずした顔が、全然違うのです。家内などは、妾の聳さんと違うみたいやというし、子供達は、お父さんは眼鏡百貫やというので、私はどんな時でも、眼鏡をはずしたことがあります。

軍隊にいる時は、眼鏡をかけて寝ておりました。故国の夢をみる時、眼鏡なかったら、夢に見る故里がはつきり見えないからではありません。敵襲や、非常呼集の時に、眼鏡の見つからん程、周章てることがなかったからです。

バーや、小料理屋へ行った時に、仲居や、ホステスを笑わす、とっておきの話があります。

それは私は風呂の中でも眼鏡をかけて入る事です。事実銭湯へ行つた時に、今晚はと挨拶されても、一寸はなれていると、誰方に挨拶されたのか、はつきりしない時があるのと、眼鏡一つで全然人相の違う私ですから、先方の方から、しげしげ見られて、人違いかと思ひましたなどと、言うことになりますから、家風呂は別ですが、銭湯とか、温泉へ入る時は必ず眼鏡をかけて入ります。風呂の中へ眼鏡をかけて入る話をする時、ホステスは、眼鏡のレンズ曇らへんか、必ずききますが、水晶玉やから、ドイツのツァイスのレンズやから、と言うと一応納得してくれますが、実は眼鏡を一度、水か湯につけると、其の後は全然曇りません。然しその後が面白い。眼鏡かけて入らしたら、顔洗う時に不便でっしゃろという質問がとびだして来る。左様正にその通りで、この間も眼鏡かけんと入ったら、えらい失敗しかしたのやと言うのは、一生懸命、脚を洗っていたのだけれど、どうも感覚がないので、おかしいな、脚気になったのと違ふかと思つて、膝ポンのところを、ボンボンと二、三度たたいたら、隣の人の脚やったんやという時、最初はマトモにうけて、きいていた連中も、マサカと言うて大笑いになる話であります。

それから、今度は頭を洗っていると、大分うすくなつてはいるが、こんなに、禿げていなかった筈やがと思つて、ツルリと撫でると、今度は左隣のお爺さんの頭やつたという時、もうええ、もうええと必ず手をふられるのが、この入浴と眼鏡の私のおきの話であります。

冗談は、この位にして、調べてみると、眼鏡が初めて作られてから七〇〇年になるそうです。然しながら、我国では、それより七〇年前に、今でいう、コンタクトレンズが發明されています。それは、源頼朝が、奈良の東大寺で、大仏供養を行った時に、一怪漢が宿舎に、忍びこんで、彼を刺そうとして失敗したことがあります。捕えてみると、黒目の白濁した盲人でありました。然し鎌倉へ送って、詮議してみますと、実は、平の景清で、両方の黒目に魚の鱗をはめて、盲目を装うていたことが判りました。

成程こうすれば、他人には盲目に見えて気を許されるが、当人の方からは、たとえばやけていても、様子を伺えることが出来るわけであります。この秘法は、伊賀流や甲賀流の忍法や、武芸書にも伝えられているということでもあります。

眼鏡が初めて、使われたと文献に出ているのは、イタリアであります。が我国のウロココンタクトは、それよりも一世紀も早く、又今日のプラスチックコンタクトよりは七世紀以上も古いこととなります。

日本に初めて、眼鏡を伝えたのは、例の宣教師の、フランシスコ・ザビエルで十六世紀の真ん中頃だったのです。現在眼鏡の残っている一番古いものは、京都の紫野大徳寺内の大仙院に、足利義晴の遺愛品の眼鏡が所蔵されていることでもあります。ともかく、昔の眼鏡の代表的なもの、大久保彦左衛門や水戸黄門さんでしょう。

面白いことに、明治初期には、「眼鏡いらなかね」と行商人が売って歩いたということでした。尤も売り歩いたのは、特定の眼鏡屋が非常に少なかったためであります。我国での眼鏡つくりの元祖は、江戸の朝倉松五郎という人でありました。彼は明治六年に、政府から、オーストリアのウイーンに派遣されて、同市の眼鏡師クリュウネルトについて、眼鏡製造技術を習得しております。それまで眼鏡というと、すべて老眼用の凸レンズだけで、度数も三段階で、初めの度の弱いのを、初老、次のを中老、一番きついのを大老という、まるで幕府の役職名のような名前で呼ばれていたそうであります。

へゴールド眼鏡のハイカラは、都の西の目白台、女子大学の女学生、片手にバイオリン、ゲーテの詩、口に唱える自然主義—というのは、明治四十年代の流行歌「ハイカラ節」の一節であります。最近は眼鏡も、色々出来て、オシトン、ポストン、ウエリントン、フォックス等々で、余り変種が多くなり、専門店ではそれ以上は番号で呼んでいます。唯今では九十六種類あるそうです。

黄色い顔に眼鏡をかけて写真機をぶらさげていれば、日本人ときめて間違いないということに欧米ではなっているそうです。佐藤元首相時代、佐藤さんが壇上で、一席ぶって、自席へ戻られたが、演壇の机の上へ眼鏡を置き忘れたそうです。このように、眼鏡を忘れるようでは、今後の政府の見通しが、ハッキリせんのじゃないかと専らの噂でした。佐藤さんの眼鏡

は老眼鏡であります。私のは近眼鏡であります。然し十年程前から、老眼が入りまして、近くの新聞、雑誌を読むのに、却って邪魔になりますので、レンズの上下に動く眼鏡を使用しています。或る医者に診てもらった時に、あんたの眼は、近視と遠視が丁度一緒になって、眼鏡のいらぬ時は、九十八歳位でしようと言われたことがあります。

眼鏡のいらなくなった時は、命の方が先になくなっていてと大笑いしました。が百歳の人が日本に七十何人かいるということを書いて欲をだして眼鏡のいらぬ時まで、川柳を作りたいものと思っております。

寄附帳へ眼鏡かけたりはずしたり

栞

跋

文は人なり

というビュツフォンの名言を、身近に際限なしに味わえるのが川柳塔の毎月の巻頭言である。われわれは、中島生々庵前主幹の、謹厳の裏にひそむユーモアと、西尾葉主幹の和顔の裡にひるがる詩情を親しみ愛して来た。殊に葉主幹の筆は、近来、融通無礙、白雲悠々の姿を思わせ、ユートピアに近い心の綾を感じさせる。

このたび、その巻頭言を主にして文集が発刊されることになった。

「葉先生、先生が一番自慢に出来ることといえれば何ですか」

という不躰な質問をしたとき、たちどころに返ってきた言葉は、

「母に十分な孝養を尽くせたことです」というのであった。

張り替えた障子の中に母います

人生の根本に孝を据えた葉先生は、やさしさに満ち満ちている。母上に対しての孝心が妻子に向けられると、このような句になる。

最後の最後の味方は妻なりき

意見する儂がまだまだ遊びたし

それが家族にも、川柳人へも、また社会へと広げられて行き、幾多の句となり文となる。

葉先生との出会いは昭和三十一年、川柳を知ったばかりの療養中であった。のっけから指導を受けたから先生には違いないのだが、私には早くから親戚の伯父さん以上の絆を感じていて、その庇護のもとで分に過ぎた我儘を続けさせてもらって来た。句集「愛染」の序文も頂いた。今その師に跋文を書くありがたさに浸る。私の感慨をご想像下さい。

葉先生は、昭和六年の天神祭の日に創立の阪大川柳会で、麻生路郎先生の指導を受けられたのが川柳への第一歩であった。当時、俳誌「山茶花」に投句をされていただけに、初の例会で、温泉や座り羅漢に寝る羅漢

の句が第一席になり注目される。まだ佐野菜の独身時代であったが、

若旦那女将が出ると他愛なし

段梯子女将眉間で何か言ひ

のようになませた句も成し、大阪帝国大学医学部の教授・助教授たちと膝を交じえたエリート集団の中で川柳修業にいそしまれた。

川柳歴四十年目に句集『水鶏笛』を刊行、五十年目に、

一步出ずれば我れ旅人となる心

の句碑を、河内西国第一番の札所、聖徳太子第二霊場の大聖勝軍寺山門脇に建立された。川柳塔の巻頭言は、その昭和五十六年の夏から、生々庵前主幹に続いて書きはじめられたものである。

この文集を読めば、栗主幹が、路郎先生の「川柳は人間陶冶の詩」の訓えを実践し、こだわりのない心を養い、川柳塔の和の精神を育まれたことが理解出来るでしょう。そして、数多くの旅をたのしみ、人格、器量を培われたことが分かるでしょう。主幹ともども旅をしている気分を誘い込まれてしまう。

栗主先生は、喜寿金婚を迎えられたのが昭和六十年、木杯台付を受けられた叙勲の秋は、昭和六十三年であった。

今や八度目の酉年を迎えようとしておられる。

元日や我れ泰山の如く座す

葉先生ご夫妻はいよいよご加餐あつて、高砂の翁媪を全うされ、川柳の誉れを彌高めて頂きたく切にお願い申し上げます。

平成四年十二月

橘高 薫風

あとがき

佐々木邦の、親鳥子鳥や愚弟賢兄等を愛読して、こんな小説を書いてみたいと思いつつも書けなかった私は何時の間にか、川柳のジャンルに入っていた。

『川柳塔』という柳誌の主幹になって、毎月巻頭言を書かねばならなくなって、もの書きのむづかしさを知ったが、そんなことを言うてもおられない。毎月編集部から、矢のような催促をうけて、かちかち山の狸のような火を背負うて刹那刹那の愚作を送った。その愚作の一部と旅の好きな私は旅で拾った物語を書いた拙作を、今度読売カルチャーの講座生の皆さんにすめられてまとめてみた。

すると好運なことに、東野大八先生が、じゃ俺が序文を書いてやる、印刷所も世話してやるということになって、トントントン拍子に軌道にのった。

そして薫風さんが跋を書いてくれるは、又旧知の斉藤清幸氏と柳誌『鶉かご』の主宰の佐藤一粒氏の思わぬ助太刀を得て日の目を見る倅となった。

著者近影の写真は写真家福本直喜氏の撮影になるもので「大阪の人」というジャンルの展覧

会に出品されたのを載せたので氏に感謝の言葉を申し上げたい。

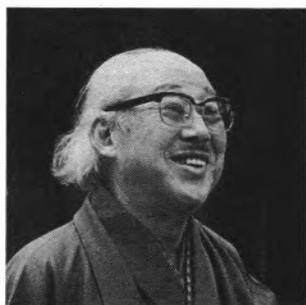
何回かの校正に、田中正坊氏、奥田みつ子さんにご厄介かけたことを篤く御礼申し上げます。最後に文化出版株式会社の東氏のお骨折りに対して深甚の感謝を申し上げてペンを擱く。

もの書きの妻叱られて叱られて

栞

平成五年彼岸すぎ

水鶏庵 栞 識



柳 歴

明治42年 3月 6日生

昭和 6年 7月 阪大川柳会入会

昭和35年 3月 川柳不朽洞会理事長

昭和57年 7月 月刊誌「川柳塔」主幹、理事長

平成 4年 6月 社団法人全日本川柳協会常任幹事

水鶏庵こらむ散歩

印刷 平成五年 四月二十七日
発行 平成五年 四月三十日

著作兼
発行人 西尾 葉

発行所 川柳塔社

〒545 大阪市阿倍野区三明町

二一〇一〇一六

ウエムラ第二ビル二〇二号室
電話 (〇六六二九一六九一四番
振替口座 大阪 81333366番

印刷所 文化出版株式会社

〒484 犬山市上野郷一三八二一

定価 二〇〇〇円